乙女のお悩み

JKSH

２００５年6月４日

乙女のお悩み

目　次

乙女のお悩み

乙女のお悩み－姉妹の場合　…… 5

１．真夜中

２．憂鬱

３．再びの憂鬱

乙女のお悩み－もう一つの物語・芽以の場合　…… 67

乙女のお悩み－もう一つの物語・結衣の場合　…… 83

乙女のお悩み－もう一つの物語・夏帆の場合　…… 105

乙女のお悩み・番外編

もう歯医者さん行きたくないっ－由紀の場合　…… 129

恥ずかしい－奈菜の場合　…… 143

カルテ　…… 163

乙女のお悩み

乙女のお悩み－姉妹の場合

１．真夜中

「ぐすん、シクシク‥‥‥」
「いたいょぉ〜、エエン、エッエッ」
　愛美は、二段ベットの下から漏れてくる泣き声で、ふと目が覚めた。希美が泣いているらしい。愛美は上段のベットに見を起こし、枕元の目覚まし時計を見た。時計の針は午前３時を指している。愛美は、二段ベットのはしご越しに身を乗り出し、下段の希美に声をかけた。
「希美、どうしたの？　どこか痛むの？」愛美の声を聞くと、希美は、「エッエッ、お姉ちゃん、希美、歯が‥‥‥、歯が痛いの」と、右の頬を手で押さえ、目に涙を浮かべて答える。愛美は、上段からはしごを伝いフローリングにおりると、蛍光灯のスイッチを点け、下段ベットのパジャマ姿の希美を見た。こころなしか、右頬が腫れているようだ。
「希美、お姉ちゃんに見せてみて。はいア〜ン‥‥‥」
　希美は、愛美に向かって口を開ける。
　希美の痛がっている右側をみると、下の６歳臼歯に大きな穴があき、黒茶色く変色している。どうやら前に治療したインレーがとれたまま放置していて虫歯が進行したらしい。いかにも痛そうに見える。
「いつから痛いの」
「エッエッ、４月頃詰め物がとれちゃって、１週間くらい前から、染みたり、チクチクしたりしてたんだけど、夕べベットに入ってから１時間くらいたった頃からズキンズキンし出して‥‥‥、痛くて眠れなくて‥‥‥」
〝夕べベットに入ったのはたしか１０時くらいだった‥‥‥。１１時くらいから痛かったのか‥‥‥〟
「もっと早くお姉ちゃんにいってくれればよかったのに」愛美がいうと、「だって‥‥‥」と希美の後の言葉は途切れる。

〝何とかしなければ……。そうだ、確か薬箱にママのコンジスイがあったはず……〟
「待ってて。下からアイスノンとコンジスイ持ってくるから」
「うん、ぐすん」希美は、涙目で答える。
　愛美、希美ふたりの姉妹の部屋は二階にある。愛美は姉妹の部屋のドアを開け、廊下に出た。一階で眠っているパパとママを起こさないように、足音をたてないようにして階段を降りた。そのまま、冷蔵庫のあるキッチンに向かう。冷蔵庫からアイスノンを取り出す。キッチンから居間に入り、灯りは点けずにタオルと薬箱を探す。タオルは見つかったが、薬箱はなかなか見つからない。ゴソゴソしていると、両親の部屋が開き、ママが出てきた。ママはトイレに行こうとしていたみたいだったが、愛美に気づくと居間にやってきた。
「愛美、何してるの？」
「あっ、ママ」
「希美が歯が痛いらしくて。アイスノンとコンジスイを取りに来たの」
　ママはかわいい系の美人で目はパッチリとしていて、３７歳だが２０代に見えるほど若い。ママは笑うと、明眸皓歯ということばを地でいくように白い歯がこぼれるが、実は驚くほど歯が悪い。笑顔からこぼれる白い前歯はすべて差し歯である。下の前歯４本以外は全部虫歯で治療していて、奥歯もクラウンやインレーがいっぱい入っている。神経のない歯の方が多い。いつもどこかのインレーがとれたとか、ここが具合が悪いとかいってかかりつけの歯医者に治療にいっている。だから娘たちの歯の健康には気をつけているが、姉妹はこんなママに似ていて、歯が弱い。
「まあ、こんな夜中に困ったわね。コンジスイの入っている薬箱は、テレビの横あたりにあったはずよ」ママはテレビの近くに行き、薬箱の中からコンジスイとピンセット、脱脂綿、それと痛み止めの薬を取り出した。そしてキッチンに戻り、流し台の給湯器をぬるま湯にセットしてコップにお湯を注いだ。

「愛美ちゃん、早く希美ちゃんに応急手当をしましょ」
「はい、ママ」
　ママと愛美は急いで二階の希美のところへいった。
　部屋に入ると、希美は右頬を押さえながら半べそをかいている。
「ママ〜、痛いよぉ、エッエッ」
「希美ちゃん、応急措置をするから大丈夫よ。まず、痛み止めを飲んで」
　ママは希美に、痛み止めの薬とコップを渡した。希美は痛み止めの薬を口に入れ、コップのぬるま湯で飲み込んだ。痛む歯が染みるのか、うっと顔をしかめる。
「あらあら、ごめんなさい。染みないようにぬるま湯にしたんだけど……。次はお口あけて、はいア〜ン」
　希美が口を開けると、ママは脱脂綿をピンセットで摘み、コンジスイに浸け、希美の穴のあいた虫歯に詰めた。
「ちょっと、染みるわよ」
「ううっ」
「さあ、これで少しは楽になるわ。ママがいってるから間違いないわよ。何度も歯痛に苦しんだことのあるママなんだからぁ」
　ママが戯けていうと、希美は少し笑みがこぼれた。愛美もちょっとホッとした。
　ママは希美の右頬にアイスノンをあてるとタオルで器用にウサギのようにくくった。そして希美の両手の歯痛のツボを押さえた。
「でもちょっと困ったわね。明日っていうか、もう今日ね、今日は日曜日だから歯医者さんもお休みね。休日の救急歯科に行かないとね」
〝歯医者〟ということばを聞いて、希美の顔が少し曇った。愛美も胸がキュンとなった。ふたりとも小さい頃から歯が弱く、歯医者の治療で何度も痛い目にあってきたから歯医者が嫌いなのである。
「ママ、歯医者さん行かないとダメ？」希美は涙目でうったえるようにママを見る。
「あたりまえでしょ。こんなに痛くなってるのに」

「うん、でも今ママにコンジスイ詰めてもらったら、ましになってきたし、それに希美、知らない歯医者さん行くの怖い」
「しょうがないはね。じゃあ、月曜日の朝一番に、ママが通っている奥田先生に予約を入れるわね。希美ちゃん、一時間目は学校をお休みして歯医者さんにいくのよ。いいわね」
「ふあぁぁ」とママはあくびをして「今何時かしら」と愛美の机の上の卓上時計を見た。デジタル表示の時計は、午前４時を指そうとしている。そのとき、ママは時計の横にあるプリントのようなものにふと気づき、手で取り上げた。そのプリントの『歯』という文字に目がとまったからだ。それは参考書の下に隠されていたものだった。
〝しまった〟愛美は心の中で思わずつぶやいた。希美も目を丸くしている。
「まあ、愛美ちゃん、希美ちゃん、これは虫歯治療のお勧めじゃないの。しかも４月２５日に渡されたものじゃないの。どうして隠していたの」
「あきれた。これは愛美ちゃんも歯医者さんの予約を入れないとだめね。いいこと、愛美ちゃんも月曜日に奥田先生のところに治療に行くのよ」
いつもやさしいママは、ちょっとおかんむりだ。「もうどうしてふたりとも歯が弱いのかしら。私じゃなくて、パパに似ればよかったのに」パパは歯が丈夫で、虫歯が１本もない。
「はぃ」愛美は力なくつぶやくように返事をし、希美と目を合わした。
〝まさか６月４日の深夜に希美の歯が痛み出すなんて……〟そう皮肉にも『虫歯予防デー』に、希美の歯は強く痛み出したのである。そしてふたりは４月の歯科検診を思い出すのであった……。

ふたりが通う私立純姫女子学園は、中等部、高等部、短大をもつお嬢様学校である。愛美は高等部の２年、希美は中等部の２年である。純姫女子学園は、生徒の健康状態の指導にも力を入れている。毎年、学校歯科検診は６月４日の『虫歯予防デー』からの歯科衛生週間のあたりに行

われるのだが、今年からよりいっそう虫歯予防に力をいれ、虫歯がある場合は早期に発見し治療してもらうため、４月１８日の『よい歯の日』の前後に行われることになったのである。

４月１８日、３時間目の授業が休みとなり、愛美がクラスメイトと歯科検診の会場である体育館に行くと、すでに中等部の検診は始まっていた。三列に分かれて女生徒たちが次々に口を開け、デンタルミラーと探針で歯の状態をチェックされていく。希美の姿は二列目の前のほうにあった。心なし不安な表情である。

希美は､胸がドキドキしていた｡この前から右の治療してある奥歯が、冷たいものや甘いものを食べるとときどき染みるからである。〝どうか虫歯ありませんように〟希美は願った。クラスメイトで親友の富田芽以と堀北結衣は希美の前後に並んでいる。学校歯科医が芽以の歯を診て、歯式を呼び上げている。終わったようだ。

〝いよいよだ〟希美は、息が詰まりそうになった。

歯科医は、「若槻希美さんだね」と生徒名簿で確認し、

「はい、大きくアーンして」といい、探針とデンタルミラーを希美の口の中に入れる。歯式をつけている助手が希美の口にライトをあてた。少しまぶしい。

「はい、左上から、７番斜線、６番〇、５番Ｃ１、４番から右の５番まで斜線、６番〇、７番斜線。次、左下から、７番斜線、６番〇、５番から右の４番まで斜線、５番Ｃ１、６番Ｃ２、７番〇。以上です」

〝終わった〟希美は少しホッとした。歯科医がいった。

「処置歯が５本か。君の年にしたら、ちょっと多いな。それに右下の６番だが、治療した歯が再び虫歯になってるよ。ちゃんと歯磨きができてないね。治療勧告書を渡すときに、歯垢チェックとブラッシング指導をするからね」

「はい」と答えながら、気持ちは〝あーあ〟だった。そう純姫女子学園では、歯科検診の結果を渡す際に治療が必要な生徒に、保健室で歯垢チ

ェックとブラッシング指導を行うのだ。希美は虫歯があったことに暗い気持ちで立ち上がった。次に結衣が座り、歯科医が検診を始める。

愛美は、希美が力なく立ち上がるのを見た。〝元気ないなぁ。希美大丈夫かなぁ……〟

そうこうするうちに中等部の検診は終わり、今度は高等部の女生徒の歯科検診が始まった。愛美は親友の仲根夏帆の後ろに並んでいる。段々と順番が近づいてくる。夏帆が学校歯科医の前に座ると、歯科医は丁寧に夏帆の歯を見始めた。夏帆の歯式が聞こえる。

夏帆の検診が終わり、愛美が歯科医の前に座る。

「若槻愛美さんね。はい、お口を開けて。アーン」といい、探針とデンタルミラーを口に入れる。ライトが強烈に愛美の口を照らす。

「左上からいきます。７番Ｃ１、６番○、５番○、４番○、３番から右の３番まで斜線、４番○、５番Ｃ２、６番○、７番○。次、左下にいって、７番○、６番Ｃ２、５番から右の４番まで斜線、５番○、６番○、７番○。以上です」

「若槻さん」歯科医は「よく治療してあるけれど、右上の５番がインレーがとれたままになってるけど早く治した方がいいな。痛み出すといけないから。それに左下の６番は詰め物の境目から虫歯になってるよ。治療勧告書を渡すときに、保健室で歯垢チェックとブラッシング指導をやるから」といった。

「はい」

〝去年といっしょだ。いやだなぁ〟愛美は思った。〝いっしょうけんめい歯磨きしてるのに……。なんで虫歯になっちゃうんだろう〟

１週間後、愛美と夏帆、希美と芽以、結衣は治療勧告書を渡され、保健室にいた。虫歯のある女生徒たちは歯科衛生士に歯垢の染め出し液を塗られた。歯が赤く染め出される。

「ね。こんなに赤いところがあるでしょ。これは磨き残しってこと」歯

科衛生士はいう。「はい、こうやって小さい目の歯ブラシでこう磨くの」
　歯科衛生士に手をもたれ、女生徒たちはブラッシングをやらされる。〝あーあ〟ため息しかでない。
　やっと指導が終わって、保健室を出たとき、愛美と希美はどちらからともなく言い出した。
「ねぇ。治療のお勧め、ママには見せないでおこうよ」
「うん。そうだね。とくに痛い歯ってないし」
「芽以も結衣も虫歯あったけど、痛くないから歯医者に行かないって、さっきいってた」
「夏帆も虫歯あったみたいだけど、歯医者いやだから行かないって」
「芽以も結衣もママやパパには治療のお勧め見せないって」
「夏帆も見せないって」
「じゃあ、私たちも。指切り、げんまん」愛美と希美はこうして治療勧告書を隠していたのだった……。

「ふたりとも、ちゃんと歯医者さんに行くのよ」ママは治療勧告書をふたりからあずかり、１階の寝室に降りていった。

２．憂鬱

　チュンチュン、スズメの声が聞こえる。月曜日の午前７時。愛美と希美は重い気持ちで目が覚めた。今日は歯医者に行かなければならない。希美はきのうもときおり「痛い、痛い」といって泣いていて、痛み止めを飲んで、一日ベットでじっとしてた。ときどき愛美がコンジスイを浸した脱脂綿を詰め替えてやっていた。まだ少し右頬が腫れているようだが、どうやら痛みはましになっているようだ。
　洗面と歯磨きを済ませ、といっても希美はまだ歯が痛むのでデンダル

リンスをしただけだが、制服に着替える。

愛美は、高等部の制服である白のＶネックのセーター（袖無しでチョッキ状、Ｖネックのところに紺の線のアクセント、左胸のところに校章。暑い盛りになると着用しない生徒が多い）、白のブラウス、赤と紺の斜めストライプのネクタイ、チェックのプリーツスカート、紺のハイソックスを身にまとう。冬服はこれに紺のブレザー（校章のエンブレムが左胸のところについている）をはおるのだが、すでに衣替えが終わっているのでタンスの中だ。

希美は、中等部の制服である白のセーラー服（左胸にはポケットのところに校章、ここには青の三本の線。冬服は左胸、襟のところに白の三本線がはいった紺のセーラー服にかわる）、襟は三本の青の線、赤のリボンネクタイ、チェックのプリーツスカート、白のハイソックスを身にまとう。

愛美はさらさらのセミロング。色は栗色。希美は活発なショートヘア。色は黒。ふたりともママに似ていてかわいくて美人。成績も上位。スポーツもそれなりに得意で、クラブ活動は、愛美はラクロス部、希美はテニス部。希美はラクロスに憧れているが、中等部にはないので次に好きなテニスをしている、というところなのだが、これはママに似なくていいのに、似てしまって歯が弱いところが弱点である。

ふたりが階段を降りていくと、ママが奥田歯科医院にふたりの予約の電話をしていた。パパはもう会社に出かけてようとしていた。パパはママとは５歳違い、ママが高校生の時パパは大学生で、ママの家庭教師として知り合い、ママの高校卒業を待って結婚したのだ。パパの話だと、ママはパパと出会ったときにはもう奥歯は虫歯で全滅していたのだそうだ。ママが話すたびに銀歯がキラッと光ったそうだ。「希美、歯が痛いんだって。大事にしなきゃな。ママのいうことを聞いて、ちゃんと歯医者さんに行くんだぞ。じゃ、行って来ます」

「あっ、奥田歯科医院ですか。若槻でございます。おはようございます。いつもお世話になっております。今日は私じゃなくて、娘の希美のこと

なんですが、おとついの晩歯が痛み出しまして‥‥‥、はい、虫歯のようです‥‥‥、ちょっと強く痛み出したもので、今朝一番に診ていただけないかと‥‥‥、あっ、すみません、診療時間前に診ていただけるんですか。ありがとうございます。はい、それでは８時４０分に、わかりました。ありがとうございます‥‥‥‥。それから、希美の姉の愛美なんでございますが、歯科検診で虫歯があったようなので、こちらも診ていただけないかと‥‥‥、はい、愛美は痛みはないようなので‥‥‥、はい、では午後４時に、よろしくお願いします。はい、では希美は愛美が連れてまいりますので‥‥‥、はい、よろしくお願いします」

ママは電話を切り、

「希美ちゃん、奥田先生、８時４０分に診てあげるって」といい、「愛美ちゃんも午後４時に予約とったからちゃんと行くのよ。それから希美ちゃんを奥田先生まで連れて行ってね」といった。

奥田歯科医院は、昨年の秋に開業したばかりで、ふたりの家から純姫女子学園へ行く通学路の途中、学校から５００ｍくらいところにある。真希先生、麻帆先生の姉妹でやっていて、なかなか評判もよく、純姫の生徒も結構通っている。

続いてママは、学校に電話をした。希美の担任の黒川恵梨子に、希美が１時間目を休むことを告げるためである。

「もしもし、純姫女子学園ですか。おはようございます。中等部の黒川恵梨子先生をお願いしたいんですが‥‥‥。あっ、先生おはようございます。若槻希美の母の彩乃でございます。いつも娘がお世話になっておりまして、ありがとうございます。実は夕べから娘の歯が痛み出しまして‥‥‥、はい、それで１時間目をお休みして歯医者に行かそうと‥‥‥、はい、申し訳ございません。はい、そういうことで、では１時間目は欠席ということで、よろしくお願いいたします」

愛美はトーストとサラダ、ミルクで、希美はまだ歯が痛く、食べられないので、人肌に暖めたミルクで、朝食を済ませ、午前８時に家を出た。学校までは自転車で２０分くらいなので、奥田歯科医院には１５分くら

いで着く。
「はい、これ。夕べあずかった虫歯治療のお勧めよ。こっちが希美ちゃんので、こっちが愛美ちゃん。ちゃんと奥田先生にお渡しするのよ」愛美は治療勧告書を渡された。
「行ってらっしゃい。気をつけてね。ちゃんと歯医者さん行くのよ」ママが見送ってくれる。
　ふたりは自転車に乗り、学校へと、奥田歯科医院へと向かった。

　ふたりの乗った自転車が奥田歯科医院に着いた。自動ドアのマットを踏んで中へとはいる。歯医者特有の消毒液の匂いがする。まだ診察時間前なので、ふたりの苦手な歯を削るキュイーンという音はしていない。
　待合室には待っている人が２人いた。愛美は希美を待合室のソファーに座らせ、受付に声をかけた。
「おはようございます。今朝予約をした若槻希美ですが」
「はぁーい」奥から歯科衛生士の長澤かすみが、出てきた。「若槻希美さんですね。お伺いしています。少しお待ちください」と後ろを振り返り、「紗季ちゃん、準備お願いしまぁーす」といった。
　奥ではもうひとりの歯科衛生士である石原紗季が、希美の治療の準備を始めた。デンタルミラーなどの基本４点やストッパーなどがユニットにおかれる。ハンドピースも用意された。
　受付に保険証を差し出す。
「治療勧告書も持ってきたんですが」と愛美がいうと、「はい、お預かりします」とかすみはいい、「それから、この問診票を書いてください。わからないところはそのままで結構ですから」といった。
　愛美は希美に問診票を渡した。希美は『痛い歯がある』などに〇をつけていた。
「若槻さぁーん。若槻希美ちゃぁーん」紗季が診察室のドアを開け、呼びかける。「診察室へお入りください」
「希美、呼ばれたわよ。さっ早く」

愛美は希美を促したが、希美は躊躇している。
「お姉ちゃん、治療痛いのかなぁ。私怖い。お姉ちゃん、いっしょについてきて」
「大丈夫よ。ちゃんと痛くないように麻酔してくれるから」
「でも‥‥‥」
「もう中学生のお姉さんでしょ‥‥‥。わかった。治療終わるまで待っててあげるから。ねっ」
「うん‥‥‥」希美はスクールバッグからポーチを取り出し、その中からハンドタオルを出した。そのハンドタオルを手に仕方なく立ち上がり、診察室のドアで待っている紗季に近づいていき、診察室の中へ入っていった。
愛美は携帯電話を取り出し、ママに電話をした。
「あっ、ママ。愛美です。希美、今診察室に入ったんだけど、心配なんで、治療終わるまで待ってるわ。うん、学校へは自分で連絡するから‥‥‥。じゃ」続いて、学校に連絡する。
「もしもし。純姫女子学園ですか。高等部２年の若槻愛美です。担任の村川さとみ先生をお願いします‥‥‥。あっ、先生おはようございます。若槻愛美です。今妹の付き添いで、奥田歯科医院にいるんですが、治療が長引きそうなんでそばにいてほしいっていわれちゃって‥‥‥。で、１時間目お休みをいただきたいんですが‥‥‥。はい、申し訳ありません。はい、ありがとうございます。じゃ、治療が済み次第学校に行きますので」
愛美が電話を終えた途端、キュイーン、キュイキュイ、キュイイイイーンとタービンの音が待合室に響いた。思わず、ドキッとする。いかにも痛そうだ。
「希美、大丈夫かなぁ」愛美はつぶやいた。

ハンドタオルを持った希美は紗季に促され、診察室へ一歩足を踏み入れる。歯科ユニットが４台並んでいる。

「じゃあ、こっちの治療台に腰掛けてくれる？」紗季が淡いブルーのユニットを指す。ユニットは、すっかり準備が整えられていた。ライトがこちらを向いている。

〝怖い……〟重い気持ちで、紗季にすすめられるまま、希美はスリッパを脱ぎ、ユニットに腰掛けた。

すかさず、紗季は希美に水色のエプロンをつけた。〝どうしよう。治療痛いのかなぁ……。涙でてきちゃうよ〟希美はもう涙目である。

「あらあら、ほっぺが少し腫れてるみたいね」紗季は希美の右頬をみていった。「すぐに、先生に診てもらいますからね」紗季は奥田真希先生を呼びに行った。

希美はまわりを見渡した。威圧的なライト、トレイの上の銀色に光るデンタルミラーや先端の尖った治療器具。希美がいちばんいやで怖いドリルの類も目の前のアームのテーブルにいくつも並んでいる。そのアームのテーブルの上にはいくつものハンドピース……。「ぐすん」希美は奥田歯科医院ははじめてなので、よけい不安なのだ。

ユニットの横には、タオル、注射器、麻酔のカートリッジ、希美の治療勧告書、問診票、カルテがのったワゴンがある。

そのとき足音が聞こえた。

「どうしたの。歯が痛むんだって」真希先生がユニットの横にある歯科医師用の椅子に座り、希美に話しかけた。ママの彩乃がお世話になっている先生である。奥田歯科医院にはもうひとり真希先生の妹である麻帆先生がいるが、希美の治療は真希先生がしてくれるようだ。

「若槻希美ちゃんね。まず、自己紹介しとくわね。私が希美ちゃんの治療を担当する奥田真希です。こっちが治療のアシスタントをしてくれる衛生士の石原紗季ちゃん。よろしくね」

「希美ちゃん、石原紗季です。希美ちゃんの治療のお手伝いをします。よろしくね」紗季がにっこりとあいさつをする。

「希美ちゃん、どの歯がどんな風に痛むの」

「はい。右側の奥歯の詰め物がとれちゃって、おとついの晩からチクチ

ク痛いんです」希美は、ささやかな嘘をつく。
「うーん」治療勧告書と問診票を見ながら、「じゃあ、まず歯全体を見せてね」とユニットのペダルを踏み、ユニットを倒す。真希先生は「はい、お口大きく開けてね。アーン」と、デンタルミラーと探針を手に持ち、希美を促す。すかさず紗季がライトを点灯する。強い光が希美の口を照らす。
「紗季ちゃん、カルテをお願い。左上からいきます。７番斜線、６番〇、５番Ｃ２、４番３番斜線、２番しゃ、ちょっと待って」真希先生は希美の歯を探針でカリカリする。「２番Ｃ１ね。１番も」また探針で突っつく。
「１番Ｃ１、右上１番から３番まで斜線、４番Ｃ２、５番斜線、６番〇、７番斜線。左下にいって、７番斜線、６番〇、５番から右の４番まで斜線、５番Ｃ１、６番、これね痛むのは。だいぶひどいわね。インレーが取れて二次虫歯になっちゃのね」ミラーと探針で丁寧に診ながら「うーん６番はＣ３ね。７番〇。以上です」
〝えっ、前歯が虫歯になっちゃてる。どうしよう。ママに叱られる。〟希美は泣きたくなった。
　真希先生はひとしきり希美の歯を診ると、
「ちょっと虫歯が多いかな。ちゃんと歯磨きしてる？　純姫女子なら、歯科検診で虫歯があったらブラッシング指導あるでしょう？　今回の虫歯の治療が終わったら、ここにいる紗季ちゃんにちゃんと歯の磨き方、虫歯予防の方法を教わってね。いい？」といった。
　こくんと、希美はうなずく。真希先生は、
「まず、いちばん痛む右下の６番から治療していかなきゃならないと思うけど、できれば神経を取ることはしたくないので、どれくらい虫歯が進行しているか正確に診るため、レントゲンを撮るわね」といい、「紗季ちゃん、レントゲンをお願い」と紗季に指示した。
「はい、先生。希美ちゃん、こっちへきて」と診察室の隅にある小さな部屋へ案内した。希美はスリッパを履き、水色のエプロンをつけたまま、レントゲン室に入った。

「これを噛んでね」マウスピースのようなものを噛まされ、部屋のドアが閉められる。
「はい、じっとしててね」部屋の外からマイクを通して、紗季がいった。
　希美の顔のまわりをパノラマレントゲンのユニットが通過する。
「はいお疲れさま。もう一度あっちに戻って」
　希美は、治療用のユニットに戻った。スリッパを脱ぎ、ユニットに腰掛ける。希美は不安な気持ちでいっぱいである。しばらく待っていると、真希先生が戻り、紗季ができあがったレントゲン写真を持ってきた。真希先生はレントゲン写真をユニットの投影機にかけた。蛍光灯の青白い光に希美の口腔が映し出される。
「うーん、やっぱり神経を取らないとだめかなぁ。希美ちゃん、ここ見て。ほら陰があるでしょ。これが虫歯ね。で、こっちの神経の黒い部分とつながっているのがわかる？　虫歯の穴と下からの神経がつながっちゃってるのね。だから強い痛みが起こったのね」
　希美は自分の口腔を見て、不思議な気分だった。でも真希先生が神経を取る治療をするといったことでよけい不安になっていた。希美は今まで受けた歯の治療で神経を取ったことはないが、友だちやママが神経を取る治療は泣くくらいに痛いといっていたのを聞いていたからだ。希美は真希先生に聞いてみた。
「先生、神経取るのって痛くないですか」
「うん、そうね。最初、麻酔注射でチクッとするくらいかな。麻酔するから強い痛みはでないと思うけど、もし痛かったからちゃんといってね。すぐに治療をやめるから」
「希美ちゃん、真希先生はやさしいから治療痛くないよ。私も希美ちゃんの歯が治り、笑顔が取り戻せるようお手伝いするから、いっしょにがんばろ」紗季が励ます。
「それにできるだけ神経は取りたくないから、削ってみて大丈夫なら神経は残します。大丈夫、約束します。ね」真希先生はやさしい目で力強くいった。

「それと‥‥‥」希美はためらいがちに、
「それと、なあに」真希先生はやさしい目で聞く。
「私の前歯、虫歯になっちゃてるんですか。それって治したら、詰め物目立っちゃうんじゃないですか」希美は涙目で聞いた。
「大丈夫よ。左上の２番は１番との間、１番は裏がちょっとだけ虫歯になってるの。どちらも小さいからちょっと削って白い詰め物をするから、全然目立たないわ。今の充填物はよくできてるから治療した歯だってわからないわ。心配しないで」と真希先生はいう。
「そうよ。治療したって全然わかんないんだから」紗季も目一杯の笑顔でいった。
「じゃあ、もう一度倒すね」
　ユニットが倒れていく。希美の目の前にマスクをした真希先生の顔が近づいてくる。ライトが点灯され、希美の口を照らす。
「紗季ちゃん、シンマお願い」
「はい、先生」紗季の手から真希先生に浸潤麻酔のカートリッジを装着した注射器が渡される。
「希美ちゃん、アーン」
　希美は不安な気持ちを抑えて、口を開けた。麻酔注射を持った真希先生の手が近づき、やがて希美の口に吸い込まれる。希美の右の歯茎に針が刺さる。チクッとした痛みが希美を襲う。カートリッジの麻酔薬が希美の歯茎に浸潤していく。徐々にずんとした重い痛みが歯茎に広がる。
「ううっ」
「大丈夫よー。段々麻酔が効いてくるから。もう１本麻酔しますね」再び紗季の手から真希先生に麻酔注射が渡される。希美の右の歯茎にさらにもう１本の針が刺さる。さらにカートリッジの薬剤が浸潤する。
「はーい。いったん終わり。口ゆすごうか」
　ライトが消され、ユニットが起こされていく。希美はコップを持ちクチュ、クチュと口をゆすぐが、麻酔が効いてきたせいか口の端から水が漏れてうまくゆすげない。

「麻酔効くまで少し待ちますね」と真希先生はいって、希美に背を向け、希美のカルテを記入している。紗季は、希美の治療の次の準備をしている。

「もういいかな」５分足らずがたち、真希先生は希美に向き直った。「ユニット倒すね」

ユニットが倒れ、ライトが点灯される。

「はい、アーンしようねぇ」と真希先生は希美の口を開けさせると、ピンセットでふくみ綿をつまむと、希美の右の頬側と舌側にふくませ、治療に必要なスペースを確保した。

真希先生は、いくつかある中からドリルの先端を選び、タービンのハンドピースにドリルを装着した。先生は、ゴムの手袋をした右手にタービンを握り、左手にデンタルミラーを持った。希美の口に近づいてくる。紗季は希美の左側からゴム手袋の手でバキュームを持って、同じく希美の口に近づけた。

「はい、大きくアーンしてね」真希先生がいう。

「痛くないからねぇ～大きくアーンしようね～」紗季が希美を励ます。

「痛かったら、左手を挙げて教えてね。すぐに治療やめるから」

希美はもう涙が溢れそうである。〝お願い、痛くありませんように〟希美は目を閉じ、口を開けた。希美の口にタービンとバキュームが入る。タービンが希美の右下６番のう蝕した歯を削り始める。

キュイーン、キュイ、キュイ、キュイイイイーン。

真希先生の持つタービンの音が、診察室に、待合室に鳴り響く。

コォー、コォォォー。ジュ、ジュ、ジュッ。

紗季が巧みにバキュームを使い、希美の唾液を吸い取る。

「はぁーい、大丈夫よー」「痛くない、痛くない」真希先生と紗季が交互に声をかけながら、希美を励ます。希美は少し目を潤ませながら、口を精一杯大きく開けてがまんしている。

キュイーン、キュイーン、チュイイイーーン。

削り始めて１分ほどが過ぎたであろうか。ドリルが希美の虫歯を削り、

ドリルの先端が段々と奥へと深くなりだしたとき、希美は痛みを感じ始めていた。それでも眉間にしわを寄せ、必死でがまんしていたが、さらに３０秒ほどたった頃、希美を強い痛みが襲った。
〝い、痛いっ。先生、そこ痛いっ！！〟希美は心の中で叫び、左手を挙げようとした。
　だが、左手を挙げることができない。どうしたことかと薄目を開けると、紗季が左手を押さえている。
「そうねー。ちょっと痛いね。でも、もうちょっとがまんしようねー」
　真希先生は削るのをやめてくれない。希美の胸は大きく波打ち始め、ついには身を捩り、足をバタバタして、嗚咽を漏らし始めた。
「うふん、うふん、うふん。ふぇんふぇい」
「希美ちゃん、危ないから、動いちゃダメ」紗季が希美を押さえつけながら、注意する。それでも希美はなんとかこの痛みから逃れようとして、身を捩る。
「うふん、うふん、うふん。んあぁぁ」希美の嗚咽が診察室に響く。そのとき、
　キュイイイイーーン。
と、ひときわ高いダービン音が鳴り、ドリルが止まった。
「エエッ、ヒック、ヒック」紗季が希美の涙をタオルで拭いてくれる。
「ごめんね、希美ちゃん。だいぶ虫歯が進行してて、深くなってるの。それに今削ったところまで見ると、この歯はやっぱり神経取らなくちゃいけないわ」と真希先生はいって、タービンをユニットに戻した。
〝えっ〟希美にじわーっと涙がにじむ。〝神経抜くって……、どうしよう。怖い……〟
「もう１本、麻酔をするわね。紗季ちゃん、お願い」
　紗季がトレイの麻酔カートリッジを注射器にセットし、真希先生に手渡す。真希先生は、「はい、大きくアーンしてね」と希美の口を開けさせ、注射針を希美の歯茎に刺す。
「ううっ」

希美の歯茎に麻酔の薬液がゆっくりと注入される。
「ちょっと、麻酔が効くまで待とうね」といったん短い休憩が入った。
再びライトの強い光が希美の口を照らす。なにやら真希先生はタービンの先端を別のドリルに取り替えている。
「今度は大丈夫、痛くないよ。はい、アーン」「お口大きく開けようね。アーン」真希先生と紗季が促す。
希美は、〝いやだなぁ〜〟と思いながら、半べそでもう一度口を開く。真希先生が手に持ったタービンと、紗季のバキュームが希美の口に入り、再び音を立て始める。
キュイーン、キュイーン。
ココココォー、コォー。ジュポォーー。
ものの３０秒も削らないうちに、またしても強い痛みが希美を襲う。希美は顔をしかめる。
「うっ、ううううーん、ふぅん」希美は足を曲げ、強くユニットに押しつける。けれども、真希先生はドリルの先端を深く
希美の虫歯に差し込み、容赦なく削る。
〝い、痛い！！　真希先生、紗季先生、助けてぇー！！〟
「ふううん、ふぅん、ふぅん。んあぁぁぁ」希美はもはや泣き出していた。
キューーーン、ン、ン。
タービンが止まった。
「ヒック、ヒック、ヒック」
「希美ちゃん、だいぶ痛い？」真希先生がやさしく聞く。こくんと希美が頷くと、「虫歯が深く進行していて、炎症を起こして、麻酔が効きづらいみたいね。でも、あまりたくさん麻酔をするとからだにもよくないから、もうちょっとがまんできないかなぁ」というけれど、希美は首を横に振る。そしてハンドタオルをそっと目にあてる。
「じゃあ、もう１本だけ麻酔をしましょう」
みたび、希美の歯茎に注射針が刺さる。またも麻酔薬が吸入され、切

削の治療が再開される。
　キュイーン、キュイーン、キュイイイイイーーン。
　コォー、コォオオオー。
「ふぅぅん、ふぅん、ふぅん」
　治療するタービンの音に希美の泣き声が混じる。

　その音は、待合室にいる愛美の耳にいやというほど聞こえていた。希美を待っている間、待合室にある雑誌をパラパラと見ていたが、治療の音が気になり、内容は全く頭に入ってこない。
　キュイーン、キュイーン、キュイイイイイーーン。
　コォー、コォオオオー。
　ふぅぅん、ふぅん、ふぅん。
〝痛そうだなぁ、希美、大丈夫じゃないみたい。いっしょについってて希美いったのに、いかなくてごめんね。でもお姉ちゃんも歯医者苦手なの知ってるよね。希美の治療されてるの見たら、私治療受けられなくなるよ……。ううん、今の音だけでももうダメ……。今日の夕方の治療受けないでおこうかなぁ……。でもママおこるよね。歯のことは厳しいんだから……。ああ、いやだなぁ。〟
　愛美は背中に冷や汗をかき、青ざめながら、待合室で希美が治療される音に耐えていた。

　治療台では、希美の虫歯を削り取る治療がなお続いていた。
　キュイーン、キュイ、キュイ、キュイイイイーン。
　コォー、コォオオー。ジュポポポポーーー。
　真希先生の持つタービンの音と紗季のバキュームの音が、診察室に、待合室に鳴り響く。
「ふぅぅん、ふぅん、ふぅん」
　希美は、嗚咽を漏らしながら、足を強くユニットに押しつけ、続く治療の痛みに耐えていた。希美が動くことで治療の安全がそこなわれない

よう、麻帆先生と衛生士のかすみが希美の体を押さえている。
　キュイーン、キュイーン。
　ココココォー、コォー。
〝痛いっ痛いっ痛いー！！　毎日歯磨きするからーっ！！　もう許してぇー！！〟希美は、もはや涙が溢れ出て止まらない。削る治療の痛みは、まだまだ続いていた。
「ふぅぅん、ふぅん、ふぅん」
　キュイーン、キュイ、キュイ、キュイイイイーン。
　キュイーン、キュイーン、チュイイイーーン。
　コォー、コォオォー。
　キュイイイイイーーン。
　ひときわ高い音を立て、タービンが止まった。タービンがユニットに戻される。
　コォー、コォオォー。
　バキュームが希美の唾液を吸い取る。
「希美ちゃん、よくがんばったわね。削るのは、今日はもう終わり！！１回お口ゆすごうか」真希先生は、やさしく明るくいった。
「ヒック、ヒック」しゃくりながら、希美は口をゆすぐ。ゆすぎ終わると、紗季がタオルで涙を拭いてくれた。少しホッとする。
「えらい、えらい」「痛かったでしょ。よくがまんしたわね。えらい」麻帆先生とかすみがほめてくれる。希美は、恥ずかしさと照れくささが混じった不思議な気分だった。
「さあ、もうひとがんばりよ。これから神経の治療をするから。もう一度ユニット倒すね」真希先生はいって、ユニットのペダルを踏む。
　希美の顔が真希先生の手元に近づく。ライトがまぶしい。
「紗季ちゃん、アングルワイダーをお願い」
　紗季がトレイから開口器を取り上げ、真希先生に渡した。真希先生は開口器を持ち、「はい、希美ちゃんお口開けて。ちょっとがまんしてねー」と希美の口に装着する。

″これなに？　なんで？　これじゃお口閉じられないじゃない。神経の治療って、どうするんだろう。″希美は、ふたたび不安になってきた。
「希美ちゃん、リラックスしてねっ、大丈夫だから」
″なんだろう、あの針みたいなのは。怖い……。″
　真希先生の手にはリーマが握られていた。紗季がバキュームを希美の口に入れる。麻帆先生とかすみがユニットに横たわる希美のまわりにつく。
「希美ちゃん、先生はとっても上手だから、あっというまに終わっちゃうよ。大丈夫、大丈夫！！」紗季がやさしく微笑む。
　真希先生は、リーマを希美の口に入れ、今削って成形されたばかりの歯の穴に突っ込み、神経を絡め取り始めた。
「ううっ！！」
″痛いっ！！″希美は、思わずビクンと体がはね、額には脂汗がにじんだ。すかさず、麻帆先生とかすみが希美の体を押さえる。
「ちょっと痛いけど、がまんしてね。すぐ終わるから」
″ちょっとじゃないよ、凄い痛いよ。痛いよ。真希先生、もうやめてぇー！！″
「ふぅぅん、ふぅん、ふぅん」また希美は嗚咽を漏らし始める。
　真希先生はリーマとファイルを巧みに操り、希美の歯の虫歯菌に侵された神経を取り除き、コリコリ、ゴシゴシと歯の根の掃除をしていていく。
「ほんと、ほんとにもうちょっとだから。がんばって、希美ちゃん！！」紗季が励ます。
「ふぅぅん、ふぅん、ふぅん。んあぁ」希美の泣き声が大きくなってゆく。
　真希先生は希美の根管治療をすすめ、取り除いた神経をガーゼに拭き取る。拭き取られた神経を見ると本来は薄ピンク色の神経が、感染のため充血し、赤黒くなっている。
　真希先生はなおしばらくリーマを使っていたが、「ふうぅっ」とひとつ

ため息をつくと、リーマを置いた。そしてシリンジを取ると、根管治療をした希美の歯に、シュッ、シュッとエアーをかける。次にガーゼをピンセットでつまむとヨードグリセリンの瓶に浸し、希美の歯に塗布する。
「ふふんっ」〝染みるぅー〟希美は眉間にしわを寄せて、がまんした。
「ちょっと染みたわね。もうちょっとだからねー。がまんしてね」いいながら、ガーゼをヨードグリセリンに浸し、今度は希美の歯に詰める。そしてセメントで仮封をした。希美の口から開口器が外された。ライトが消され、ユニットが起き上がる。
「はぁーい、希美ちゃんお疲れさまぁー。今日はもうおしまい。お口よーくゆすいでね」真希先生が希美の顔に向かって笑顔でいう。ようやく希美の治療が終わった。
「エエッ、ヒック、ぐすん」希美は涙でぐしゃぐしゃだ。
「希美ちゃん、ほんとよくがんばったねぇー。えらい」紗季がほめながら、希美の頬の涙をタオルで拭いてくれる。
　クチュ、クチュ。
　希美が口をゆすいでいる姿に、真希先生は声をかけた。
「希美ちゃん、そのままでいいから聞いて。今日は右下の奥歯を治療したんだけど、さっきもいったように神経は取らなきゃダメだったの。虫歯の炎症がひどくってつらい治療になっちゃって、ごめんね。でも詰め物が取れたときに、もう少し早く治療に来てくれてたらこんなつらい治療にはならなかったわ。虫歯をつくっちゃったのは希美ちゃんなんだから、もし虫歯になったら今後は早く治療にくること。今日は痛むといけないから、痛み止めの薬を出します。大丈夫だと思うけど、もし痛み出したら、それを飲むこと。いい？」
　希美は口をゆすぎ終わり、真希先生の方を向いて、こっくりと頷いた。でも、〝こんな痛い思いをするなら、これからはきちんと歯医者さんに行こう〟という気持ちと、〝こんな痛い思いをするなら、二度歯医者さん行きたくない〟という気持ちと半々だった。
「それから、次回以降の治療について簡単に話しておくわね」

「次は今日削った歯の状態を見て、炎症が治まっているようなら、歯に被せ物をするための準備をします。後５本ある虫歯はそんなにひどいのはないから、毎回１～２本ずつ治していこうね」
「はぃ」消え入りそうな声で、希美は答えた。
「大丈夫。次からは痛くないから。じゃ、今日は帰っていいわ。今日は学校終わったら、十分に体を休めてね。お大事に。それから次回の予約だけど‥‥‥、そうねぇ、１週間あとにしましょう。希美ちゃん、何時がいい？」
「‥‥‥えっと、学校とクラブ活動がおわったあとがいいです‥‥‥」
「じゃあ、午後５時にしましょう。予約とっておくわね。紗季ちゃん、待合室まで希美ちゃんをつれていってあげて」
「はい、先生。エプロン外すねぇー。じゃあ、希美ちゃん行こうか」紗季は希美から歯科エプロンを外し、スリッパをそろえてくれた。
「先生、ありがとうございました‥‥‥」つぶやくようにお礼をいう。希美はだいぶ疲れているようだ。
「いいのよ。お大事に」真希先生は笑顔で送ってくれる。
　ふたりは待合室に続くドアに歩いてゆく。紗季は希美を横から抱えるように支えていた。

　カチャッ。
　診察室のドアが開いた。紗季に抱えられた希美が出てきた。希美の頬に涙のあとがある。
〝希美！！〟愛美は、思わず声にならない声が出た。
「ちょっと、治療が大変だったの‥‥‥。でも、希美ちゃん、とってもがんばったんだよ」紗季はいいながら希美をソファーに座らせた。愛美も横から希美を支えた。
「希美、がんばったんだね」愛美は希美を慰めた。
「お姉ちゃん‥‥‥」希美の目が治療のつらさをうったえていた。
「若槻さぁーん、若槻希美さぁーん」受付から、希美を呼ぶ声がする。

「薬の用意ができたのよ。じゃあ、私は診察室に戻るね。希美ちゃん、お大事に」
「ありがとうございます‥‥‥」希美は小さな声でお礼をいった。
「希美、お姉ちゃんが薬もらってきてあげる」
「お姉ちゃん‥‥‥、ありがと」
　愛美は受付へいった。年配の女性がすわっている。希美が診療室に入ったあと、８時５０分くらいに受付に出てきた人だ。なんだか、目元の涼しい人だ。
「希美は少し疲れているようなので‥‥‥。かわりに私が‥‥‥。私は姉の愛美です」
「あぁ‥‥‥。そうですね。治療時間もだいぶ長かったし、かなり大がかりな治療でしたものね」受付の女性は、やさしい目で微笑んだ。女性の言葉にふと受付の時計を見ると、９時２５分を指している。〝希美、４５分も治療受けてたんだ‥‥‥〟愛美は思った。
「これが、痛み止めの薬で、２回分あります。痛いとき２錠飲んでください。ただし、１回飲んだら、６時間は間を開けてください。で、こっちが炎症を抑える薬です。毎食後、１錠ずつ飲んでください。７日分ありますので、きちんと飲んでくださいね」
「はい、わかりました」愛美は薬を受け取りながら、返事をする。希美の次回以降に使う診察券も受け取った。
「それから、希美さんには、中でむす、あっ、いえ、先生が今日の治療と次回のことについて説明しましたけれど、お姉さんにも話しておくようにとのことですので‥‥‥」女性の言い直しに気づき、
「奥田先生のお母さんなんですか？」と愛美が聞いた。
「えっ、ええそうなのよ」
「いつも、母がお世話になっています。それに今日は希美を時間前に診ていただきありがとうございました」愛美は頭を下げ、お礼をいった。
「いえ、そんな‥‥‥。いいのよ。こちらこそお世話になっています。ふたりともお母さまに似て、かわいらしいわね」

「じゃあ、もう一度治療の経過ですが、希美さ……、希美ちゃんでいいわね。希美ちゃんの痛がってた虫歯はかなり大きくて神経まで広がっていたの。で、今日は神経を取る治療をしたので、時間がかかったの。それから次は１週間後の午後５時になってるから、きちんと治療に来てね。お大事にね。愛美ちゃん、お母さまによろしく」真希先生、麻帆先生のお母さんは、微笑みながら説明をしてくれた。

愛美は希美の会計を済ませ、

「はい、ありがとうございます。じゃあ、失礼します」といった。

愛美は、希美のところへ行き、ふたりは連れだって、自動ドアの外へ出た。

希美の治療が終わり、ふたりは学校へと向かった。つらい治療だったので、希美は憔悴しきっている。

「希美、大丈夫？」愛美がもう一度聞いた。

「うん、大丈夫」希美がつぶやくように答える。

「大丈夫じゃないよ。今日は休みなよ。お姉ちゃんが黒川先生にいってあげる」

学校へ着くと、2時間目が始まっていた。黒川先生は英語の先生だが、この時間は授業がなく、職員室にいた。先生は希美の担任でもあり、希美が入っているテニス部の顧問でもあった。

「先生、今朝母がご連絡しましたように、妹は歯の治療を受けてきたんですが、かなり長く治療されてて、だいぶ疲れているみたいなんです。今日はこのままお休みをいただけませんか」

「あらあら、それは大変だったわね。いいわよ。歯の治療はつらいものね」黒川先生はそういって、１日休みをとることを許可してくれた。

「先生、ありがとうございます」ふたりはお礼をいった。

黒川先生は背が高くスレンダーな美人で、髪はシャギー、いつもパンツルックで颯爽としている。愛美も中等部の時に担任をしてもらったことがあり、ふたりのあこがれの先生である。あっさりと休暇を許可して

くれたのもさっぱりとした気性のためだとふたりは思っていた。それもあったが、実は黒川先生も歯ではいままで散々苦労してきたから、希美のつらさが身に染みてわかるからだ。黒川先生の笑顔からこぼれる前歯は輝くように白いけれども、差し歯だった。奥歯もほとんどがクラウンだが、先生という職業柄人前で話すことが多いため、見えるところはセラミックの白冠にしていた。でも大きな口を開けると、銀歯がギラギラである。

「大丈夫？　ひとりで帰れる？」

「うん、大丈夫」

そんなやりとりをし、職員室を後にするふたりの姿を見つめながら、〝希美ちゃん、つらかったでしょうね。わかるわ。私も虫歯が多くって、何度も何度も治療を受けてきたもの〟黒川先生はそう心でつぶやいていた。

希美を見送ったあと、愛美は教室に行った。担任の村川先生の国語の授業が始まっていた。愛美は１時間目を休んだこと、２時間目に遅刻したことを詫び、自分の席に着いた。

２時間目と３時間目の休み時間、愛美と夏帆が話している。

「愛美、どこか具合が悪かったの？　顔色がよくないみたい」

「ううん、違うの。希美がね、おとついの晩から歯が痛くて、今朝歯医者さんに連れて行ったの。つきそいってわけ」

「そうなんだ。だから愛美も顔色悪いんだ。愛美、歯医者嫌いだもんね。わたしも嫌いだけど」

「でね、そのとき、ママに私の歯科検診の結果見つかっちゃって……、私も今日の４時に予約入れられちゃったの。いやだけど、行かないとママおこるから……。だから、夏帆、私クラブお休みするね」

「それって、最悪じゃない」

「そっ、あ〜ぁ、ついてないなぁ」

「違うよ、愛美のママってうちのママと仲いいじゃない……。愛美、いっつもママが歯のことにうるさいって愚痴ってたじゃない。私も歯科検診の結果ママにみせてないから、それって、私もばれて歯医者行かなくなるかもしれないじゃない。あ〜ぁ、最悪」

ふたりは気持ちが沈んでいくのがわかった。

キーン、コーン、カーン、コーン

午後３時。６時間目の授業の終わりを告げる鐘が鳴る。愛美は憂鬱な気持ちでいっぱいだった。もうすぐ歯医者に行かなければならない。そして、痛い治療を受けるのだ……。

午前中に待合室で聞いた希美が受けた治療の音が浮かんでくる。キュイーン、キュイーンと歯を削る音……。痛くて思わず涙目になる治療中……。

〝はぁぁ、いやだなぁ〜〟のろのろと、教科書をスクールバッグに入れ、後かたづけをする。

「愛美、私クラブに行くから。先生には愛美がクラブ休むこと、いっとくから」夏帆が愛美のうしろから声をかける。

「うん、お願いね」

「愛美、もしうちのママに歯科検診のことばれてたら、愛美のことうらむから」夏帆が戯けていった。これから、苦手な歯医者に行く愛美を励ましているのだ。

「夏帆、ありがと。ぐすっ」愛美は夏帆のやさしさにちょっと涙ぐんだ。

「愛美、そんな、私ホントはおこってないから。そんな泣かないで」夏帆はちょっとあわてた。

「ちがうの。夏帆が励ましてくれてるのわかって、うれしくなっちゃたの」

「愛美が歯医者苦手なの知ってるし、私も歯医者嫌いだし……。でも早ければ早いほど、治療は楽だっていうし。私も行こうかな、歯医者……。愛美、希美ちゃんも痛い治療がんばったんだし、愛美もがん

ばんなよ」
「うん、ありがと、がんばって行って来る」
　愛美は、夏帆に少し勇気をもらい、奥田歯科医院へと向かった。

「こんにちわー」愛美は、奥田歯科医院の受付であいさつをした。午後３時５０分である。受付には今朝ほど希美の治療の説明をしてくれた真希先生、麻帆先生のお母さんが座っている。歯科衛生士の長澤かすみが出てきた。ふたりは笑顔で出迎えてくれた。
「今朝は妹を診ていただきありがとうございました」とあいさつすると、「そんな、いいのよ。希美ちゃん、がんばったわ」と、かすみはにっこり微笑む。「えーっと、今度は愛美ちゃんの番ね。しっかり治そうね」
「はぃ」返事が消え入りそうになる。
「あらあら、そんなことじゃ、希美ちゃんに笑われるよ。大丈夫、愛美ちゃんの治療は麻帆先生と私で担当するから、心配しないで。じゃあ、愛美ちゃんの治療勧告書を預からせてね。それと、こちらの問診票を記入してね」と、かすみは愛美から治療勧告書と保険証を受け取り、問診票を手渡した。
　愛美は問診票を持ってソファーの方を見ると、３人ほど待っている。その中に希美の親友の芽以を見つけた。声をかけようとすると、紗季が診察室のドアを開け、「富田さぁーん、富田芽以ちゃぁーん。診察室にお入りください」と呼びかけた。
　芽以は暗い表情で小さく「はい」と答えると、診察室の中に入っていった。
〝芽以ちゃんも歯医者さんに来てたんだ。いつから通ってるんだろう。希美の話だと、芽以ちゃんも虫歯があるっていったなぁ……。でも歯医者は行かないってことだったじゃん。芽以ちゃんもママにばれちゃったのかなぁ……〟愛美はそんなことを思いながら、問診票を書いていた。愛美は治療してある奥歯が、冷たいものや甘いものを食べると染みるのだが、『とくに痛い歯はない』などに〇をつけ、ささやかな嘘を書い

ていた。
　そのとき、キュイーン、キュイ、キュイ、キュイーンとタービンの音が響いてきた。どうやら芽以の治療が始まったらしい。
〝やだ、痛そう……。はぁ〟愛美は暗い気持ちでため息をついた。

　芽以の治療が始まってしばらくすると、診察室のドアが開き、２０代の大学生らしい女性が出てきた。ハンカチで左頬を押さえ、顔をしかめている。よくみると目の端には涙がたまっている。
〝あんなにつらそうな顔してる。私も痛くされるのかなぁ……。やだなぁ……〟そのとき、愛美を呼ぶ声がした。
「若槻さぁーん。若槻愛美さぁーん。診察室へお入りください」とかすみが診察室のドアを開け、呼びかける。
〝どうしよう。もう順番来ちゃった……。でも……仕方ない〟
「はぁい」愛美は逡巡しながらソファーから立ち上がった。

　愛美は診察室のドアを開けて、診察室の中へ一歩足を踏み入れる。キュイーン、キュイーンとひときわ高くタービン音が鳴り響く。ドアの横に荷物置きのボックス型の棚があり、６人分が収納できるようになっている。芽以のものだろう、スクールバッグが１個は入っている。愛美はその隣に自分のスクールバッグを入れ、スクールバッグの中からハンドタオルを取り出した。
　診察室の中は歯科ユニットが４台並んでおり、すべて淡色系で統一されていた。右からブルー、ピンク、イエロー、オレンジである。その横には小部屋がある。〝レントゲン室ね〟見当をつけ、愛美は思った。
　芽以は両手でハンドタオルを握りしめ、ブルーの歯科ユニットに寝かされ、真希先生にタービンで虫歯を削られていた。
「芽以ちゃん、もうちょっとお口開けてー」
「芽以ちゃん、力抜いて、リラックスしてー」
　キュイーン、キュイイイイイーーン、チュイイイーン。

コォー、ジュポポポポー。
「ふふん、ふぅぅん、ふん」
「はい、芽以ちゃん、大丈夫だよー。痛くない、痛くない」
「芽以ちゃん、もうちょっとがまんしようね」
芽以のひざが曲がり、足の指は強くユニットに押しつけられている。
キュイーン、キュイーン、キュイ、キュイ、キュイイイイーーン。
「ふぅん、ふん、ふん、んあぁ」
真希先生と衛生士の紗季が芽以を励ましながら治療しているが、芽以はもう半べそをかいている。
〝芽以ちゃん、痛そうだなぁ、もう家に帰りたくなっちゃうよ……。〟
愛美は、芽以が治療される痛そうな光景を目の当たりにし、怖くなった。
「じゃあ、こっちの治療台に座って」かすみが芽以の隣の淡いピンクの歯科ユニットを指さす。
「はぁ」ため息がひとつ出た。
「どうしたの。さっ早く」かすみが促す。
仕方なく、スリッパを脱いで、ユニットに腰掛けた。すかさず、かすみが水色の歯科エプロンを愛美の胸にかける。愛美はまわりを見渡した。正面にライト、アームからのびるテーブルには、細々とした薬品の瓶、トレイにのったデンタルミラー、探針、ピンセット、エキスカーベーターの基本４点セットとストッパー、タービンにつけるハンドピース、バーチェンジャーが置いてある。さらにテーブルにかかっているタービンの類、などなど。右側を見ると、口をゆすぐコップ、バキュームがある。横に置いてあるワゴンには、タオルや、麻酔注射器、愛美のものらしいカルテや治療勧告書、問診票があった。
かすみは、ワゴンの上に麻酔のカートリッジを準備している。
〝はぁ、いやだなぁ……。でもここの歯科衛生士のお姉さんの制服かわいい。淡いグリーンで、癒されるって、感じ。でも、はぁ〜〟愛美はなんとか気持ちを明るくしようとしていた。
やがて、スリッパの音が聞こえ、麻帆先生がやってきた。

「若槻愛美ちゃんね。愛美ちゃん、こんにちは」
「こんにちは」愛美はあいさつをした。
「今度は、愛美ちゃんの番ね。まず自己紹介するわね。私が奥田麻帆。愛美ちゃんの治療を担当します。よろしくね。それから、同じく愛美ちゃんを担当する歯科衛生士の長澤かすみちゃん」
「長澤かすみです。愛美ちゃん、よろしくね。かんばって虫歯治そうね」
「はい、よろしくお願いします」沈んだ気持ちで、愛美はいった。
「あらあら、そんなに怯えなくて大丈夫よ。まかせて。心配ないから」と麻帆先生は問診票と治療勧告書を見ながら、「えーっと、小さな虫歯が１本と、少し進んだ虫歯が２本か……。で、とくに痛かったり、染みる歯はないってことね」
「はい」愛美は、答える。
「じゃあ、まずお口全体を診せてもらうわね」
　愛美は、ドキドキしてきた。〝染みる歯はないって書いちゃったけど、ホントは左下の奥歯が少し染みるんだ。右上はインレーがひとつとれちゃってるし……。〟ユニットがゆっくりと倒れていく。ライトが点灯される。麻帆先生の顔が近づいてくる。麻帆先生がデンタルミラーと探針を持って、ライトを愛美の口にあてる。光がまぶしい。
「はーい、お口アーン」と麻帆先生が促す。「かすみちゃん、カルテお願いね」
　愛美は、口を開けた。デンタルミラーと探針が入ってくる。
「左上からいきます。７番Ｃ１、６番〇、５番〇、４番〇、３番斜線」前歯にカリカリと探針の音がした。「２番Ｃ１、１番しゃ、ちょっと待って」再び探針がカリカリされた。「１番Ｃ１、右へいって１番Ｃ１、２番３番斜線、４番〇」
〝えっ、前歯が虫歯になってる。そんな……〟愛美はショックを受けた。
「あーっ、インレーがとれちゃったのね」と麻帆先生はシリンジを持ち、右上の第２小臼歯にシューッとエアーをかけた。

「つつっ」愛美は、思わず顔をしかめる。
「ちょっと虫歯が進行してるわね。５番はＣ２、６番○、７番○」
「かすみちゃん、バキュームお願い」
「はい、先生」かすみは、溢れ出た愛美の唾液をバキュームで吸い取った。
　コォー。ジュ、ジュ、ジュポー。コォォォー。
〝やだ、恥ずかしい……〟バキュームの音を聞き、愛美は少し赤くなった。
「次、左下にいきます。７番○、６ばん……」またもや、探針でカリカリされる。この歯は治療してあるのだが、インレーと自然歯の境目を探られている。実はこの歯が染みる歯なのだ。
「ううっ」声が漏れる。
「うーん、これもインレーのしたから虫歯になっちゃってるのね。６番Ｃ２かな、このあとレントゲンを撮ってみましょう。でもインレーを外さないと、詳しくは、ね。５番から右の４番まで斜線、５番○、６番○、７番○。以上よ」
「ちょっと、虫歯、処置歯ともに多いかな。愛美ちゃん、ちゃんと歯磨きしてる？　今回の治療が終わったら、かすみちゃんにブラッシングの指導をしてもらってね。じゃあ、ひとまずレントゲンを撮りますね。いす起こしまぁーす。お口ゆすいでね」と麻帆先生はペダルを踏み、ユニットを起こしてくれる。愛美は口をゆすいだ。
「かすみちゃん、お願い」と麻帆先生はカルテに記入しながら、かすみに指示を出す。
「はい。じゃあ、愛美ちゃん、レントゲンを撮りますから、こっちに来てくれる？」とかすみは、愛美を隅の小部屋に案内していく。
　愛美は歯科エプロンをつけたまま、スリッパを履き、かすみについてゆく。かすみが部屋のドアを開け、
「どうぞ」と愛美を誘導する。
　愛美は中の椅子に座った。

「これを噛んでね」とかすみはマウスピースのようなものを愛美に噛ませ、部屋のドアを閉めた。
「はい、リラックスしてね」マイクを通して、かすみの声が聞こえる。
　愛美の顔のまわりをパノラマレントゲンのユニットが通過する。
「はいお疲れさま。治療台に戻ってね」
　愛美は、治療用の歯科ユニットに戻り、腰をかけた。
　しばらくすると、かすみがレントゲン写真を手にこちらへやってくる。レントゲン写真を受け取った麻帆先生は、それをユニットの投影機にかけた。蛍光灯の青白い光がレントゲン写真を背後から照らし、愛美の口腔内が映し出された。
「うーん。６番のＣ２、思ったよりも悪くないわ。ほかの虫歯もそんなには進行していないわ。ほら、ここ見て、愛美ちゃん。左下の６番、この白く写ってるのが詰め物なんだけど、その下に陰があるでしょ。で、陰の下の黒い部分が神経なんだけど、ギリギリでつながってないのわかる？」
　愛美は、こっくりと頷いた。
「そうね、じゃあ、今日は今説明した６番の虫歯から治療していくわね。とりあえず麻酔はしないで、治療していくわ」
〝えっ。麻酔なしって、とっても痛いんじゃない……？〟愛美は、麻酔なしと聞いて不安が募った。そして迷っていたが、思い切って麻帆先生に聞いた。
「先生、麻酔なしって痛くないですか？」
「大丈夫よ。それに麻酔は体に負担も大きいし、できれば使いたくないの。でも痛みががまんできなかったら、遠慮なくいってね。そのときは麻酔をするから」麻帆先生は微笑みながらいった。
「それと……」
「それと、なあに？」
「前歯の治療は痛いって聞くし、それに私の前歯治したら、詰め物が目立っちゃうんじゃないですか？」愛美は不安と恥ずかしさの入り交じっ

た気持ちで聞いた。
「大丈夫よ。愛美ちゃんの前歯は、次回に治療しましょ。前歯の治療のときは、最初から麻酔するから。それに詰め物も白いものを使うから。最近の白い詰め物は治療したっていうのがわからないくらい自然に見えるの。きっときれいに治るわ。心配しないで」麻帆先生はニッコリという。
「そうよ。治しても全然わかんないんだから。先生のいうことを信じて」かすみが笑顔でいう。
「じゃあ、治療していきましょう」
「愛美ちゃん、がんばって虫歯治そうね」
　麻帆先生とかすみが交互にいって、愛美を励ます。
「いす倒すねー」麻帆先生は、ユニットのペダルを踏む。ゆっくりとユニットが倒れていく。愛美の顔が麻帆先生の手元に近づいていく。ライトが点灯され、愛美の口に光があてられる。まぶしい。
「愛美ちゃん、お口開けて。アーン」麻帆先生は、左手のデンタルミラーで愛美の左頬を大きく開けさせ、ピンセットでふくみ綿をつまみ、左下６番の頬側と舌側にふくませ、治療に必要なスペースをあけた。
「愛美ちゃんも希美ちゃんも純姫よねぇ。何期？」麻帆先生は、タービンにハンドピースをセットし､先端につけるドリルを選びながらいった。
「私が７７期で、妹の希美は８０期です」愛美は答える。
「実は、私と姉の真希も純姫出身なのよ」
「本当ですか」愛美は、目を丸くして答える。
「ええ、本当よ。私が６８期で、姉が６６期。それにここにいる衛生士の長澤かすみちゃんも、希美ちゃんの担当衛生士の石原紗季ちゃんも純姫。ふたりは同級生で、７１期」
「そうよ。愛美ちゃん、先輩たちがこんなについてるんだから、なんにも心配しなくていいんだぞ」かすみが戯けていう。
「愛美ちゃん、純姫の歯科検診で虫歯見つかったら、ブラッシング指導あるでしょ。あれは姉が入学する２年前から始まったのよ」麻帆先生は

手を止め、少し遠くを見るような目をした。
「私も姉も小さい頃から虫歯が多くてね。歯医者さん嫌いだったわ。治療痛いものね」麻帆先生は、いたずらっぽくウインクする。
「でも、純姫に入学して、歯科検診してくれた学校歯科医の先生、今も純季の学校歯科医してるんだけど、佐藤先生。その先生に徹底的に治療してもらって、ブラッシング指導を受けて、歯の大切さがわかったわ。それで、歯科医になろうと思ったの。姉もいっしょよ。かすみちゃんも紗季ちゃんも虫歯で悩んだ時期があったの。でも私たちみたいに純姫に入学して同じように歯の大切さを学んだの。だから、愛美ちゃんも怖がらないで、ちゃんと治療してほしいの。希美ちゃんにも」麻帆先生は、真剣な目で愛美を見る。
　愛美は、麻帆先生が本当に私たちのことを考えていてくれるんだ、と思った。
「じゃあ、いす倒すわね」
　ドリルを装着し終えた麻帆先生が、ユニットのペダルを踏んで、ユニットを倒す。ライトが点灯され、愛美の口が光で照らされる。愛美の左側では、かすみがバキュームを構えた。
「はい、お口大きく開けて。アーン」麻帆先生がタービンを構えていう。
「麻帆先生はとってもやさしいから、痛くないからねぇ〜大きくアーンしようね〜」かすみが愛美を励ますようにいう。
「痛かったら、左手を挙げて教えてね。すぐに治療やめるから」
〝やっぱり、怖い……。でも、がんばって治療しなきゃ……。夏帆励ましてくれたし……。ママおこるし……。〟愛美は色々な気持ちがない交ぜになっていた。
〝お願い、すぐ済みますように〟祈るような気持ちで、愛美は目を閉じ、口を開けた。愛美の口にダービンとバキュームが入る。すぐにタービンが愛美の左下６番のう蝕した歯を削り始める。
　キュイーン、キュイイイイーーン、チュイイイーン。
　コォー、ジュポポポポー。

キュイーン、キュイーン、キュイ、キュイ、キュイイイイーーン。

奥歯にカチャッとした感覚があった。

麻帆先生は、タービンを戻すと、ピンセットを持ち、愛美の口に入れる。カチャカチャと音がして、つめのついたような十字型のインレーが取り出された。インレーのとれた歯は、前に削った穴が茶色く変色している。

「少し削ったら、とれたわ。インレーの下で虫歯になってたから、もうほとんど詰め物の役目をはたしていなかったわ。一度口ゆすいで」ユニットが起こされる。

〝今は全然痛くなかった……。この調子ですぐに済めばいいのに〟と愛美は思いながら、クチュクチュと口をゆすぐ。

再びユニットが倒れ、愛美の口に麻帆先生の手元が近づく。

「はぁーい。アーンして」

愛美が口を開けると、麻帆先生はピンセットでふくみ綿をあたらしいものへと交換した。次にデンタルミラーとエキスカーベーターを入れた。そして、インレーをはずした歯の穴のあいたところへエキスカーベーターを入れ、虫歯でやわらかくなった象牙質を掻き出す。

「んうっ」愛美は不快感を感じ、思わず声を出し、口を閉じそうになる。

「大丈夫よー。もう少し大きく開けて」

麻帆先生は、エキスカーベーターをトレイに置き、またタービンを手に持ち、先端のドリルを愛美の虫歯にあてがう。かすみの持つバキュームも口の中にはいる。

キュイーン、キュキュキュキュ、キュイイイイーン。

キュイーン、キュイ、キュイ、キュイーン、チュイーン、チュイイーン。

今度は本格的に虫歯を削り取る治療が始まった。愛美は大きく口を開け続けた。

「そう、その調子よ、愛美ちゃん」かすみがほめる。しかし、削り始めて、１分半ほどたった頃、キーンとした鋭い痛みが愛美を襲った。

「んんっ」愛美は口を閉じそうになる。
「ダメダメ、危ないよ。はい、大丈夫だから」麻帆先生は、愛美の虫歯を削りながら、注意した。
「愛美ちゃん、もう少しだから、がんばろ」かすみが励ます。
　愛美は、脚をあわせ、足の指を曲げてがまんしている。だが、麻帆先生のドリルが深みを増すにつれ、痛みをがまんできなくなってきた。
〝ふうん、ふうん、麻帆先生、かすみ先生、痛い！！、痛いよ！！　もうやめて〟愛美は心の中で叫び、左手を挙げた。だが、麻帆先生は、
「そうね。ちょっと痛いわね〜。でももうちょっとがまんしようね」というだけで、いっこうに削るのをやめてくれない。
「愛美ちゃーん。ほんともう少し、もう少しだよ。がまんしよ」とかすみもいうが、もう少しが、少しももう少しでない。愛美はすでに涙目になり、ふうん、ううんと麻帆先生、かすみに痛みをうったえるが、ふたりとも治療を止めてくれない。さらに１分半ほど後にようやくタービンがとまった。
　キュイイイイーーン。
　ユニットが起こされる。愛美はハンドタオルで目尻の涙を拭いた。
「一度、口ゆすごうか。ごめんね、愛美ちゃん。中で、深くはないんだけど虫歯が広がってたの」口をゆすぐ愛美の背中に麻帆先生は声をかける。
「愛美ちゃんが左手挙げたのはわかってたんだけど、そのときはこれほど長く削らなきゃならないとは思わなかったの。ごめんね」
〝先生のうそつき！　痛かったら削るのやめるっていったじゃない〟と愛美は思いながら、麻帆先生のことばを聞いていた。〝これだけ削ったんだから、後は型どりよね。ううん、うまくいけばもう詰めてもらえるかも……〟
「じゃあ、もう一度倒すね」ユニットが倒れていく。
「はい、アーン」
　愛美が口を開けると、麻帆先生は、今度はシリンジを口の中に入れ、

エアーを吹きかけた。

シュッ、シュッ。

「んあぁ、ぅうっ」ツーンと染み、愛美から声が漏れ、顔をしかめる。

「あら、まだ虫歯が残っているわね」と、麻帆先生はデンタルミラーを持ち、丹念に削った歯を診る。そして、またタービンを口に入れ、タービンを回転させた。ドリルが容赦なく虫歯を削りだした。

キュイーン、キュキュキュキュ、キュイイイイーン。

〝えっ、なんで、削るの終わりじゃないの！？〟愛美は気が動転していた。心の準備ができていなかったため、もはや半べそをかいていた。

ふうん、ふうんうん、んあぁ。

キュイーン、キュイーン、チュイイイーン。

コォー、ジュポポポポー。

キュイーン、キュイーン、キュイ、キュイ、キュイイイイーーン。

「はいはい、もう少しだから、がんばって」

「愛美ちゃん、痛くないよ〜、大丈夫だよ〜」麻帆先生とかすみが治療を続けながら愛美を励ますが、つづく治療の痛みにとうとう愛美は泣き出した。

ふえっえっ、ふえっえっ。

ふううん、ふん、んぁ、ふえっ、ふえっ。

嗚咽が漏れる。

キュイーーーン、キュイーン。

ココココココォー、コォー。

キュイーン、キュイーン、チュイイイーン。

ふうん、ふうん、ふううん。

なおもタービンの音と愛美のむせぶ声が診察室に……。

キュイ、キュイイイイイーン。

ひときわ高く音がなると、ようやくタービンが止められた。

「愛美ちゃん、よくがんばったわね。削るのは、これで終わり。もう少しお口開けててね」と麻帆先生は、タービンをシリンジに持ち替え、削

った穴にシューとエアーをかけた。次にピンク色の印象材をのせた型を愛美の左の下顎と上顎に噛ませた。
「しばらく、このまま、じっとしていてね」とライトを消す。
　愛美は、涙をハンドタオルでそっと拭き、麻帆先生越しに、隣のユニットを見ると、もう芽以の姿はなかった。
〝ふぅ、痛かったなぁ……。芽以ちゃん、今日の治療終わったみたいね。私みたいにだいぶ削られていたみたいだったけど、大丈夫かなぁ……〟とぼんやり考えていた。
「もう、いいかな」と麻帆先生はライトと点けると、愛美に口を開けさせ、印象型をとりだした。愛美の上顎と下顎の歯型がくっきりととれている。削った歯の型もよくわかる。そして、ガーゼをホルマリントリクレゾールに浸し、愛美の削った穴を消毒して、セメントで仮封をした。
「はい、今日の治療はこれでおしまい。お疲れさまぁ。よぉーく、口ゆすいでね」と麻帆先生がペダルを踏み、ユニットを起こしてくれる。
　愛美は、クチュ、クチュと口をゆすぎながら、〝高校生にもなって、歯医者さんで泣いちゃうなんて……。ちょっと恥ずかしい〟と思っていた。愛美が口をゆすぎ終わると、麻帆先生は、
「さっきも少し説明したけど、今日削った虫歯は中で広がってたの。だから、削る時間が長くなっちゃったの。ちょっと痛かったと思うけど、麻酔は体に負担が大きいから、がまんしてもらったの。ごめんね。それから、これだけ広がってたら、染みたりしたと思うんだけど……。ほんとに染みたりしなかった？」
　愛美は、嘘がばれたとドギマギしたが、ううんと首を横に振った。麻帆先生はちょっと疑わしそうにしていたが、
「そう……。まあいいわ。でも、愛美ちゃん、インレーがとれてるところもあるし、虫歯や処置歯も多いし、これからはちゃんと歯磨きして、定期的に歯医者さんに診てもらわないとダメよ。虫歯をつくっちゃったのは、愛美ちゃん自身なんだから。……それから、次回以降の治療について、説明します。今日削ったところは、次回インレーを入れます。

で、インレーがとれちゃってる右の５番を治療して、それから前歯の３本の小さな虫歯を治療します。前歯は薄いから、タービンの振動も伝わりやすし、ちょっと痛むかもしれないので、ここは麻酔をして治療します。いいわね？　じゃあ、次の予約なんだけど、姉の診療を受けている希美ちゃんは、１週間あとの午後５時になってるんだけど……。それでいい？」

〝先生に叱られちゃった……。虫歯多くって恥ずかしい……〟愛美はしょんぼりした気持ちで思った。

「はぃ」治療の疲れか、元気のない声で、愛美は答えた。

「……それで、お願いします……」

「じゃあ、予約をとっておくわね。かすみちゃん、エプロン外してあげて」

「はい、先生。愛美ちゃん、エプロン外すねぇー。今日はよくがんばったね。その調子で私たちと虫歯治そうね」かすみは愛美から歯科エプロンを外し、スリッパをそろえてくれた。

「先生、ありがとうございました……」愛美はお礼をいって、スリッパをはく。

「お疲れさま。お大事に」麻帆先生は笑顔で送ってくれる。

　愛美は待合室に続くドアを開け、出ていった。

　愛美は、スクールバッグを手に、診察室から出てきた。

〝ふうぅ。それにしても、痛かったぁ……〟と思いながら、ソファーに腰掛けた。〝麻帆先生、次、前歯治療するっていってたなあ。ママや友だちの話だと、前歯の治療は泣くほど痛いっていってたし……、いやだなぁ……。〟

　そんなことをぼんやり考えていると、受付から、

「若槻さーん、若槻愛美さぁーん」と呼ぶ声がする。真希先生、麻帆先生のお母さんだ。

　愛美は受付へ行き、会計を済ませ、新しく作られた愛美の診察券を受

け取った。見るともなしに受付の時計を見ると、午後４時３５分を指していた。〝３０分も治療されてたんだ〟

治療を終えての帰り道……。
〝ほんとに、痛かった……。まだ、ズキンッ！ズキンッ！するよう……〟愛美は、今日削られた仮封した歯が痛んだ。〝次の治療もこんなに痛いのかなぁ……。やだなぁ〟
愛美の携帯から、大塚愛の『ＳＭＩＬＹ』のメロディ♪が鳴り、携帯にメールが着信した。

どうだった～o(^-^)o、痛くなかった…(^_^;)

夏帆からだ。
愛美が返信した。

・・・え～ん(>_<)、痛かった…(ToT)　もうやだっ(-.-;)

３．再びの憂鬱

はじめの治療から１週間後の午後４時５０分。クラブ活動を終わり、愛美と希美は再び奥田歯科医院にきていた。窓からブラインドを通して、治療風景が見える。
中にはいると、歯医者特有の消毒液の匂いと、時折、キュイーン、キュイーンとタービンの音が聞こえる。タービンの音に、愛美と希美は前回の自分たちの治療の痛さを思い出し、胸が高なった。よく聞くと、診察室の方からむせぶ声と、麻帆先生、かすみの励ます声が聞こえてくる。
〝結衣の声だ！！〟希美は思った。
キュイーン。キュイーン、キィ、キュイ、キュイイイイーン。

コォー、コココォー。ジュポ、ジュポポポポポー。
「ふぅん、ふん、ふん、んぁ、ふぅん、ふん」
「はぁーい、結衣ちゃん、がんばって。もう少し大きくお口開けて」
「結衣ちゃん、痛くない、痛くない、大丈夫だよ」麻帆先生とかすみが交互に結衣を励ましているのが、待合室に響く。生々しい治療の音がふたりの耳にはいる。
愛美と希美は思わず顔を見合わせ、憂鬱になった。
勇気を振り絞って、受付にいく。真希先生、麻帆先生のお母さんが今日も受付に座っている。
「こんにちは」ふたりは声をそろえて、あいさつをした。
「こんにちは。予約に来てくれたのね。お母さま、お元気？」
「はい、母は元気です。これお願いします」と愛美と希美の診察券を渡す。
「はいはい」と真希先生、麻帆先生のお母さんが診察券を受け取ると、衛生士の石原紗季が次の患者の準備を終え、愛美と希美を見つけて、受付の後ろから声をかけてきた。
「愛美ちゃん、希美ちゃん、よく来てくれたわね。ふたりともう少し後だから、ソファーにかけて待っててね」といい、奥の診察室の方へ入った。
「はい」とふたりは返事をして、ソファーの方へいった。
すると、夏帆が沈んだ表情でソファーに座って待っていた。治療を前にして元気がない。そのとき診察室から制服を着た小学校高学年くらいの女の子が治療を終えて出てきた。制服を見ると皓大教育学部附属小学校の生徒のようだ。女の子は痛い治療だったのか、泣きながら、「エッ、エッ、ママー、うわーん、痛かったぁ〜」とソファーで待っている母親のところへかけよる。「由紀ちゃん、よくがんばったねー。泣かない、泣かない」母親が慰めている。その光景を目の当たりにして、愛美と希美は不安な表情で顔を見合わせた。
気を取り直し、愛美と希美が声をかけようとすると、紗季が診察室の

ドアを開け、
「仲根さぁーん、仲根夏帆さぁーん、診察室にお入りください」と夏帆を呼んだ。
　夏帆は、愛美と希美に目で軽く会釈をして、沈んだ表情のまま、ほどなく診察室に入っていった。

　キュイーン、キュイイーン。
「ふうん、ふん、ふん」
「はい、だいじょうぶ。お口閉じちゃダメ」
「結衣ちゃん、あともうちょっと、がまんしようね。大丈夫だよ〜」結衣、麻帆先生とかすみの声が待合室に漏れてくる。そのたびに愛美と希美はドキッとする。手に持つ雑誌の内容は、さっぱり入ってこない。

　しばらくすると、今度は別の歯を削る音と、真希先生と紗季の励ます声が聞こえてきた。
　キュイーン、キュイイイイイーーン。キュイ、キュイ、キュイイイイーン。
　コココォー、コォー。ジュポポポポー。
「その調子よ。大きくお口開けててね」
「夏帆ちゃん、いいよ、痛くないからね〜。そのまま大きく開けててね」夏帆が治療を受け出したようである。愛美と希美はますます胸がドキドキしてきた。〝はぁ、結衣、痛そうだなぁ〜〟、〝夏帆も痛そうだし……〟ふたりは顔を見合わせて思った。〝はぁ〜、いやだなぁ〜〟

　そのとき、カチャッと診察室のドアが開いた……。
　堀北結衣が半べそをかきながら、待合室に出てきた。顔は涙でぐちゃぐちゃだった。ときおりハンドタオルで涙を拭っている。衛生士の長澤かすみがついてきてなぐさめている。愛美と希美は結衣にかけるべき声を失った。希美は前回の自分を見ているように思った。

「結衣ちゃん、よくがんばったよ〜。ねっ、もう泣かないで。今日の治療は終わりだから」
「次はこんなに痛くないよ〜。だからもう泣きやんで」かすみは結衣を懸命に慰めている。
　すると診察室の中から、タービンの音のほかに、夏帆のむせぶ声が聞こえてきた。

「夏帆ちゃん、お口閉じちゃダメ。大きく開けて」
「夏帆ちゃん、もうちょっとがまんしようね〜、痛くないから」
　キュイーン、キュイ、キュイ、キュイイイイーン。
　コォー、ココココォー。ジュ、ジュ、ジュッ。
「ふん、ふん、ふうぅーん、ふん」
「はぁーい、痛くない、痛くない」真希先生と紗季は励ますが、夏帆のむせぶ声はますます大きくなっていた。愛美と希美はいつ自分の順番が来るかと気が気でない。

　結衣は、かすみにソファーから抱きかかえられて受付に案内され、会計を済ますと、愛美と希美に涙に濡れた顔を向け、頭を下げると、奥田歯科医院から出ていった。

　かすみは結衣を受付へつれていったあと、診察室へ戻っていったが、すぐに診察室のドアを開けて患者を呼びだした。
「若槻さぁーん、若槻愛美さぁーん、診察室へお入りください」
〝えっ、私だ。どうしよう。希美が先じゃないの！？‥‥‥あー、やだ。どうしよう〟愛美は、この前と同じようにてっきり希美が先に治療を受けるものだとばかり思っていたのだ。
〝えっ、お姉ちゃんが先！？‥‥‥うっそ、よかった。私じゃないんだ。でも、待ってる方がよけい怖いかも〟希美は順番が後だったことにホッとしていたが、治療が後になるほど怖さが増すかなぁとも思っていた。

愛美は仕方なく、スクールバッグの中のポーチからハンドタオルを取り出し、診察室のドアを開けて入っていった。

愛美が診察室の中にはいると、荷物棚に見覚えのあるスクールバッグがあった。〝夏帆のだ〟愛美は思った。
「愛美ちゃん、こっちの治療台に腰掛けてね」かすみがイエローの歯科ユニットを指す。この前、愛美が治療を受けた右隣のピンクのユニットには夏帆が寝かされ、真希先生と紗季の治療を受け、タービンで虫歯を削られている最中だった。
キュイーン、キュイーン、キュイ、キュイ、キュイイイイーン。
キュイーン、キュイ、キュイ、チュイイイイーン。
コォー。コォオオォー。ジュポポポポー。
「ふん、ふん、ふぅん、ふん、んぁ」
「お口閉じちゃダメよ〜」
「もうすこしがまんして〜。動いちゃダメ〜。虫歯つくっちゃったのは、夏帆ちゃんなんだから」
キュイーン、キュイ、キュイ、キュイイイイーン。
「ふぅん、ふん、ふん」
真希先生と紗季が励ましているが、夏帆はひざと足指を曲げ、身を捩りながら、必死で削る痛みに耐えている。ひっきりなしにむせぶ声がしている。
〝夏帆、痛そうだなぁ……。はぁ、今日も治療痛いのかなぁ……。怖い……〟愛美がそう考えているうちに、愛美の胸に水色の歯科エプロンがつけられ、麻帆先生を待つばかりとなった。かすみが麻帆先生を呼んできた。
「愛美ちゃん、お待たせ。じゃあ、今日の治療始めるわね」
「今日は、まずこの前削った左下の６番にインレーをいれます。次に右上のインレーの取れてる５番を治療します。で、ここがそんなにひどくなかったら、そうねぇ〜、前歯治療しちゃおうか、ねっ、キレイになる

し」麻帆先生は、明るく今日の治療を説明する。
〝えっ、そんなに一度に治療するの‥‥‥〟と、愛美は不安そうな顔で麻帆先生を見る。すかさず、かすみが
「大丈夫、愛美ちゃん、心配ないよ。そんなに大変な治療じゃないし、先生のいうように、キレイなるよ。ねっ」と愛美の不安を打ち消すように、元気いっぱいに励ます。
〝仕方ないかなぁ‥‥‥。そうね、どうせ治療しなきゃなんないんだし‥‥‥〟不安を押し込めて愛美はいった。
「お願いします」
「じゃあ、お口開けてねー」麻帆先生はペダルを踏んで、ユニットを倒し、ライトを点灯する。愛美の口元に無影灯の光があたる。麻帆先生は、デンタルミラーとピンセットを持ち、愛美の口の中に入れ、６番の仮封のセメントを取り除く。ここで口をゆすぐ。次にトレイの上にあるインレーをピンセットでつまみ、愛美の左下６番に置いた。カチャカチャと音がし、歯にのせられはめられる感じがして、愛美はちょっと違和感を感じた。麻帆先生は愛美の口からインレーを取り出し、タービンで調整する。再び愛美の口の中に入れ、左下６番の削った穴にあわせる。麻帆先生はそれを何度か繰り返した後、接着のセメントを削った穴に塗り、インレーを装着した。愛美は削った歯の上からギュッと押さえられ、思わず声を出した。
「ううっ」
「大丈夫よー。はい、ギュッと噛んでいてね」と麻帆先生はインレーを装着した歯の上にふくみ綿を置き、愛美に噛ませた。
「インレーがつくまでちょっとお休みね」とライトを消す。愛美はふくみ綿を噛みしめながら、しばらくじっとしていた。
「もういいかなー」麻帆先生は再びライトを点け、愛美の口を開けさせる。ピンセットでふくみ綿を取り出し、セメントについた綿くずもとってくれる。そして、噛み合わせをみるための紙を何度か噛ませ、タービンで高さを調整する。

ウィィィーン、ウィィーン。
「うっ」
「ちょっと、がまんしてね」
愛美は痛くはなかったが、口の中にタービンが入る不快感を感じていた。
「はい、これで６番は治ったわ。どう、噛み合わせの違和感はない？」
愛美はカチカチと噛んでみて、
「はい、大丈夫みたいです」と答えた。
「じゃ、お口ゆすいでね」とユニットが起こされる。愛美はクチュクチュと口をゆすいだ。
「調子がよくないようだったら、また次の治療のときに調整するから。じゃあ、次の治療ね」と再び、ユニットが倒される。
「お口アーン。大きく開けて」麻帆先生はデンタルミラーとピンセットを持ち、ピンセットでふくみ綿をつまんた。そして、愛美の口の中に入れ、インレーのとれた右上５番の頬側にふくみ綿をはさませ、治療スペースをつくる。次に麻帆先生はピンセットをタービンに持ち替え、愛美の口元にすすめた。かすみもバキュームを愛美にむける。
〝えっ、また麻酔なしに削るの！！〟愛美は前回の痛みを思い出し、不安な顔になる。
「大丈夫よ。虫歯そんなに進行してないから」麻帆先生はやさしくいう。
「そうだよ。大丈夫だよ。それに痛かったら、左手を挙げて先生にいえばいいんだから」とかすみも愛美の不安を打ち消すように明るくいう。
〝また、泣いちゃわないかなぁ……〟と愛美は思ったが、仕方なくふっと口を開けた。バキュームが口に差し込まれる。続いて、麻帆先生の持つタービンが愛美の口に入り、ドリルが右上５番の虫歯を削り始めた。
キュイーン、キュイ、キュイ、キュイイイイーン。
コォー、コォオオオー。
キュィーン、キィーン、チュイイイイーン。
キュイーン、キュイーン、キュイ、キュイ、キュイイイイーン。

コォォォォー、コォー。ジュ、ジュ、ジュポポポポー。

愛美はタンパク質の焦げる匂いと、キーンとする痛みを感じていたが、がまんしていた。タービンが止まった。

「はい、お口ゆすいでね」麻帆先生は、ユニットを起こしてくれた。

〝えっ、これで終わり！？　あんまり痛くなかった。ほんとにこれで終わりだったら、いいなぁ〟と思いながら、愛美は口をゆすいだ。ユニットが倒れる。

「お口、アーン」と麻帆先生は、愛美の口を開けさせ、削った右上５番の歯にシリンジでエアーをシュッとかける。そして、愛美に印象材を上顎と下顎に噛ませる。

「しばらく、噛んでてね」ライトが消される。愛美は印象材を噛みながら、〝今日はそんなに痛くないなぁ〜。これで終わりだったらいいなぁ……。次、前歯治療するのかなぁ〟と考えていた。愛美が隣のユニットをチラッと見ると、夏帆の治療が終わったらしく、夏帆はユニットから降りていた。夏帆は鼻を啜り、ハンドタオルで目尻を拭っている。愛美はユニットに身をゆだねながら、〝夏帆、泣いてる……。痛かったんだろうなぁ〟と思った。

「はい、もういいかな」と麻帆先生はライトを点け、愛美の口から印象型を取り出し、ガーゼにホルマリントリクレゾールを浸し、削った穴を消毒して、セメントで仮封をした。

「ここはそんなにひどくなかったわ。インレーがとれた周辺がちょっと虫歯になってたくらいだったわ。次にはインレーを入れられるわ。……じゃあ、予定通り前歯治療するわね。かすみちゃん、シンマお願い」

「はい、先生」とかすみが麻酔のカートリッジが装着された注射器を麻帆先生に手渡す。

〝はぁ〜。やっぱり治療するんだ……。仕方ないなぁ……。どうか、治療が早く終わりますように！！〟と愛美は祈った。

「はい、お口開けてね〜。アーン」

愛美は目を閉じ、口を開けた。麻帆先生は前歯の歯茎に麻酔注射の針

をそっと刺す。愛美の歯茎に浸潤麻酔の薬液が注入されていく。愛美はチクッとした痛みの後、じーんと重い痛みが前歯の歯茎に広がるのを感じた。
「ううっ」
「はい、大丈夫よ。もう少しがまんして〜」麻帆先生が励ます。
「もう１本打つわね」
　愛美は、今度は前歯の裏側の歯茎にチクッとした痛みを感じた。
「ふんっ」
「もうちょっとがんばって〜」やがて麻酔の薬液がすべて愛美の歯茎に注入された。
「ちょっと、休憩ね。お口ゆすいで」ユニットが起こされ、愛美は口をゆすぐ。麻帆先生はライトを消し、愛美に麻酔の効果が現れるまで少し待った。
「もう、いいかな」と再びライトが点灯され、ユニットが倒される。愛美の口が麻帆先生の手元に近づいてゆく。
「かすみちゃん、アングルワイダーをちょうだい」
「はい、先生」
　麻帆先生は、かすみから開口器を受け取ると、
「愛美ちゃん、大きくお口開けて、アーン」といって開口器を愛美の口に装着する。愛美は予想外の展開に〝えっ、なにこれ！？　前歯の治療ってこんなのするの！？　やだ、恥ずかしい〟と、目を丸くしている。それを見た麻帆先生が、
「愛美ちゃん、前歯は唇に近いし、タービンが唇にあたったりしたら、危ないからアングルワイダー、これアングルワイダーっていうんだけど、これをつけて安全に治療するためにつけるの」と教えてくれる。
「そうよ、愛美ちゃんなんにも心配しなくていいんだから」とかすみも愛美を安心させようと話しかける。
　麻帆先生は、愛美の前歯をデンタルミラーの柄の部分でコンコンとたたき、麻酔が効いているかを確認した。そして、タービンにあらたなド

リルを装着する。デンタルミラーとタービンを持ち、愛美の口に入れる。かすみもバキュームを愛美の口に入れる。愛美の左上２番と１番の間のう蝕した歯にドリルをあて、タービンを回転させた。

キュイーン、キュイーン、キュ、キュイ、キュイ、キュイイイイーン。

愛美の虫歯のう蝕した部分を削り取るべく、麻帆先生は大胆にドリルを使う。

キュイーン、キュイ、キュイ、キュイイイイーン。

コォー、コォー、コォォォォー。ジュポポポポー。

かすみは巧みにバキュームを使う。

愛美は目を閉じていたが、麻酔をしていても削る振動が上顎から鼻のあたりにつたわってくる。やがて削る痛みがキーンとつたわってきた。思わず顔をしかめ、ひざを曲げる。

「大丈夫よー。あともうちょっとだからねー」かすみが励ます声を聞いて、愛美が薄目を開けると、目の前に麻帆先生の顔があり、ドリルが間近に見える。自分の前歯が削られているのが、この視界からわかり、削る痛みと前歯を削る悲しさで涙目になる。思わず、むせぶ。

「ふうん、ふん、ふぅん、ふぅん」

「はい、もうちょっとがまんしてー。はぁーい、痛くない、痛くない。もう終わりだから」麻帆先生は、愛美を励ましながら、左上を削り終わり、右上１番を削っていた。

キュイーン、キュイーン、キューン。

コォー、コォォォォー。

キュイーン、キュイ、キュイ、キュイイイイーン、チュイーン。

「ふん、ふん、んんぁ」

「ほんと、あともうちょっとだよー。愛美ちゃん、痛くないから。がんばってー」かすみがバキュームを使いながら、励ます。

キュイイイイイーーン。

コォォォォー、ジュ、ジュ、ジュポポポポー。

タービンが大きく音を立て、止まった。

「かすみちゃん、１０番。光重合します」
「はい、先生」かすみから麻帆先生に、レジンが渡され、愛美の左上２番１番、右上１番の削ったところへ詰められた。そして、光重合のための光が照射される。レジンの硬化が終わった。
「キレイに治ったわ。お口ゆすいで」麻帆先生は、ユニットを起こしてくれる。愛美は開口器を外され、口をゆすぐが、麻酔が効いているせいで口から漏れ、うまくゆすげない。〝やだ、恥ずかしい〟
「見てみる？　かすみちゃん、手鏡ちょうだい」とかすみから手鏡を受け取った麻帆先生は、それを愛美に渡してくれる。愛美は手鏡を自分の口にかざした。確かに前歯を治療したようには見えない。白いキレイな歯が並んでいる。愛美は、パッと笑顔になる。
「せんせい！！」麻帆先生、かすみも笑顔で頷いてくれる。
「ありがとうございます！！」
「よくがんばったわね。その調子で、次の治療もがんばろうね。で、次回なんだけど、次回は今日削った右上５番にインレーを詰めるわね。それから、あと１本ある左上７番の虫歯を治療するわ。そんなに進行してないから削って､今日の前歯みたいにレジン詰めるだけでいいと思うわ」と麻帆先生は次回の治療を説明してくれる。
　まだ、治療するところがあると聞いて、愛美は気持ちが少し暗くなったが、「はぃ」と返事をする。
「あらあら、おかしいぞ。さっきは笑顔だったじゃない」とかすみが励ますようにいう。
「で、次回は１週間後、今日と同じ月曜日でいい？　時間は、……今日と同じで午後５時でいい？」
「はい、それでお願いします」愛美は答える。
「じゃあ、また１週間後、愛美ちゃんよろしくね」麻帆先生とかすみが交互にいう。
　かすみが、愛美のエプロンを外し、スリッパを整えてくれる。
「愛美ちゃん、お大事にね」麻帆先生とかすみがいった。

「ありがとうございました」と愛美は、お礼をいい、隣のユニットに寝かされている妹の希美をチラッと見た。さっきから治療が始まっているのだ。希美は真希先生と紗季により根管の治療を受けている。真希先生はグイグイと大胆にリーマとファイルを使い、希美の歯の根を掃除をしている。希美はひざを曲げ、足指をユニットに押しつけてがまんしている。時折、希美の声が漏れる。
「ふうん、ふん、んぁ」
「希美ちゃん、がまんしてー」
「痛くない、痛くないよー」真希先生と紗季が交互に励ます。
「うん、うぅん、ふん」
〝希美痛そう……。大丈夫かなぁ〟愛美は診察室のドアへ向かいながら思った。〝希美の治療、始まったばかりよね〜。希美のかばん、持って行かなきゃ〟愛美は、自分と希美のスクールバッグを手に待合室に出ていった。

夏帆が目を真っ赤にして、右頬をハンドタオルで押さえながら、待合室に出てきた。希美が声をかけようか迷っていると、希美にも呼び出しがかかった。
「若槻さぁーん、若槻希美ちゃぁーん」紗季が診察室のドアから呼びかける。
希美は夏帆に声をかけるタイミングを失ってしまった。仕方なく、ハンドタオルを手に立ち上がろうとすると、姉の愛美の治療がまだ終わっていないことに今更ながら気づき、〝お姉ちゃん、治療長いなぁ……。虫歯ひどいのかなぁ〟と思いながら、ふたりのスクールバッグを手に診察室に入っていった。

診察室にはいると、愛美が麻帆先生に虫歯を削られ、かなり痛そうにしていた。希美はこれからはじまる虫歯治療に不安な気持ちが募った。

荷物棚にスクールバッグを入れ、自分のスクールバッグの中からハンドタオルを取り出す。
　紗季は、愛美が治療を受けている隣のピンクのユニットを指し、
「希美ちゃん、こっちの治療台に座って」といった。
　希美がユニットに座ると、愛美のむせぶ声が、隣のユニットから聞こえる。
〝お姉ちゃん、痛そうだなぁ……。希美の、今日の治療も痛いのかなぁ……。やだなぁ……。はぁ、憂鬱……〟希美がそんなことを思っている間にも、紗季は治療の準備をすすめていく。
「希美ちゃん、エプロンつけるね～」
　希美は水色の歯科エプロンをつけられた。治療器具はすっかり整っている。紗季が真希先生を呼びに行った。やがて、足音が聞こえ、
「希美ちゃん、こんにちわ」と真希先生がやってきた。
「じゃあ、今日の治療始めましょうか」
　希美は〝はぁ～〟とため息をつきたい気分だったが、仕方なしに、
「はぃ」と小さな声で返事をした。
「あれぇ、元気ないなぁ～。希美ちゃん、心配しなくて大丈夫だよ」と紗季が明るく励ます。
「そうよ。紗季ちゃんのいうとおりよ。先生を信じてなにも心配しなくていいのよ」真希先生も希美を励ます。
「今日はまずこの前削った右下６番の歯の状態を診るわね。で、炎症がおさまっていて、歯の根の中がきれいだったら、土台を立てる準備をします。この歯は神経取っちゃったから、土台を立ててクラウンを、……被せもののことだけど、被せなきゃならないの。まだ炎症があるようなら、今日も根の掃除をします。それから、あと５本虫歯があるから……、そうねえ、この前もいったようにそんなにひどいのはないんだけど……、前歯治療するわ。前歯の虫歯あとまわしにすると、黒ずんでくるかもしれないから、さきに治しちゃいましょう。ねっ、キレイに治るから」

「希美ちゃん、ほんとキレイに治るよ。がんばろ」紗季もいう。
　希美は、奥歯にクラウンを被せる、前歯を治療すると聞いて、いっそう憂鬱な気持ちになったが、だまって頷いた。隣のユニットでは姉の愛美が治療されているが、ひっきりなしにタービンのキュイーン、キュイーンという音が聞こえ、よけいに希美の気持ちを重くする。
「いす倒すね〜」真希先生は、ペダルを踏み、ユニットを倒す。ライトが点灯される。
「お口大きく開けてねー。アーン」
「痛くないからねー。大きくアーン」真希先生と紗季が、希美に口を開けるように指示する。真希先生の手には、デンタルミラーとピンセットが握られている。希美が口を開けると、デンタルミラーとピンセットが口に入り、仮封が取り除かれる。カチャカチャと歯にピンセットが当たる音がする。口の中から仮封のセメントと薬液がしみこませてあったガーゼが出てくる。真希先生は、それらを汚物入れに入れ、デンタルミラーで丹念に前回根の治療をした歯を診る。
「う〜ん……。まだちょっと炎症があるわねー。もう少し、根の掃除をしましょう」と、真希先生はリーマとファイルを取り出し、再び希美の右下の６番の根管治療を始めた。コリコリ、ゴシゴシと根が掃除される。希美はじっとがまんしていたが、削った穴の奥の方にリーマがとどくと、凄く痛く涙目になり、思わず声をあげる。
「んんー、んぁ、ふうん、ふん」
「はいはい、痛いねー、もうちょっとがまんしてねー」
「もうすぐ終わるよー。がまんしようねー」
　真希先生も、紗季も、治療の手をやめてくれない。希美はもう半べそをかいていた。涙の溜まる目を隣のユニットにやると、愛美が治療を終え、ユニットから立ち上がろうとしている。〝お姉ちゃん、痛いよぅ……〟愛美は気づいてくれない。
「ふうん、ふん、ふん」
　ようやくコリコリという感触がなくなり、根の治療が終わった。真希

先生は、根管治療をした希美の歯にシリンジでエアーをふきかけ、ガーゼにヨードグリセリンを浸し、希美の歯を消毒する。前回と同じく染みた。希美は顔をしかめる。
「ううっ」
「はい、もう少しがんばってー」真希先生は、今度はガーゼをヨードグリセリンに浸し、希美の歯に詰めた。そして仮封をする。
「はぁーい、一度お口ゆすごうか」
　ユニットが起こされる。希美はクチュクチュと口をゆすいだ。希美が洗口台からユニットに向き直ると、真希先生は、
「じゃあ、前歯の治療しようね」といった。
〝はぁ……〟希美が暗い気持ちで目をふせると、紗季が励ますように、
「希美ちゃん、大丈夫！！　真希先生はやさしく治療してくれるよ。とってもキレイに治るから。治したってわかんないくらいキレイに治るよ」という。真希先生も希美の目を見て、
「そうよ、希美ちゃん、前歯の治療の場合は麻酔をするから、痛みがあっても軽くて済むわ。心配しないで」といった。真希先生がペダルを踏み、ユニットが倒される。そして、紗季に指示を出した。
「紗季ちゃん、シンマ用意して」
「はい、先生」と紗季は麻酔のカートリッジを装着した注射器を真希先生の手に渡した。
「希美ちゃん、お口アーン」
「希美ちゃん、大きくアーンしよ」真希先生と紗季が、希美に口を開けるよう促す。真希先生は注射器とデンタルミラーを手に構えている。
〝また、痛い目にあわされる……。やだなぁ……。はぁ〟と希美は前回の麻酔の痛み、治療の痛みを思い出し、いっそう憂鬱な気持ちになっていたが、逃れようがないとふと口を開ける。ライトが希美の口にあてられる。
　真希先生は、希美の上唇をデンタルミラーでめくり、スペースをつくると、ゆっくりと注射針を希美の上の前歯の歯茎に刺す。チクッとした

痛みが希美を襲い、やがてジーンとした薬液の浸透する痛みが歯茎に広がった。
「ふうんんっ」
「もう少しで、全部はいるからねー。がまんしてー」と真希先生は注射器の麻酔液を注入する手を休めない。
「もう１本、今度は歯茎の裏側に打つねー」
〝えっ、やだっ！　２本も打つなんて〟希美は思ったが、紗季は２本目の麻酔注射を真希先生に渡し、真希先生は容赦なく希美の歯茎の裏側に再び注射針を刺す。
「ううっ」
「大丈夫よー」２本目の薬液も全部注入された。
「麻酔が効くまで少しまっててね」と真希先生はライトを消す。希美は前歯の歯茎の感覚がなくなっていくのを感じながら、不安な気持ちでいっぱいだった。
　しばらくすると、ライトが点灯され、
「もういいかなー」と真希先生が希美の前歯をデンタルミラーの柄でたたく。「ひびく？」
　希美がぷるぷると頭を小さく横に振ると、
「麻酔きいたみたいね。大丈夫みたいね」と真希先生は紗季に
「紗季ちゃん、アングルワイダーをお願い」と指示をする。
「はい、先生」
　紗季から真希先生に開口器が手渡される。希美はそれを見て、前回の治療をまた思い出す。〝はああ……。これをつけるのも痛いんじゃない……〟と心でため息をつく。
「大きく開けてねー。アーン」
　開口器が希美の口に装着される。真希先生は、ユニットのテーブルの上にあるバーチェンジャーからバーを選んでいた。ドリルがエアタービンにセットされる。
「はい、削りますよー。痛かったら、左手を挙げて教えてねー」

「痛くないからねー。がんばろうねー」真希先生と紗季が交互に励ます。
　希美は泣きたいような気持ちだったが、この状態ではどうしようもない。〝お願い！！　どうか痛くありませんように！！〟
　ドリルが希美の左上２番と１番の間のう蝕した歯にあてられる。紗季のもつバキュームも希美の口の中に入れられる。タービンが回転しだした。
　キュイーン、キュイーン、キューン。
　コォー、コォオオオー。
　キュイーン、キュィーン、キィーン、チュイーン。
　希美の虫歯をドリルが削り取る。希美は麻酔をしたのに、振動が頭までひびくように感じていたが、じっとがまんしていた。
「そうよ、その調子」
「希美ちゃん、あともう少しだからねー。がんばろうねー」
　キュイーン、キュイ、キュイ、キュイイイイーン。
　コォオオオー、コォー。ジュポポポポー。
　しかし、希美は、削る振動が徐々に痛みに変わってきているのを感じていた。そしてついに、キーンとした痛みが走り、眉間にしわを寄せ、身を捩った。
「ふぅん、ふん、ふん」
「動いちゃダメ。もう少しがんばってー」
「希美ちゃん、ほんともうあとほんの少しだから。もうちょっとがまんしよ。ねっ」
「ふうん、ふん、ふぅん、んん」
　キュイーン、キュイ、キュイ、キュイイイイーン。
　コォー、コォオオオー。ジュ、ジュ、ジュ、ジュポポポポー。
　希美は、いっこうに終わらない切削に不安になり、そっと薄目を開けてみると、目の前に、真希先生が希美の歯を削るのに使うドリルが見えて、思わず涙目になり、半べそをかいた。もはや希美はがまんの限界にきており、左手を挙げようとするその瞬間ひときわ高い音を立てて、タ

ービンが回転をやめた。
　キュイイイイイーーン。
　ジュポポポポー。
「はい、削るのは終わり」
「紗季ちゃん、１０番。光重合します。お願いね」
「はい、先生」紗季から真希先生にレジンが渡される。真希先生は、希美の左上２番１番の削ったところへレジンを詰め、光重合のための光を照射する。レジンが硬化し、希美のこの日の治療が終わった。ユニットが起こされる。
「希美ちゃん、お疲れさま。今日の治療はこれで終わり」
「希美ちゃん、前歯キレイになってるわよ。見る？」真希先生は明るくいう。紗季が希美に手鏡を渡してくれる。希美は沈んだ顔で鏡を持ち、こわごわ鏡を覗き込んだ。希美の顔がみるみるほころんでいく。
「せんせい！！　私、うれしい！！」
　希美の前歯はきれいに治療されており、とても虫歯で治したようには見えない。
「そうよ。希美ちゃんががんばったから、キレイに治ったのよ」
「希美ちゃん、よかったね」
「希美ちゃん、この調子であとの治療がんばろうね」
「はぃ」希美は前歯がきれいに治ったことはうれしかったが、まだ治療が全部終わっていないことに気づくと、やっぱり気持ちが暗くなる。
「あらあら、おかしいぞ。今ニコニコしてたのに」紗季が笑顔でからかう。希美は少し恥ずかしく、照れくさかった。
「じゃあ、次回以降の治療について説明するわね。今日もう一度根管治療をした右下の６番は、次は土台を立てられると思うわ。そしたら、クラウンを被せる準備をしましょう。あと左上の５番と右上の４番、それから右下の５番の３本の虫歯だけど、上の２本はちょっと大きいから削ってインレーを入れなきゃならないと思うし、これは次の次ということにしましょう。右下の虫歯はそんなに進行してないし、削ってレジンを、

今日の前歯と同じ白の詰め物だけど、詰める治療で済むと思うから、これは次回に治療しましょう。で、次回なんだけど‥‥‥、」と真希先生は医院の予約表を見て、「愛美ちゃんは１週間後に予約を取ってるから‥‥‥、お姉ちゃんといっしょでいい？」と希美に聞く。
「はぃ」希美は、返事が小さくなりながらも、答えた。
「お姉ちゃんは‥‥‥、」と真希先生は、再び医院の患者予約表を見て、「‥‥‥午後５時に予約してるから、希美ちゃんもいっしょに午後５時に来てね。じゃあ、次もがんばろうね。今日はこれで終わり。お大事にね」と真希先生はいい、希美は治療から解放される。
「はぁーい、希美ちゃん、エプロン外すそうねー」と紗季は希美から歯科エプロンを外し、スリッパを揃えてくれた。
「希美ちゃん、次も待ってるよ。いっしょにがんばろうね。じゃあ、お大事にね」と真希先生と紗季がユニットから見送ってくれる。
　希美は、〝ふぅ～、やっと終わったあ～。今日も痛かったなぁ‥‥‥。いつまで通わなきゃなんないんだろ〟と思いながら、診察室のドアを開け、待合室に出ていった。

　愛美は待合室に出てきた。そして、長かった治療に〝ふぅ〟とため息をひとつついて、ソファーに座る。そのとたん、
　キュイーン、キュイーン、キューン。
　コォー、コォオオオー。
　キュイーン、キュィーン、キィーン、チュイーン。
とタービンの音が待合室までひびいてきた。希美の治療の音だろうか‥‥‥。愛美はほんのしばらく前まで自分が受けていた治療を思い出し、治療した歯が疼いた。

　それから、２０分余り時間が経った頃、希美が診察室から出てきた。痛そうにはしていたが、前回の治療ほど過酷ではなかったようだ。
「希美、どうだった？　痛くなかった？」

「うん、この前削ったところをもう一度根の治療をしてもらって、それから前歯を治療したよ。ちょっと痛かったけど、がまんしてがんばったよ。お姉ちゃんは？」
「希美も前歯治療してもらったんだぁ。お姉ちゃんもだよ」
「えっ、お姉ちゃんも前歯虫歯だったの？」
「うん、でもほらキレイに治ってるでしょ。でね、あとこの前削った左下は、ほらこのとおり今日詰めてもらった。もう１本、右上は削って次に詰めてもらうの」
　愛美は、希美にだけそっと口を開けて治した虫歯の治療痕を見せる。インレーがたくさんあり、銀色に光っている。希美はそれを見ながら、〝お姉ちゃん、虫歯多いんだぁ〟と思っていた。愛美の上顎は、ほぼ全滅である。
「希美は？　どこ治したの？　見せて」
　希美は自分の口の中を見せるのは恥ずかしいと思ったが、愛美の口の中を見てしまった以上、恥ずかしさをこらえて、愛美に顔を向け、ふっと口を開けて虫歯の治療跡を見せる。
　希美の口の中は、愛美ほどではなかったが、それでも中学２年生にしては虫歯が多い。上顎は治療した歯、未処置の歯をあわせて７本も虫歯がある。仮封してある下顎の右６番の白いセメントが痛々しい。
〝希美、虫歯だらけじゃない。私が中学２年の時よりもたくさんある……〟と希美の口の中を見ながら、愛美は思った。

「若槻さーん。若槻愛美ちゃぁーん、希美ちゃぁーん」受付から名前を呼ばれた。
「待ってて」愛美は希美にいい、受付へ行く。そして、会計を済ませて希美のところへ戻ってきた。
「希美、帰ろうか」
「うん、お姉ちゃん」
　ふたりは並んで、奥田歯科医院のドアから外へ出る。初夏の日差しが

まだまぶしい。
「希美、治療痛いけど、いっしょにがんばろうね」
「うん、お姉ちゃん、希美がんばる」ふたりは目を見合わせていった。

愛美、希美、ふたりの虫歯治療はまだまだ続く……。

乙女のお悩み－もう一つの物語・芽以の場合

ホームルームが終わり、１時間目の授業を待っている間の短い時間……。

「ハァ」若槻希美がため息をつく。

今日は、４月１８日。『よい歯の日』である。純姫女子学園では、毎年６月４日の『虫歯予防デー』の歯科衛生週間のあたりに歯科検診があるのだが、今年からよりいっそう虫歯予防に力をいれ、虫歯がある場合は早期に発見し治療してもらうため、『よい歯の日』の前後に行われることになったのである。

「どうしたの？」芽以が聞くと、希美は、

「だって……、２時間目から歯科検診じゃない。芽以、怖くないの？」という。

「怖いって……」

「そうだよ、歯科検診怖いし、いやだよ。芽以はイイなぁ……。歯が丈夫で」と、堀北結衣がいう。

「だって、虫歯見つかったら、歯医者さんに行かされるんだよ。治療怖いし、痛いし……。ママに叱られるし……」希美は、イヤそうにいった。そう、希美は歯が悪い。毎年のように治療勧告を受け、歯医者に治療に通っている。

「そうかなぁ。私、歯医者さんに治療してもらったことあるけど、そんなに痛くなかったよ」と芽以がいうと、

「芽以は、歯の痛みを知らないからそんなこといえるんだよ。神経の治療されてみなよ。ホント痛くて涙でてくるよ」と結衣は顔をしかめながらいった。結衣は、去年の歯科検診でＣ３の虫歯を発見され、抜随の治療を受けクラウンを被せられている。

「えっ、結衣、神経の治療ってそんなに痛いの？　ひどい虫歯あったらどうしよう」希美がいまにも泣きそうにいう。

「痛いってもんじゃないよ。思い出すだけでも‥‥‥。ブルブル」結衣もいやそうに答える。
「そっかぁ‥‥‥、歯の治療ってそんなに痛いものなんだ」芽以はあまり実感がわかないまま、ふたりに答えた。そう、芽以はあんがい歯が丈夫だ。といっても虫歯がなかった訳ではない。下の左右６番２本は小学校５年生の時に、上の左右６番２本は小学校６年生の時に、歯科検診で小さい虫歯が見つかり、レジンで治療してもらった。だから、希美や結衣と違い、口を開けてもギラギラ銀歯が光るようなことはなく、白いままだ。昨年の歯科検診では虫歯が１本もなく、よく歯磨きできているとほめられたほどだ。けれど、中学１年生の２学期くらいから勉強やテニス部のクラブ活動が忙しくなり、つい食後の歯磨きも怠りがちになっている。希美や結衣とクラブ帰りに甘いジュースやお菓子を食べに寄り道することもしばしばだった。右下の７番がときたま染みることがある。
〝まぁ、去年も大丈夫だったし、なんともないだろう‥‥‥〟そんなことを思っていると、キーン、コーン、カーン、コーンと授業の始まりを告げる鐘が鳴り、担任の黒川恵梨子先生が入ってきた。１時間目は英語である。
「はぁーい、みんな席についてー。授業始めるわよー」

２時間目。授業は休みとなり、芽以、希美、結衣の３人は体育館に来ていた。この２時間目から３時間目にかけて、中等部、高等部の順番に女生徒全員が歯科検診を受けるのだ。女生徒たちは三列に並んでいる。

「えーっと、富田芽以さんだね」名簿を見ながら、歯科医はいった。芽以の後ろは希美と結衣が並んでいる。３人の中で芽以がトップなのだ。
〝なんだか、希美と結衣におどされて、ドキドキしてきちゃった。ふたりに私の歯の状態聞かれるのいやだなぁ‥‥‥〟と芽以は思った。
「はい、おおきくお口開けてねー」歯科医に促されて、芽以が口を開けると、デンタルミラーと探針が口の中に入る。ライトがまぶしい。

「左上から、７番斜線、６番〇、５番Ｃ１、４番から右の５番まで斜線、６番〇、７番斜線。次に左下行きます。７番Ｃ１、６番〇、５番から右の５番まで斜線、６番〇、７ばん‥‥‥」歯科医が探針でカツカツと突っつく。
「うっうっ」思わず、顔をしかめる。「７番Ｃ２。以上です」
「少し磨き残しがあるようだね。右の一番奥は少し虫歯が深いかな‥‥‥。ほかに小さい虫歯がいくつかできてるよ。全体的にはきれいだからもったいないね。ブラッシングをしっかりやってね」と歯科医は芽以にいう。
〝虫歯できちゃってる。歯磨き怠けてたからなぁ‥‥‥。今日からちゃんと磨かなくっちゃ〟と思いながら、芽以は椅子から立ち上がる。
「はい、次の人」と助手が芽以の後ろに並んでいた希美を促した。希美は、不安げな表情をして椅子に座った‥‥‥。

１週間後、芽以は治療勧告書を渡され、ブラッシング指導と歯垢チェックを受けるため、希美、結衣と保健室に行った。その道すがら、３人は虫歯あっても痛い歯もないし、歯医者さんイヤだから治療は行かないことにしよう、ママには治療勧告書を見せないようにしよう、と約束した。芽以は約束しながらも、〝ママにばれたらどうしよう、やっぱりちゃんと治療に行こうかなぁ〟と思っていた。

６月４日。芽以は食事をとり、しばらくテレビを見た後、自分の部屋で勉強を始めた。月曜日に数学の宿題が当たるから予習をしなくてはならないからだ。夢中になって宿題をしていると、午後９時を過ぎていた。
トン、トン。
「芽以、入るわよ」ママの声だ。
カチャッ。
「お茶を入れてきたわ。休憩になさい」ドアを開け、ママがお盆にホットココアと消化のよい軽食を持ってきたくれた。

「ママ、ありがとう」
「ここにおくわね」とママは勉強机の一角にお茶のセットをおいてくれた。
　芽以がひとまず教科書などの勉強道具を隅に寄せようと動かしたとき、一枚の紙片がひらひらと机の上からフローリングに落ちた。芽以は気づかない。
「あら、なにか落ちたわよ」とママがなにげなく、その紙片を拾う。
「まあ、芽以ちゃん、これ『歯の治療のお知らせ』じゃない」
「あっ」思わず、声が出た。
「もう１ヶ月も前に渡されてるじゃない。どうして、ママに見せなかったの」ママはちょっとむくれている。
「ごめんなさい、ママ。つい見せるのを忘れちゃって」
「もう、しょうがないわね。月曜日、ママが歯医者さんに予約を入れるから、治療に行くのよ。学校の近くの奥田歯科でいいわね。ちゃんといくのよ」といいながら、ママは芽以の部屋から出ていった。
〝バレちゃった。希美と結衣の約束破ることになるけど……、まぁ、いいか……。あやまってゆるしてもらおう。治療痛いのかなぁ……、希美と結衣にも治療受けるように勧めてみようかなぁ〟とココアを飲みながら、芽以は考えていた。

　月曜日の２時間目と３時間目の休み時間。芽以と結衣が話している。
「……で、夕べ歯科検診を隠してたこと、ママにばれちゃって今日の３時３０分に歯医者さんに行くの。約束破って、ごめん、結衣」
「そっか、ばれちゃったんだ。希美は歯が痛み出して今朝歯医者さんに行ったっていうし……、私もバレるの時間の問題かなぁ……。希美、治療大変だったみたいだね」
「うん、お休みしてるもんね」
「歯科検診の時、私、希美の後ろだったんだけど、いっぱいマルとか、Ｃ２とか聞こえたよ。インレーもとれたっていってたし……。希美、

神経抜いたのかなぁ」
〝えっ、そうなのかなぁ‥‥‥。私、今までそんなひどい虫歯になったことないけど、今度も大丈夫よね。染みる歯が１つあるけど‥‥‥。なんだか怖くなって来ちゃった〟と芽以は思ったが、結衣にはだまっていた。

芽以は、午後３時２５分に奥田歯科医院の自動ドアを踏みしめ、中に入った。歯医者独特の消毒液の匂いと、歯を削るキュイーン、キュイーンという音が聞こえる。〝この音は何度聞いてもなれないなぁ〟と思いながら、受付に向かう。受付には、年配の上品な女性がすわっている。
「予約していた富田ですが‥‥‥」
「はい、富田さんですね。聞いていますよ。保険証をお願いできますか」
「はい」と保険証を差し出す。
「お預かりしますね。それと、学校の歯科検診の結果を‥‥‥」
「はい」と今度は治療勧告書を渡した。女性は問診票を芽以に渡し、記入するようにいった。芽以は問診票を受け取り、ソファーにすわって、記入しようとしたそのとき、キュイイイイーンというタービン音にまじって、
ふぅん、うぅぅぅぅ〜、ふぅぅ〜ん。
「大丈夫だから、少しがまんして」
という生々しい治療の音が聞こえてきて､芽以はビクッとしてしまった。
〝だれが治療受けてるんだろう。虫歯ひどいのかな。治療痛そうだなぁ‥‥‥私も痛くされるのかなぁ〟と思った。問診票の『すこし染みる歯がある』などに〇をつけ、書き終えて受付に渡しに行ったとき、診察室のドアが開き、治療を終えた３０代の女性が出てきた。
問診票を渡しソファーに戻ってしばらくすると、希美の姉の愛美が自動ドアから入ってきた。愛美は受付へ向かった。〝そっか、愛美さんもばれちゃったんだ。で、希美に続いて治療ってわけね〟と芽以は思い、愛美に声をかけようとしたとき、再び診察室のドアが開き、衛生士の紗

季が、
「富田さぁーん、富田芽以ちゃぁーん。診察室にお入りください」と芽以を呼んだ。
〝はぁ、とうとう順番きちゃった〟と憂鬱な表情で「はい」と返事をして、スクールバッグを持ちソファーから立ち上がる。そして診察室の中に入った。〝愛美さん、私に声をかけようとしてたみたい。希美の様子、聞けばよかったかなぁ〟

芽以が診察室にはいると、中には４台の歯科ユニットがあり、右から２つ目のピンクのユニットでは、２０代の大学生らしい女性が、麻帆先生と衛生士のかすみの治療を受けている真っ最中だった。
キュイーン、キュィィーン、キィィーン。
キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイイーン。
ふぅん、ふん、んぁ、うぅぅぅぅ〜、ふぅぅ〜ん。
「はい、痛くない、痛くない、がんばって」
「もう少しがまんして。もうすぐ終わるから」
ふうん、ふん、ふん。
麻帆先生は、なにやら針のようなものをその女性の口に入れ、治療を続けている。女性は半べそで治療を受けている。とても痛そうに見えて、芽以は思わず顔をしかめた。
ドアのところにある荷物棚にスクールバッグを入れ、スクールバッグの中からハンドタオルを取り出した。
「芽以ちゃん、こっちの治療台にすわってね」と紗季は、治療を受けている女性が座わっているピンクのユニットの隣にあるブルーの歯科ユニットを指差す。芽以が暗い気持ちで、スリッパを脱ぎ腰掛けると、紗季は、すかさず水色の歯科エプロンを芽以につける。
「じゃあ、先生呼んできますからね」と紗季は真希先生を呼びに行った。
隣のユニットではあいかわらず生々しい治療風景が展開している。芽以が腰掛けるユニットは、すっかり治療の準備が整っている。テーブル

にのったデンタルミラー、探針などの基本４点セットとストッパーやハンドピース、銀色のワゴンにのった芽以の治療勧告書、さっき書いた問診票、カルテや麻酔注射器、麻酔液のカートリッジ、うがい台のコップ。みるともなしに見ていると、ちょっとドキドキしてきた。そのとき、スリッパの足音が聞こえ、真希先生と紗季がやってきた。

「富田芽以ちゃんね。学校の歯科検診で、虫歯が見つかったんだって」真希先生はいいながら、治療勧告書と問診票を見た。「うーん、Ｃ１が２本に、Ｃ２が１本ね。じゃあ、ちょっと診てみようね」

「その前に自己紹介しとくわね。私が芽以ちゃんの治療を担当する奥田真希です。よろしくね。で、こちらが治療のアシスタントをしてくれる石原紗季ちゃん」

「石原紗季です。芽以ちゃんの歯がきれいに治るようにいっしょうけんめいお手伝いします。よろしくね」

「よろしくお願いします」

「はい、じゃあ、お口開けてくれるかな。アーン」ユニットが倒れる。真希先生はデンタルミラーと探針を持って構えた。紗季はライトを点灯し、芽以の口にあてる。まぶしい。芽以は目を閉じ、ふっと口を開けた。

「左上から行きます。紗季ちゃん、カルテお願い。７番斜線、６番〇、５番Ｃ１、４番から右の５番まで斜線、６番〇、７番斜線」

芽以の口に唾液があふれ、デンタルミラーが曇った。「紗季ちゃん、バキュームお願い」

　コォー、ジュポポポポー。

　芽以の口に紗季がバキュームを差し込み、唾液を吸引する。〝やだ、恥ずかしい〟大きな音で唾液を吸い取られ、芽以はちょっと赤くなった。

「次に左下行きます。７番Ｃ１、６番〇、５番から右の５番まで斜線、６番〇、７番……」真希先生は、探針でカリカリとつつく。ちょっと痛い。この歯が少し染みる歯なのだ。「７番Ｃ２。以上です」デンタルミラーと探針をトレイに置きながら、真希先生は、

「右下の７番だけど、ちょっと虫歯が深いかもしれないわ。一度お口ゆ

すいで」といい、ペダルを踏んでユニットを起こしてくれた。芽以は口をクチュクチュとゆすいだ。

「痛み出すといけないから、今日は右下の７番から治療しましょう。大丈夫だと思うけど、削ってみて深かったら、麻酔するわね」と真希先生は、エアタービンにハンドピースを装着し、バーチャージャーからバーを選んでいる。バーが装着された。再びユニットが倒される。芽以は、麻酔なしと聞いてもピンと来なかった。いままで麻酔をして治療をされたことがないのだ。

「お口開けて。アーン」芽以が口を開けると、真希先生はピンセットでふくみ綿をつまみ、芽以の右下７番の頬側と舌側にふくませ、治療のスペースをつくった。次に、真希先生はエアタービンとデンタルミラーを手に持ち、芽以の口に近づける。紗季もバキュームを持って構える。

「はい、お口開けてね。アーン」

「痛くないからねぇ〜大きくアーンしようね〜」紗季も促す。

「芽以ちゃん痛くないからね〜もし痛かったら左手あげてね、治療すぐやめるから」真希先生もタービンを構えて促す。

芽以は目を閉じて大きく口を開けた。紗季のバキュームが口に差し込まれる。続いて真希先生のデンタルミラーが芽以の唇をめくり治療スペースを確保して、タービンが口の中に入れられた。先端のドリルが芽以の右下７番のう蝕した歯にあてられる。ドリルが回転を始め芽以の虫歯を削り始める。

キュイーン、キュイーン、キュイイイイーン。

キュイーン、キュイ、キュイ、チュイイイイーン。

コォー、コォオオオー。

キュィーン、キィーン、キューン。

「芽以ちゃん、その調子、その調子。そう、そう」紗季が芽以をほめる。

キュイーン、キュイーン。

コォオォーー、コォーー。ジュッ、ジュ、ジュ。

キュウウウーーーン。

タービンが止まった。
〝えっ、うれしい。もう、終わり？〟芽以は、うれしい。ユニットが起き上がり出す。
「いったん、お口ゆすごうか」真希先生がいった。
芽以が口をクチュ､クチュとゆすいで正面に向き直ると､真希先生は、ドリルの先端のバーを違うものに付け替えている。なんだかさっきのよりも痛そうだ。
〝なあーんだ。まだ、終わりじゃないんだ〟芽以はちょっとがっかりする。けれど、いままでの歯科治療で痛い思いをしたことのない芽以は、つぎ削るのもきっと大丈夫だろうと思っていた｡ユニットが倒れ始めた。芽以の口元が真希先生の手元に近づく。ライトが芽以の口にあたる。
「はい、もう一回おおきくお口開けよっか」真希先生が新しいバーを装着したタービンと探針を構えていう。紗季もバキュームを芽以の口に差し入れる。
キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイイーン。
コォー、コォォォー。ジュポ、ジュポ、ジュポポポポーーー。
キュイーン、キュィーン、キューン。
キュィィィーーン、チュイーン。
ふたたび芽以の虫歯が削られ始め５０秒ほどがたった頃、ドリルが徐々に深さを増し、芽以は削られている歯に痛みを感じ始めていた。さらに３０秒ほどがたった頃、芽以はキーンという鋭い痛みと下顎に突き抜けるような痛みを感じた。芽以は、歯科治療で初めての痛みを感じたわけである。
「ふん、ふん、ふぅぅん、ふん」
〝先生、痛いっ！！　痛いよ！！　せんせい、止めて！！〟芽以は左手を挙げる。
「そうねー。ちょっと、痛いわねー。もうちょっと、がまんしようか」真希先生は、治療の手を休めずにいった。
「がんばって～もう少しだからね～」紗季もバキュームの手を休めずに

いう。
〝そんな、左手あげたら、治療止めるっていったじゃない！！〟
「ふん、ふん、ふうん、んぁ」
　キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイイーン。
　コォォォーー、コォーー。ジュッ、ジュ、ジュ、ジュポポポーー。
　キュイーン、キュイーン。
〝痛いっ！！　痛いっ！！　もう許してぇー！！〟芽以は涙がポロポロと溢れてくる。ひざはくの字に曲がり、脚はあわさり、足の指はユニットに形がつくほど強く押しつけられている。

　そのとき、診察室のドアが開き、愛美が入ってきた。芽以は初めての治療の痛さに、愛美が入ってきたことすら当然ながら気づかない。
　愛美は、芽以の治療の光景を見て、〝芽以ちゃん、痛そうだなぁ、もう家に帰りたくなっちゃうよ‥‥‥。〟　と思いながら、肩を落として案内されるままに、芽以の隣のピンクのユニットに座った。

　芽以は両手でハンドタオルを握りしめていた。真希先生が芽以の歯を削る治療は、佳境にはいっていた。
「芽以ちゃん、もうちょっとお口開けてー」
「芽以ちゃん、力抜いて、リラックスしてー」
　キュイーン、キュイイイイイーーン、チュイイイーン。
　コォー、ジュポポポポー。
「ふふん、ふぅぅん、ふん」
「はい、芽以ちゃん、大丈夫だよー。痛くない、痛くない」
「芽以ちゃん、もうちょっとがまんしようね」
　キュイーン、キュイーン、キュイ、キュイ、キュイイイイーーン。
「ふぅん、ふん、ふん、んあぁ」
　真希先生と紗季が芽以を励ましながら治療しているが、芽以はもう半べそをかいている。からだを捩り、足は常に動いて、痛みをがまんしよ

うとしているが、涙ポロポロの状態である。
　キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイイーン。
　キュイーン、キュイーーン、キュイイイイーーーン。
　コォー、コォォォー。
「ふうん、ふん、ふん、ふぅん、んん、んぁぁ」
　キュウウウーーーン。
　ようやくタービンが止まった。５分ほども削られていたろうか。芽以は〝歯の治療がこんなにも痛いものだとは‥‥‥〟と思っていた。〝エッ、エッ、ぐすん。痛いよー、痛かったよー‥‥‥。希美や結衣のいうとおりだった‥‥‥。エッ、エッ〟そして、いままで丈夫な歯ということで油断してついつい歯磨きを怠ったことを後悔していた。〝こんなことなら、ちゃんと歯磨きすればよかった‥‥‥〟
「はぁーい。芽以ちゃん、削るのはもう終わりよ。お口ゆすごうか」真希先生がユニットを起こしてくれる。
「芽以ちゃん、えらかったよー。よくがまんしたねー。えらい、えらい」紗季が芽以の涙をタオルで拭き取りながら、ほめてくれる。
「ヒック、ヒック」しゃくりあげながら、芽以が口をゆすぎ、ハンドタオルで涙を拭く。
「芽以ちゃん、ちょっと削るのが長くなっちゃってごめんなさい。芽以ちゃんの虫歯、広くはないんだけど、思ったより深く進行してたのよ。それで長くなってしまって‥‥‥。芽以ちゃんが左手あげてたの、わかってたんだけど‥‥‥、そのときはここまで時間がかかるとは思ってなかったのよ。ごめんね」真希先生がやさしく芽以を慰める。「でもね、虫歯つくっちゃったの芽以ちゃんなんだから‥‥‥、これからはちゃんと歯磨きして、虫歯にならないようにしようね。芽以ちゃんの虫歯治療が全部終わったら、紗季ちゃんに、ブラッシング指導してもらうから。いいわね」
「私が、正しい歯の磨き方を芽以ちゃんに教えるから、がんばろうね」紗季がやさしくいう。

「はぃ」芽以は、治療の痛さに泣いたことと、虫歯をつくってしまったこと、が恥ずかしくて、小さく返事をした。
　ユニットが倒れる。真希先生が、
「じゃあ、いま削った歯の型を採るから、もう一度アーンして」と促す。
　芽以が口を開けると、真希先生はシリンジを手に持ち、芽以が削られた右下７番の歯にエアーをシュッシュッとかける。
「紗季ちゃん、印象材」
「はい、先生」紗季から真希先生にピンク色の印象材をのせた型が渡される。真希先生は、その型を芽以の右の下顎と上顎に噛ませた。
「しばらく、このまま、じっとしていてね」とライトを消す。
　芽以は、少し落ち着いた気持ちになり、まわりの光景が目にはいってきた。そのとたん、隣のピンクのユニットで治療するタービンの音が耳に飛び込んできた。

　キュイーン、キュキュキュキュ、キュイイイイーン。
　キュイーン、キュイ、キュイ、キュイーン、チュイーン、チュイイーン。

　恐る恐る隣を見ると、愛美が、麻帆先生とかすみに虫歯を削られている。
「んんっ」愛美は口を閉じそうになっている。
「ダメダメ、危ないよ。はい、大丈夫だから」麻帆先生は、愛美の虫歯を削りながら、注意した。
「愛美ちゃん、もう少しだから、がんばろ」かすみが励ます。
　愛美は、脚をあわせ、足の指を曲げてがまんしている。だが、麻帆先生のドリルが深みを増すにつれ、痛みをがまんできなくなってきているようだ。
　キュイーン、キュイーン、チュイーン。
　コォー、コォォォー。ジュポポポーー。

愛美は、左手を挙げている。だが、麻帆先生は、
「そうね。ちょっと痛いわね〜。でももうちょっとがまんしようね」と削るのをやめようとしない。
「愛美ちゃーん。ほんともう少し、もう少しだよ。がまんしよ」とかすみも愛美を励ましている。愛美はすでに涙目になり、ふうん、ううんと麻帆先生、かすみに痛みをうったえているが、ふたりとも治療を止めようとはしない。

〝愛美さん、痛そう‥‥‥。脚、曲がってる。痛いんだろうなぁ。虫歯、ひどいのかなぁ‥‥‥。私もあんな風に治療されてたんだろうなぁ〜〟と芽以がぼんやり考えていると、ライトが点された。急に明るくなったので、少しまぶしい。
「もう、いいかな〜」真希先生は、芽以に向き直り、芽以の口を開けさせ、印象材を下顎と上顎から取り、口の中から出した。芽以の歯型がくっきりとついている。
「これ、お願い」と真希先生は歯型の採られた印象材を紗季に渡す。
「はい、先生」
次に、真希先生はもう一度シリンジを持つと、芽以の削った歯にエアーをかけて乾かす。それから今度は、ピンセットでガーゼをつまみ、テーブルの上のホルマリントリクレゾールの薬瓶に浸し、芽以の削った穴を消毒する。
「ううっ」
「はい、大丈夫よー」続いて、真希先生は紗季からセメントを受け取ると、芽以の削った穴を仮封した。ふくみ綿がピンセットで取り除かれる。
「はぁーい、これでおしまい！！　芽以ちゃん、お疲れさまー。よーくお口ゆすいでね」ユニットが起き上がり、ライトが消される。
〝はぁー。やっと、終わったぁー〟芽以は安堵しながら、クチュクチュと口をゆすぐ。
「芽以ちゃん、そのままで聞いて」と真希先生は、「今日削ったところは、

次回の治療のときに、インレー、銀の詰め物なんだけど、それを虫歯を削った穴に詰めて、治療は終了するね。それから、左上５番と左下７番の虫歯は、削ってみないとわからないけど、見た目は小さいから、たぶんちょっと削って、レジン、白い詰め物だけど、それを詰めるだけで治ると思うわ」といった。

「はぃ」と芽以は真希先生に返事しながら、〝とうとう、銀歯が入っちゃうんだ……。いままで白い詰め物しかなかったのに……〟といまさらながら後悔していた。

「……芽以ちゃん、次の治療は１週間後の月曜日でいいかな……」と真希先生が、次回の治療の日について聞いてきた。芽以は、治療ということばを聞いて、急に今日削った歯が疼きだした。そして、ちょっと怖くなり、つい「その日はちょっと……。用事があって……」と答えてしまった。

「そう……、じゃあ、その次の日は？」真希先生は、芽以の嘘の用事に気づかず、聞いた。芽以はもっとのちの日に延ばしたかったが、そういうわけにもいかず、逡巡しながら、

「はい」と答えてしまった。

「……時間は、今日とおなじくらいでいい？」

　芽以はこくりと頷く。

「じゃあ、８日後の火曜日、午後３時３０分ね。待ってるわ。お大事にね」真希先生は笑顔でいう。

「芽以ちゃん、エプロン外すねー」紗季が水色の歯科エプロンを外してくれる。紗季が揃えてくれたスリッパをはき、ドアのところへ向かう。荷物棚のスクールバッグを開けると、手に持ったハンドタオルをしまう。スクールバッグを手に診察室のドアを開ける。背中から、紗季の声が聞こえる。「芽以ちゃん、お大事にー」

　芽以が振り返えると、隣のユニットでは愛美の治療がまだまだ続いている。

キュイーン、キュイーン、チュイイイーン。
コォー、ジュポポポポー。
キュイーン、キュイーン、キュイ、キュイ、キュイイイイーーン。
「はいはい、もう少しだから、がんばって」
「愛美ちゃん、痛くないよ〜、大丈夫だよ〜」麻帆先生とかすみが治療を続けながら愛美を励ますが、つづく治療の痛みにとうとう愛美は泣き出している。
ふえっえっ、ふえっえっ。
ふううん、ふん、んぁ、ふえっ、ふえっ。
愛美の嗚咽が診察室に漏れる。

芽以はそれを目にして、ふたたび自分が受けた治療を思い出し、またもや治療した歯が疼いた。〝愛美さん、ほんとに痛そうだなぁ……。かわいそ、泣いてる……〟
芽以はひとつ身震いすると、真希先生、紗季、どちらともなく小さく会釈すると、「ありがとうございました」といい、治療を受けている愛美には心の中で、〝愛美さん、がんばって！〟といって待合室に出ていった。

芽以が待合室に出てきてしばらくすると、受付から名前を呼ばれた。
受付へ行き会計を済ませる。ようやく治療から解放された。
奥田歯科医院の外へ出る。
芽以は、生まれて初めて痛い歯科治療を受けた。〝はぁ〜、こんなに虫歯の治療が痛いものだなんて……。思ってもみなかった……。希美も結衣もいままでこんなに痛いことされてきたんだなぁ〜。私、知らなかった……。私、希美や結衣に無責任なこといってたんだなぁ〜……。あぁ、まだ治療受けなきゃいけないなんて……。次も痛いのかなぁ〜。はぁ〜〟
芽以は次回の治療を思い、憂鬱な気持ちのまま、とぼとぼと家路につ

いた……。

乙女のお悩み－もう一つの物語・結衣の場合

月曜日の放課後。〝はぁ……。イヤだなぁ〟堀北結衣はため息をつきながら、足取りも重く奥田歯科医院に向かっていた。といっても学校からは５００ｍしか離れていないので、すぐに着いてしまう。そして１週間前の月曜日のことを思い出すのだ。

１週間前の２時間目と３時間目の休み時間。富田芽以と結衣が話している。
「……で、夕べ歯科検診を隠してたこと、ママにばれちゃって今日の３時３０分に歯医者さんに行くの。約束破って、ごめん、結衣」
「そっか、ばれちゃったんだ。希美は歯が痛み出して今朝歯医者さんに行ったっていうし……、私もバレるの時間の問題かなぁ……。希美、治療大変だったみたいだね」
「うん、お休みしてるもんね」
「歯科検診の時、私、希美の後ろだったんだけど、いっぱいマルとか、Ｃ２とか聞こえたよ。インレーもとれたっていってたし……。希美、神経抜いたのかなぁ」と結衣は、芽以に希美のことをいいながら、
〝はぁ、ママにばれちゃうかなぁ……。また歯医者に行かされる……。去年も歯医者さんに治療に行ったんだ。痛かったな。だって神経の治療されたんだもん。今も染みる歯あるし……。はぁ憂鬱だなぁ……〟と自分のことで頭がいっぱいだった。

今年の歯科検診は４月１８日の『よい歯の日』に行われた。純季女子学園は生徒の健康管理にも力を入れているから、歯科についても歯科検診、検診で虫歯のあった生徒に対する歯垢チェックとブラッシング指導を熱心にやることで有名だった。
〝どうしよう。もう次、順番だ〟結衣はドキドキしながら並んでいる。

芽以は２人前に終わっている。今検診を受けているのは若槻希美だ。聞くともなしに、希美の歯式が聞こえる。「はい、左上から、……６番○、５番Ｃ１、……６番○、……次、左下から、……、６番○、……、５番Ｃ１、６番Ｃ２、７番○。以上です」

〝わぁ、希美、マルとかＣ２とか、虫歯いっぱいある……。はぁ、私もいっぱいあったら、どうしよう……〟

「はい、次、堀北結衣さん」と歯科医が結衣の名前を名簿で確認し、呼んだ。

〝お願い！！　虫歯ありませんように！！〟祈るような気持ちで椅子に座る。助手がライトを結衣の口に当てる。

　歯科医はデンタルミラーと探針を持ち、結衣の口の中に入れた。

「はい、左上から行きます。７番○、６番○、５番から右の３番まで斜線、４番Ｃ１、５番斜線、６番○、７番斜線。次、左下にいって、７番○、６番マ……。きみこの歯はいつ治したの？」

「去年です」

「クラウンで被せているね。神経の治療したの？」

「はい」

「きみの歳で神経を取る治療を受けなきゃならないなんて……。ちゃんと歯磨きしてる？　歯垢もついてるよ」と歯科医は探針で、結衣の歯垢を掻き取り、結衣に見せる。結衣は〝こんなとこで、見せなくてもいいじゃない。みんなも見てるのに……〟と思い、赤くなった。

「まあ、続きを見よう。続きます。６番○、５番Ｃ２、４番から右の５番まで斜線、６番○、７ば……」歯科医は右下の７番を探針でカリカリと突っついた。

「んぅぅ」結衣は思わず声が出た。

「７番Ｃ３。だいぶ虫歯が進行してるよ。はやく歯医者さんで治療を受けること。それと磨き残しが多いから、ちゃんと歯磨きすること。治療勧告書を渡す際に、歯垢チェックとブラッシング指導を受けること。いいね」

「はい」結衣はこたえながらも、〝はぁ、今年も虫歯見つかっちゃった‥‥‥。いやだなぁ〟と去年の歯医者での痛い治療を思い出していた。威圧的なライト、痛いタービン、リーマ、「痛くないからねぇ～」といいながら痛い歯医者の処置‥‥‥。つらかったおもいでがよみがえってくる‥‥‥。

１週間後の４月２５日がきた。この日は歯科検診の結果が生徒に告げられる日である。歯科検診で虫歯が見つかった女生徒は治療勧告書を渡され、歯科指導を受けさせられるのだ。

キーン、コーン、カーン、コーン

ホームルームを知らせるチャイムが鳴り、担任の黒川恵梨子先生が入ってきた。

「起立、礼、着席」

「みなさん、おはようございます」

「先生、おはようございます」

「はい、ホームルームはじめますね。まずは出席から‥‥‥」と黒川先生は出席簿を手に取り、生徒の名前を呼んでいく。出欠を取り終えると、

「えー。先週あった歯科検診の結果をお知らせします。虫歯のあった人は、これから治療勧告書を渡しますので、名前を呼ばれた人は、前に来てください。‥‥‥さん、富田芽以さん、若槻希美さん、堀北結衣さん、‥‥‥さん、‥‥‥さん。はい、以上の人は出てきて下さい」と虫歯のある女生徒を呼んだ。

「はぁ～あ」と結衣、芽以、希美はため息をついて立ち上がり、黒川先生のところへいって、治療勧告書を受け取った。

「今、治療勧告書をもらった人は、２時間目に歯垢チェックとブラッシング指導を受けに、保健室に行ってください。いいですね。必ずいって下さい」と黒川先生はいって、ホームルームは終わった。

治療勧告書を渡された結衣は、歯垢チェックとブラッシング指導を受

けるため、希美、芽以と保健室に行った。その道すがら、３人は虫歯あっても痛い歯もないし、歯医者さんイヤだから治療は行かないことにしよう、ママには治療勧告書を見せないようにしよう、と約束した。結衣は３人で約束したんだから、〝これで今年は歯医者さんいに行かなくて済む〟とホッとしていた。

そんなことを考えながら歩いているともう目の前に奥田歯科医院がせまっていた。
〝着いちゃった……。どうしよう。怖いよぅ……〟結衣は、奥田歯科医院の前に立っていた。ブラインド越しに治療の風景が見える。〝私もあんな風に治療されるんだろうなぁ……。はぁ、憂鬱だなぁ〟と思った。３日前のことが思い出された。

金曜日の夕食後。結衣はママの後片づけのお手伝いをしていた。ママは今日念入りにお化粧をして、きれいだ。今日は結衣の通う純姫女子中学のＰＴＡの定例クラス会があったのだ。ママは食器を洗う手を休めず、「ねぇ、結衣」と結衣に話しかけた。
「なあに、ママ」と結衣は食器をふきんで拭きながら、返事をする。
「結衣、隠し事してるでしょ」
ママの言葉に、結衣はちょっとドキッとする。
「えっ、なんのこと……」とママの視線から目をそらしながら、結衣はいった。
「やっぱり……。ママね、今日ＰＴＡの会合で希美ちゃんのお母さんに会ったの。そしたら、希美ちゃん、このあいだの日曜日の明け方に虫歯が痛くなって、月曜日早々歯医者さんに行ったって、お話しをお聞きしたの。希美ちゃん、それからお姉さんの愛美ちゃんも歯科検診で虫歯が見つかったのに、お母さんにいってなかったのよ。で、お母さんが希

美ちゃんたちから聞き出したところによると、希美ちゃんと芽以ちゃん、それに、結衣、あなたと３人で虫歯見つかったことママには黙ってようって約束したっていうじゃない。結衣、白状なさい。もうママにはわかってるんだから‥‥‥」

ママにわかってしまった。

「あとで、ママに歯科検診の結果をみせなさい。いいわね」

「ごめんなさい、ママ」と結衣はしょんぼりあやまりながら、〝とうとう、ばれちゃった。いやだな、歯医者に行かされる〟と思っていた。

後片づけの後、ママは治療勧告書を見て、結衣にお説教をし、翌日奥田歯科医院に予約をしたのだった‥‥‥。

そして、今日の月曜日、お昼休み。結衣、希美、芽以、３人はお弁当を食べている。

「‥‥‥そっか、結衣もバレちゃったんだ‥‥‥。ごめんね、私のせいで」希美がしょんぼりという。

「ううん、そんなんじゃないよ。だから、希美があやまることじゃないよ」結衣は、ちょっとあわてていう。結衣は顔を振り向け、「芽以も先週から、歯医者さん通ってるんだね」と芽以に聞いた。

「うん、このあいだの月曜日から‥‥‥」芽以が憂鬱そうに答える。

「あれ、芽以そんな顔して‥‥‥。芽以、たしか歯医者さん苦手じゃなかったよね」希美が芽以に聞く。

「このあいだ治療を受けるまではね‥‥‥。でも、このあいだの治療、凄く痛かったんだぁ。だから、いまは苦手。結衣や希美のつらさがはじめてわかった」芽以はこのあいだの治療を思い出すのか、顔をしかめながらいう。

「でしょう、でしょう。ほんと歯医者さんって、いやだよね。‥‥‥ねぇ、私、ママに今日の４時３０分に予約入れられちゃったんだ。希美も芽以も奥田歯科医院だよね。いっしょにいかない？」結衣は苦手な歯医者にひとり行くのがいやで、ふたりをさそった。

「ごめん、結衣。私、予約明日なんだ」芽以が申し訳なさそうにいう。
「結衣、ごめん。私もお姉ちゃんといっしょに行くことになってて……。ひとりだと歯医者さん行かないで帰っちゃうといけないからって、ママがいっしょに行きなさいって……。それに予約の時間、５時なんだ。だから、クラブも出ようって思ってるし……。ホントごめん」希美もすまなさそうに結衣にいった。
「そっか。いいよ、しかたないよ。ひとりでがんばって行って来る。だから、気にしないで」結衣は自分を奮い立たせるように、努めて明るくふたりにいった。
「あとから、お姉ちゃんと行くから……。だから、治療終わっても待ってて」希美がいう。
「うん、わかった。待ってる。希美、芽以、歯医者さんいやだけど、お互いに治療がんばろうね」と結衣がいうと、
「うん」とふたりは頷き、三人で虫歯をがんばって治そうと約束したのだった。

結衣は勇気を奮って自動ドアを踏み、中へ入った。歯医者特有の消毒液の匂いと、キュイーン、キュイーンというタービンの音が聞こえる。結衣は虫歯を削るタービン音を聞いて、思わず耳を塞ぎたくなった。受付の時計を見ると、時間は午後４時２５分を指している。受付には、上品な年配の女性が座っている。
「こんにちわ」受付の女性はにこやかにほほえむ。
「あの、予約していた堀北ですけど……」結衣はスクールバッグから、保険証と治療勧告書を取り出し、受付の女性に渡した。
「はいはい、伺ってますよ。堀北結衣ちゃんね。はい、お預かりします。それからこちらを書いてくださいね。分かるところだけでいいですから……」と、女性は結衣に問診票を渡す。その間にも結衣の苦手なタービンの音は聞こえていて、そのたび結衣はびくっとする。

結衣はソファーに腰掛け、問診票を記入し、書き終えると受付に持っていった。

ソファーに戻り、雑誌を手に取るが、治療する音が気になりさっぱり頭に入らない。

ブゥゥーーーン。

自動ドアの開く音がして、結衣が雑誌から顔をあげると、純姫女子学園の高等部の制服をきた女の子が奥田歯科医院の中に入ってきた。女の子は受付の方向に行き、保険証などを渡して受付をしている。

〝あのお姉さんも、虫歯が見つかっちゃったのかなぁ……〟治療の音に不安そうな表情をしたまま結衣は受付を見ていた。女の子が受付を済ませ、問診票を手にソファーに向かってくる。

〝純姫の先輩だし、ソファーに来られたら話しかけてみようかな……。結衣の不安な気持ち、聞いてくれるかな……〟などと思い、声をかけようとした瞬間、診察室のドアが開き、歯科衛生士のかすみが「堀北さぁーん、堀北結衣ちゃぁーん。診察室にお入り下さい」と結衣を呼んだ。

〝はっ、呼ばれちゃった〟ため息でもつきたい気持ちになった。〝先輩に治療前の不安な気持ち聞いてもらえなかった〟

結衣は、「はぃ」と消え入りそうな返事をして憂鬱そうな表情で立ち上がり、スクールバッグを持って診察室のドアの中に入っていった。

診察室にはいると、ドアの横に荷物棚があった。スクールバッグを入れ、スクールバッグの中からハンドタオルを取り出す。ハンドタオルを持ち、中を見回すと、歯科ユニットが４台並んでいる。右から３番目のイエローのユニットで制服姿の小学校高学年くらいの女の子が治療を受けている。制服を見ると皓大教育学部附属小学校の生徒のようだ。女の子はかなり痛そうな様子である。

キュイーン、キュイ、キュイ、キュイイイイーン。

コォー、コォオオオー。

「ふん、ふん、ふぅん、ん」

「はぁーい、由紀ちゃん、もう少しがんばってー。痛くない、痛くない。がまんしてー」
「もう少しだよー。足バタバタしないでー」真希先生と紗季が女の子を励ましながら治療している。診察室の中で聞くタービンの音はいちだんと大きく、余計に生々しく聞こえる。
「ふぅん、ふん、んん、んぁ」
　キュイーン、キュイーン、チュイイイイーン。
　コォー。ジュポー、ジュポポポポー。
「由紀ちゃん、大丈夫だよー。痛くないからねー」女の子は、からだを捩り、足をバタバタして、がまんしているが、虫歯を削る治療の痛みにすでに泣いている。
「あん、あん、ふぅん、ふん」
〝はぁ……。あの子泣いてる……。治療、痛いのかなぁ〟憂鬱そうに考えていると、
「結衣ちゃん、こっちよ」とかすみがいちばん右のブルーのユニットに案内する。
「さっ、この治療台にかけてね」
　結衣は座るのをちょっと躊躇する。これから始まる治療に不安が募っている。
「どうしたの？　さっ、はやく」
「はぃ」結衣は仕方なく、スリッパを脱ぎユニットに腰掛けた。
「じゃあ、エプロンかけるねー」かすみは結衣の胸に水色の歯科エプロンをつける。「それじゃ、先生呼んできますから、少し待っててね」かすみは麻帆先生を呼びに行くため、ユニットを離れた。
　結衣は、ユニットの周りを見る。間にピンクのユニットを挟んで隣のユニットでは、相変わらず、女の子の治療が続いている。ふりかえって、結衣の座るユニットをみれば、目の前には無影灯、左手にはうがいのためのコップと注水器、ゆすぎ口、衛生士の使うバキュームの類が並んでいる。そこからアームがのびた先にはテーブルがあり、探針やデンタル

ミラーなどの基本４点セットがのったトレイ、ストッパー、ドリルのバーチャージャー、ハンドピース、濃青色や緑色、茶色の薬剤の入った小瓶などが載っている。さらにテーブルについているのは、ホースがのびたエアタービン、結衣の最も嫌いな切削のための治療器具だ。さらにユニットの横に置いてあるワゴンには、注射器、麻酔カートリッジ、タオル、結衣のものと思われるカルテ、治療勧告書、問診票などがのっていた。〝はぁん。こわいようー〟胸がドキドキしてきた。

そのとき、スリッパの音が聞こえてきた。

「結衣ちゃん、こんにちわー」にこやかに麻帆先生が現れた。

「歯科検診で、虫歯が見つかったのねー」

「は、はぃ。あっ、こんにちわ」結衣はちょっとドギマギしながら、返事をする。

「そんなに緊張しなくて大丈夫よ。あっ、まず自己紹介しとくはね。私が結衣ちゃんの治療を担当する奥田麻帆です。どうぞよろしく。で、こっちが治療のアシスタントをしてくれる長澤かすみさん」麻帆先生が、自己紹介とかすみを紹介する。

「長澤かすみです。結衣ちゃん、よろしくね。がんばって虫歯なおそうね！！」かすみも結衣の不安を取り除くかのように明るくにっこりとほほえむ。

「よろしくお願いします」結衣は、つられて小さな笑顔であいさつをした。

「まずは結衣ちゃんのお口の状態は‥‥‥」と麻帆先生は治療勧告書や問診票を見ながら、結衣に向き直り、「ざっと、歯全体を見せてね。いす倒すねー。お口開けてアーン」とユニットのペダルを踏み、探針とデンタルミラーを手に取り、結衣に口を開けさせる。すかさず、かすみがライトを点灯し、結衣の口にあてる。光がまぶしい。結衣は、

〝はぁ〜、始まっちゃった〟と思いながら、目を閉じ口を開けた。

「かすみちゃん､カルテお願いね」と麻帆先生はかすみに指示しながら、結衣の歯を診ていった。「左上から行きまーす。　７番〇、６番〇、５番

から３番斜線、２ば‥‥‥」麻帆先生は、探針で結衣の左上２番と１番のあいだを探針で突っつく。
「はぁん」結衣は、思わず声を上げた。
「うーん、２番と１番Ｃ１かな‥‥‥。ちょっと、進行してるみたいだけど‥‥‥。Ｃ２かもしれないわ。あとでレントゲンを撮りましょう」
〝えっ、そんな‥‥‥。前歯が虫歯になっちゃてるなんて‥‥‥〟結衣は泣きたくなった。
「右へいって１番から３番斜線、４番Ｃ１、５番斜線、６番○、７番斜線。次、左下にいって、７番○、６番○、５番Ｃ２、４番から５番斜線、６番○、７ば‥‥‥」麻帆先生は、ふたたび探針を使い、右下の７番をカリカリと突っついた。
「んぅぅ」
「７番Ｃ３。だいぶ虫歯が深くまで進んでるわねー。神経の治療が必要かどうか､ギリギリのところねー‥‥‥。レントゲンで診ないとダメね。お口ゆすいで」麻帆先生はいいながら、ユニットを起こす。結衣は、〝えっ、また神経の治療だなんて‥‥‥。ヤダよ‥‥‥〟と、去年受けた痛い治療を思い出し、目が潤んでくる。「結衣ちゃん、ちゃんと歯磨きしてる？　いまいったＣ３の奥歯、今まで痛んだり、染みたりしなかった？」口をクチュクチュとゆすいでいる結衣の背中に麻帆先生の声が飛んできた。
「は、はぃ。‥‥‥染みたりしてません‥‥‥。それに‥‥‥、歯磨きもしてます」結衣は、ドギマギしながら答える。本当は、いまいわれた奥歯は昨年の暮れくらいからちょくちょく染みていて、最近はときどきチクチクと痛むのだ。歯磨きも朝起きたときと夜寝る前に１分足らず磨いてるだけなのだ。４月にブラッシング指導を受けたあとも、あまり熱心に歯磨きをしていない。希美や芽以たちとクラブ帰りに寄り道をして甘いお菓子を食べたときも、そのままだし、どうかすると夜は勉強のあと歯磨きをせずに寝てしまうこともあった。
「ほんとう？　痛くなかった？　それに、歯垢も残ってるわよ」麻帆先

生は、ちょっと疑わしそうにしていたが、「まあ、いいわ。今回の治療終わったら、かすみちゃんに歯磨きの指導をしてもらいますからね」といった。
「結衣ちゃん、きれいに磨ける方法を教えてあげるからね」かすみもいう。
「はぃ、よろしくお願いします‥‥‥」結衣は、憂鬱そうに答える。
「じゃ、とりあえずレントゲンを撮るわね。かすみちゃん、お願い」
「はい、先生。結衣ちゃん、こっちよ」とかすみがレントゲンの小部屋に案内する。結衣は水色の歯科エプロンをつけたまま自分を見て、〝恥ずかしいなぁ‥‥‥。小さい子のよだれかけみたい。はぁ〟とため息をつきながら、レントゲン室にはいった。
　結衣がレントゲン室にはいると、「はい、これを噛んでね」とかすみにマウスピースのようなものを噛まされた。かすみはレントゲン室の外に出て、マイクで結衣に指示を出した。スピーカーを通じてかすみの声が聞こえてくる。
「はぁーい、そのままじっとして」
　結衣の前をパノラマレントゲンのユニットが通過する。
「はいお疲れさま。もう一度あっちに戻って」
　結衣はユニットに戻った。ユニットに腰掛け、しばらく待ってると、かすみができあがったレントゲン写真を持ってきて、麻帆先生に渡した。麻帆先生はレントゲン写真をユニットの投影機にかけた。蛍光灯の青白い光に結衣の口腔が映し出される。
「うーん、結衣ちゃん、やっぱり、右下の７番は神経を取らなくてはダメね。ほら、ここのところ見て。下からの神経と上からの虫歯の穴がつながっちゃてるでしょ」麻帆先生が結衣に説明する。見てみると、たしかに神経の黒い線と虫歯の黒い影がつながっている。結衣は、〝はぁ〜。今年も神経の治療かぁ〜‥‥‥。はぁ、いやだなぁ、また痛い思いしなくちゃいけない‥‥‥〟と涙がでそうだった。
「それから、左上の２番と１番、前歯だけど、の間は、やっぱりＣ２ね」

「先生‥‥‥」
「なあに？」
「‥‥‥前歯の治療って、痛くないですか？」
「大丈夫よ。麻酔するから。そんな顔しないで」麻帆先生は、結衣の顔を見てやさしくいう。
「‥‥‥それに」
「それに？」
「前歯、治したら、目立つんじゃないですか？」
「心配しないで。白い詰め物をするから、目立たないわ。今の詰め物はいいものがたくさんあるから、治したってわからないくらい自然に見えるわ。ねっ、だから心配しないで」麻帆先生は、結衣をやさしく励ます。
「そうだよ。全然、目立たないよ。だから、ねっ、ちゃんと治療しよ」とかすみも笑顔で結衣にいう。
「はい‥‥‥」結衣は、不安な表情で小さく返事をする。
「じゃあ、痛み出すといけないから、右下の７番から治療するわね。この歯は神経をとらないといけないから、麻酔をします。かすみちゃん、シンマ」麻帆先生は、ユニットのペダルを操作し、ユニットを倒しながら、かすみに麻酔注射を要求した。
「はい、先生」とかすみは、麻酔カートリッジを注射器に装着して、麻帆先生に渡す。ユニットが倒れたため、結衣の口はすでに麻帆先生の手元にある。無影灯が点灯された。
「はい、大きくお口アーンして」麻帆先生が、デンタルミラーと麻酔注射を構えていう。
「結衣ちゃん、大丈夫だよ。麻帆先生は注射上手だから、ちょっとチクッってするだけだよ」かすみが励ます。
〝はぁ、いよいよね‥‥‥。はぁ、いやだなぁ〟と結衣は思ったが、しかたなしに口を開けた。右の唇がデンタルミラーで広げられる。〝やだ、恥ずかしい〟口をゆがめて広げられた結衣は、自分の姿を想像して、少し赤くなった。

麻帆先生は、結衣の右下の歯茎に麻酔注射の針を刺す。結衣は、チクッという痛みを感じ、そのあとズーンとした薬液が歯茎に注入される痛みを感じ、「うっ」と声をあげ、思わずからだをのけぞらした。その結衣の動きのために、針がズレ、麻酔の薬液が少し漏れてしまった。

「結衣ちゃん、動いちゃダメ」麻帆先生が注意する。すかさず、かすみが結衣のからだを抑える。

結衣の口の中に麻酔液の苦さが広がる。〝苦い！　口の中ピリピリ～するぅ〟結衣は思った。

「あ～お薬上手く入らないね～、結衣ちゃん」

「もう一回我慢しようね～」麻帆先生がいう。「かすみちゃん」

「はい、先生」ふたたびかすみから麻帆先生に麻酔注射が渡される。

〝えっ、もう１本打つの！　私が動いちゃったからだ……。はぁ～〟またあの痛みをがまんしなくてはならないかと思う、思わず涙が出る。

「はい、アーン」

結衣が口を開けると、もう一度麻酔注射が口に入り、右下の歯茎に麻酔液が注入される。かすみが用心のため結衣を抑えていたため、今度はうまく注入された。

「麻酔が効くまで、しばらく待とうね」麻帆先生はいって、結衣のカルテを書くために背を向けた。かすみがライトを消してくれる。結衣は、神経の治療と前歯の治療のことが不安で頭がいっぱいになっていた。涙がでそうだ。

５分ほど時間がたった。

「もう、いいかな」ふたたびライトが点され、結衣の口を照らす。麻帆先生は、結衣の右下７番をコンコンとたたき、「ひびく？」と聞いた。

結衣はプルプルと首を横に振る。

「麻酔も効いたみたいね」と、麻帆先生はテーブルからピンセットでふくみ綿をつまみ、デンタルミラーで結衣の口を広げながら、結衣の右頬と右の歯茎の間にふくませ、治療のスペースを確保した。次に、テーブルの上のバーチャージャーからバーを選び、エアタービンに装着された

ハンドピースの先端につけた。
「はい、大きくア〜ンして」デンタルミラーとタービンを持って、麻帆先生がいう。
「痛くないからねぇ〜大きくアーンしようね〜」とかすみが励ます。
「痛かったら、左手挙げてね」
〝始まっちゃう……。あ〜ん、怖いよぅ〜〟涙目になりながら、〝お願い！！　痛くありませんように！！〟と、結衣は目を閉じ、必死の思いで口を開けた。
　かすみが結衣の口にバキュームを挿入する。つづいて、麻帆先生の持つタービンが挿入され、結衣のう蝕した右下７番の歯にあてがわれた。ドリルが結衣の虫歯を削り始める。
　キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイイーン。
　キュィィィーーン、キィィーン。
　コォー、コォー、コォォォーー、コォーー。
　キュイーン、キュイーン。
「そう、その調子、大きくお口開けててねー」
「結衣ちゃん、大丈夫だよー」麻帆先生とかすみが交互に声をかける。
〝怖いよ〜、はやく削るの終わらないかなぁ〜〟
　キュイーン、キュ、キュイ、キュイイイイイーーン。
　コォー、コォォォー。ジュ、ジュ、ジュッ。
　削り始めて１分がたった頃、結衣は削る振動だけでなく、徐々に痛みを感じ始めていた。そのとき、タービンが止まった。
　キィィィィーーン。
〝やった！！　削るの終わりかな〟結衣は薄目を開けた。ユニットが起こされる。
「お口ゆすごうか」麻帆先生がいう。結衣は、クチュクチュと口をゆすぐが、麻酔が効いているためか、うまくゆすげず口から漏れる。〝やだ、恥ずかしい〟
　そして、口をゆすぎながら〝きっと、削るのはこれで終わりよね。う

ん、あとは神経の治療だけね〞と思った。口をゆすぎ終えて、正面に向き直る。すると、麻帆先生はドリルの先端のバーを替えている。こころなしかさっきよりもバーが鋭くなっているようだ。

〞はぁ〜、まだ終わりじゃないのか〞ガックリとしながら、結衣は麻帆先生を見る。

「はい、もう一度アーンしようね」麻帆先生がタービンを構えていう。しかたなく、結衣が口を開けると、かすみのバキュームが挿入され、麻帆先生のドリルが結衣の虫歯を削り出す。

キュイーン、キュ、キュ、キュイイイーーン。

キュン、キュン、キュイイイイーン。

コォー、コォォォー。ジュッ、ジュ、ジュポポポポーーーー。

〞い、痛いっ！！　痛いっ！！　麻帆先生、かすみ先生、痛いよ！！　そこ痛いよ！！〞　今度は、削りだして３０秒もたたないうちに、強い痛みが結衣を襲う。

「んん、ふん、ふぅん」

「はいはい、大丈夫よー。もうちょっとがまんしてー」

「結衣ちゃん、もう少しだよー、がんばって」麻帆先生とかすみが交互に声をかける。だが、痛いものは痛く、削る痛みは止まらない。結衣は必死でがまんしている。胸は大きく波打ち、脚はくの字に曲がり、ひざはあわさっている。足の指は強くユニットに押しつけられている。それでもつづく痛みに、結衣はとうとうむせび声をあげはじめた。

キュイーン。キュイーン、キィ、キュイ、キュイイイイーン。

コォー、コココォー。ジュポ、ジュポポポポポー。

「ふぅん、ふん、ふん、んぁ、ふぅん、ふん」

「はぁーい、結衣ちゃん、がんばって。もう少し大きくお口開けて」

「結衣ちゃん、痛くない、痛くない、大丈夫だよ」麻帆先生とかすみが交互に結衣を励ましている。生々しい治療の音が診察室にひびく。

結衣はもはや半べそだった。

「ふふん、ふん、ふん、ふぅん、えっ、えっ、んん、んぁ、ん」

キュイーン、キュイーン、チュイーン。

コォォォーー、コォーー。

「エッ、エッ、ふん、ふん」

「ほんともう少しだよー。結衣ちゃん、がんばってー」ハンドタオルを強く握る結衣の手に、かすみは空いている手を重ねながら励ます。が、とうとう結衣は左手を挙げた。

キュウウウーーーン。

麻帆先生がタービンを止める。

「そうね、結衣ちゃん、ちょっと休憩しよっか。お口ゆすごうか」ユニットが起こされる。

結衣は、ヒックヒックとしゃくり上げながら、口をゆすいだ。麻酔のせいで口から水が漏れる。その背中で、麻帆先生は、ドリルの先端のバーをまたまたつけ替えている。さらに痛そうなバーに見える。

結衣がハンドタオルで涙を拭いて、〝これだけ削ったんだから、今度こそ削るのは終わりよね〟と思いながらからだを正面に向けると、麻帆先生がまたもやタービンを構えている。左側を見ると、かすみもバキュームを構えている。

〝えっ、まだ終わりじゃないの！？〟結衣は、涙が溢れてくる。

「結衣ちゃん、ほんとあともうちょっとだから、がんばろ」かすみが笑顔でいう。

「結衣ちゃん、もうちょっとよ。はい、お口開けてアーン」麻帆先生が促す。

結衣は鼻を啜りながら、いやいや口を開けた。

キュイーン、キュイ、キィ、キュイイイイーーーン。

コォー、コォォォー。ジュポポポーー。

キュイーン、キュイ、キュイイイーーン。

キュイーン、キュイイーン。

「ふうん、ふん、ふん」

「はい、だいじょうぶ。お口閉じちゃダメ」

「結衣ちゃん、あともうちょっと、がまんしようね。大丈夫だよ〜」結衣、麻帆先生とかすみが結衣を励ます。
「ふん、ふん、ふうん、ふん、ふぅん、えっ、えっ、んん」
〝もうやめてー！！　麻帆先生、かすみ先生、痛いよっ！！　すごく痛いよっ！！　痛いっ痛いっ痛いーっ！！　毎日歯磨きするからっー！！　もう許してえー！！〟
　キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイイーン。
「ふうん、ふん、ふん、あぁ〜ん、えっ、えっ」
　キィイイイィーーーン。
　タービンを止め、麻帆先生は、「結衣ちゃん、がまんできない？」とやさしく聞く。
　結衣は、涙をポロポロと零し、こくりと頷く。かすみが涙に濡れた結衣の頬をタオルで拭いてくれる。
「ほんとあともうちょっとなんだけど……。じゃあ、もう１本麻酔を打つわ。かすみちゃん、シンマお願い」
「はい、先生」かすみは薬品棚から麻酔のカートリッジを取り出し、注射器につけ、麻帆先生に渡した。麻帆先生の持つ麻酔注射がみたび結衣の歯茎に突き刺さる。結衣は麻酔注射と聞いて身構えたが、さっきの麻酔が効いているためか、麻酔液が歯茎に注入される圧迫感はあったが、痛くはなかった。麻酔が効くまでライトが消され、しばらく待つ。結衣はぼんやりと診療室の白い天井を眺め、〝いつまで治療つづくんだろ〟と憂鬱な気持ちでいた。
「もう、いいかな」ライトが点され、麻帆先生がデンタルミラーの柄で結衣の治療中の歯をコンコンとたたく。今度こそ麻酔が効いたのか、痛くはない。
「結衣ちゃん、麻酔効いたみたいだし、削っていくわね。お口開けて、アーン」麻帆先生がいう。
「結衣ちゃん、もうちょっとがんばろうね」かすみが励ます。
〝お願い！！　今度こそ痛くありませんように！！〟

キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイイーン。

コォー、コォォォー。ジュ、ジュ、ジュッ。

キュイーン、キュイーン。

コォォォーー、コォーー。ジュポポポーー。

切削が再開され、ものの３０秒もたたないうちに、またもや強い痛みが結衣を襲う。

「んんんっ、ふん、ふん、んんっ、ふぅーん、ふん、ふん、えっ、えっ」

結衣は、からだを捩り、足をバタバタし出す。

「えっ、えっ、んんんぁ、ふん、ふん」

「結衣ちゃぁーん、危ないから動いちゃダメ！　もう少しだからがまんしよ」かすみが叱咤しながら、励ますが、もう結衣は限界だった。

「エッ、エッ」結衣はまた泣き出してしまった。

キュウウウーーーン。

麻帆先生がタービンを止め、結衣を見る。結衣は、汗と涙で憔悴しきっている。

「結衣ちゃん、今日はこれで終わりにしましょう。結衣ちゃんのからだがもたないわ。かすみちゃん、ペリオドン」

「はい、先生」

麻帆先生は、タービンをシリンジの持ち替えると、エアーをシュッシュッと結衣の歯にかけた。結衣は少し顔をしかめる。つぎに、かすみからペリオドンの薬瓶をうけとると、綿を巻きつけたブローチをペリオドンの薬瓶に浸し、ブローチを結衣の虫歯の削った穴に詰める。

「ちょっと、染みるわよー。がまんしてね」

「ふーん、ううっ」

〝い、痛いっ！！　うぅぅぅーん、染みるぅー！！〟結衣は、いま詰められた薬が強烈に歯に染み、からだをのけぞらせる。かすみがあわてて抑える。

「結衣ちゃぁーん、もうちょっとがんばってー」

「ううん、ふん、ふん」

麻帆先生は、すばやく巧みに、セメントで結衣の歯を仮封した。ふくみ綿が取り除かれる。
「はぁーい、結衣ちゃん、これで終わり！！　よくがまんしたね。お口ゆすいでね」ユニットが起き上がる。
「ほんと、結衣ちゃん、よくがんばったよ。えらい！！」麻帆先生とかすみがほめてくれる。結衣は、治療が終わった安堵感でまた涙が目に滲んでくる。
「あらあら、もう泣かないで」かすみがタオルで涙を拭いてくれる。結衣は水を含み、口をゆすぎだす。麻酔による唇のしびれはまだ続いている。
「結衣ちゃん、今日治療した歯はねぇ‥‥‥」麻帆先生が話し出した。
「‥‥‥削ってみたら、虫歯がそうとう深く進行していたの。それで神経も炎症を起こしかけてたの。だから、かなりつらい治療になっちゃって、ごめんね」
「くすん」結衣は鼻を啜り、「いいぇ」と小さく返事をする。〝虫歯ほっといた私が悪いんだし‥‥‥、染みたとき治療受けてれば、こんな痛い思いしなくて済んだのに‥‥‥〟と後悔していた。〝中学生にもなって、歯医者さんで大泣きしちゃうなんて‥‥‥。恥ずかしい〟結衣はすこし赤くなる。
「‥‥‥それでね、ほんとは神経の治療まですまそうって思ったんだけど、今日は結衣ちゃんがこれ以上治療の負担に耐えられないと思ったから、神経を殺すお薬を詰めて終わりにしたの」
「はぃ」
「‥‥‥詰めたのは強いお薬だから今日は痛むかもしれないので、痛み止めのお薬と炎症を抑えるお薬を出します。痛みがでたら痛み止めを飲んでね。それから炎症を抑える薬は、次の治療まで毎食後１錠ずつ飲んでね。わかった？」
結衣はこくりと頷いた。
「それじゃ、次回の治療だけど‥‥‥、１週間後でいい？」

結衣は、今日の痛かった治療を思い、まだズキズキと疼く歯に、憂鬱そうな顔でしかたなく頷く。〝痛たたたー。まだ削った歯が痛い。はぁ、次も痛いのかなぁ……。いやだなぁ……。〟
「時間は……、きょうと同じくらいでいい」と麻帆先生の問いかけに、「はぃ」と返事をする。
「じゃあ、１週間後の月曜日４時３０分ね。まってるわ。お大事に」
「結衣ちゃん、エプロン外すねー」かすみが結衣から歯科エプロンを外してくれる。
「かすみちゃん、結衣ちゃん、だいぶ疲れているようだから、待合室まで連れて行ってあげて」
「はい、先生」
かすみが整えてくれたスリッパを履き、かすみに肩をかかえられながら、診察室のドアに向かう。スクールバッグを持ち、待合室に出る。

診察室のドアがカチャッと開いた……。
結衣が半べそをかきながら、待合室に出てきた。顔は涙でぐちゃぐちゃだった。ときおりハンドタオルで涙を拭っている。衛生士のかすみがついてきてなぐさめている。
「結衣ちゃん、よくがんばったよ～。ねっ、もう泣かないで。今日の治療は終わりだから」
「次はこんなに痛くないよ～。だからもう泣きやんで」かすみは結衣を懸命に慰めている。

それを見ていた希美と愛美は結衣にかけるべき声を失っている。〝結衣……〟特に希美は前回の自分を見ているように思った。

結衣の目には、希美と愛美が映っていたが、治療の疲れとジーンとする歯の疼きで憔悴しきっていて、だまってソファーに腰掛けた。
しばらくすると、受付から「堀北さぁーん、堀北結衣ちゃぁーん」と

呼ばれた。

結衣は、かすみにソファーから抱きかかえられて受付に案内され、会計を済ますと、希美と愛美に涙に濡れた顔を向け、頭を下げると、奥田歯科医院の自動ドアの方へ歩いていく。希美と愛美の視線が感じられた。

〝希美、愛美さん、あいさつもせずにごめんね。私、痛かった〜……。いまはそっとしておいて……〟

初夏の空は夕映えにはまだ遠い。結衣は、足取りも重く帰り道を歩く……。

乙女のお悩み－もう一つの物語・夏帆の場合

「ふぅ～。つかれたぁ～終わったぁ～。愛美、『９０Ｐ』寄ってかない？」
「えっ。どうしょうかなー」
「いいじゃん。今日の練習きつかったし、寄ってこ」
　夏帆と愛美は学校の正門に向かっていた。ラクロス部の土練に参加して、今練習が終わったところだ。練習にエネルギーを使ったので、夏帆は甘い物が欲しくなっていた。『９０Ｐ』は、純姫女子学園の近くにあるクレープやケーキなどのお店だ。純姫の女生徒のお気に入りの店で、夏帆や愛美もよく立ち寄っている。特にラクロス部の練習があった日は必ずといっていいほどお店に行く。
「でも……。私、今歯の治療中だし……」
「大丈夫、食べたら、磨けばいいんだから」と夏帆は強引に愛美を『９０Ｐ』に連れて行った。

「こんにちわ」
「いらっしゃいませ」
　『９０Ｐ』は、丸テーブルが５つとカウンター５席のお店である。土曜日の午後３時過ぎで、お茶をしている人が結構いる。ふたりは店の左隅、通りに面した丸テーブルに空いている席を見つけ、腰掛けた。早速、お店の人がやって来る。
「いらっしゃいませ。メニューお決まりになりましたら、お呼び下さい」とメニューとグラス、ライム水の入ったタンブラーをテーブルに置いてゆく。
「なんにしょうっかなー。愛美はなんにする？」夏帆が愛美にメニューを見せながら問いかける。愛美も甘い物が好きだが、今週の月曜日から歯の治療を受けていることもあり、浮かない顔をしている。
「うーん、迷うなぁ～。どれもおいしそうだし……。ねぇ、愛美は？」夏帆は目移りしながら品定めをしている。

「私、オレンジジュースだけでいい」
「えー。なんでー」
「私、歯の治療の最中だし、まだ仮の詰め物が入れてあるし、とれっちゃったらイヤだから」
「うん、もぅ〜。しようがないなぁ。でもわかった。私も経験あるし……。すみませーん」夏帆がお店の人を呼ぶと、「お決まりですか」とお店の人がテーブルにやって来た。
「オレンジジュースと、私、イチゴのミルフィーユとカフェラッテ、をお願いします」夏帆が注文する。
「かしこ参りました。少々お待ち下さい」とお店の人は注文を聞き、カウンターの奥の厨房にオーダーを入れた。
「でどこまで、治療済んだの？」夏帆が愛美に聞く。
「うん、まだ１本だけ。それも途中」愛美が答える。
「そっかぁ。まだまだかかりそうだね。愛美、何本虫歯あったの？」
「全部で６本」
「えー。そんなにあったの」
「うん」と愛美はちょっと憂鬱な顔をして「歯科検診では３本だったんだけど、麻帆先生に、前歯に虫歯見つけられちゃって……」と小さくいった。
「えっ！！　前歯、虫歯になっちゃったの！！」
「うん、ごく小さい虫歯らしいんだけど……」
「そっか、愛美、希美ちゃんといい、愛美といい、大変だったね」と夏帆は真剣に愛美を慰める。
「ありがと。月曜日、また歯医者なんだー。はぁ」
「元気だしなよ」
「うん」
「お待たせしました」テーブルに、愛美のオレンジジュースと夏帆のイチゴのミルフィーユとカフェラッテが運ばれてきた。
「きたきた。愛美、食べよ、飲も。飲んで元気だしなよ。いっただきま

ーす」夏帆が明るくいう。
「うん」愛美は、オレンジジュースにストローをさし、治療している左の歯にジュースが流れないようにして飲んでいる。夏帆はその姿を見て〝愛美、虫歯多いし苦労してるんだ〟と思いながら、ミルフィーユを口に入れた。ふたくち、みくち噛んで味わっていると、ツーンと右上の奥歯が染みて、フォークを置いた。実は夏帆も歯科検診で虫歯が見つかっている。
「どうかした？」愛美が聞く。
「ううん、なんでもない」夏帆は無理矢理普通のそぶりで答える。
〝今、ちょっと染みたよね……。ううん、きっと気のせい。虫歯あるけど、とくに多いわけでも痛いわけでもないし……。きっと気のせいよね〟と思いながら、歯科検診の時を思い出していた。

ほぼ１ヶ月半ほど前の４月１８日の３時間目。純姫女子学園高等部は授業が休みとなり、３時間目と４時間目に女生徒全員が歯科検診を受けることになった。中等部はすでに２時間目から歯科検診がはじまっていて３時間目まで行われることになっている。夏帆が愛美と会場の体育館に行くと、中等部の歯科検診はそろそろ終わりかけている。愛美の妹の希美の姿も見える。こころなしか元気がない。
中等部の検診が終わり、高等部の検診が始まった。次々に女生徒が歯科医の前に座り、口を開けさせられる。みんな一様にいやそうな顔をしている。助手が女生徒の口の中をライトで照らし、歯科医はデンタルミラーと探針を女生徒たちの口に入れ、６番マルとか、７番Ｃ２とか女生徒の歯の状態を呼び上げ、歯式が検診票に記入されていく。
〝ドキドキしてきた。虫歯あったら、どうしよう……〟夏帆は次の次まで順番がせまってくるのを見ながら、胸が高鳴った。思わす振り向き愛美に「もうすぐだね」と小声でいうと、愛美も元気なく「うん」とこたえる。

ついに夏帆の順番が来た。気乗りはしないが、歯科医の前に座る。
「仲根夏帆さんだね。はい、お口をおおきく開けて」
夏帆がふと口を開けると、ライトが夏帆の口に向けられた。歯科医が探針とデンタルミラーを口の中に入れた。
「はい、左上から行きます。７番〇、６番〇、５番斜線、４番〇、３番から右の５番まで斜線、６番〇、７ば……」歯科医がカリカリと探針で突っつく。
「ふぅうん、ん」思わず声が出る。
「７番Ｃ２。次、左下行って、７番〇、６番〇、５番Ｃ２、４番から右の４番まで斜線、５番〇、６番〇、７番〇。以上です」
〝はぁ〜、今年も虫歯あったー。いやだなぁ。また歯医者か……〟と口を閉じながら思っていると、歯科医が、
「仲根さん、右上の７番だけど、少し虫歯が進行しているようだね。すぐに治療に行くこと。いいね。それから治療勧告書を渡すときに歯垢チェックとブラッシング指導を受けてもらうからね」といった。
「はい」と答えながら、夏帆は〝あ〜あ、今年もかぁー〟とがっかりしながら席を立つ。続いて愛美が座り、検診を受けだした。夏帆は列から離れ、愛美の検診が終わるのを待っていたが、聞くともなしに愛美の歯式が聞こえてくる。７番マル、６番Ｃ２……。〝愛美も虫歯あるなぁ〜。はぁ、イヤだなぁ〟

１週間後。朝のホームルームが始まった。担任の村川さとみ先生が入ってくる。クラス名簿となにかプリントのようなものを手にしている。
「起立、礼、着席」
「みなさん、おはようございます」
「おはようございます」
「４月２５日の朝のホームルームを始めます。出席をとります……」村川先生は、クラスの出席を取り始めた。「……はい、今日はお休みの人はありませんね」

「じゃあ、今日はみなさんにお渡しするものがあります。４月１８日にあった歯科検診の結果です。名前を呼ばれた人は、前に出て『治療勧告書』を受け取ってください」
「えぇぇーっ」生徒たちからブーイングがあがった。
「はい、静かに。では、名前を呼びます……」
　夏帆は、隣の席の愛美に向き、顔を見合わせふたりでため息をついた。
「はぁー」
「仲根夏帆さん」
「はい」夏帆は立ち上がり、村川先生のいる教壇に行き、治療勧告書を受け取った。処置歯９本のほかに、未処置歯２本と書いてあり、いずれもＣ２だった。
「仲根さん、２時間目は保健室に行って保健の先生と歯科衛生士さんから、歯垢チェックとブラッシング指導を受けてね」
「はぃ」夏帆は小さく返事をして、治療勧告書をもって席に戻った。
「若槻愛美さん」
「はい」愛美は憂鬱そうに立ち上がり、村川先生のところに行き、治療勧告書を受け取り、夏帆と同じく２時間目に歯垢チェックとブラッシング指導を受けるようにいわれて、席に戻ってきた。

　２時間目。保健室に向かう夏帆と愛美の姿があった。
「ねえ、愛美。歯科検診で虫歯見つかったみたいだけど、染みる歯とか、痛い歯とか、ある？」
「ううん。今、痛い歯とかないわ」
「じゃあ、治療のお勧め、ママに見せないでおかない？」
「どうして？」
「だって、歯医者いやじゃない。治療痛いし……」
「そうだね。私も歯医者大嫌いだし……。ママにはだまってようか」
「うん、そうしようよ。ね」
「うん」

ふたりは、こうして治療勧告書を親に見せないことに決めて、保健室に入っていった……。

「夏帆、どうかした？」
「ほんと、なんでもない。心配しないで」夏帆は笑顔で答え、ミルフィーユを口に運んだ。けれど、右の方にミルフィーユがいかないようにして……。
ふたりは、『９０Ｐ』をでた。
「おいしかったね」夏帆はまだちょっと右上の歯が染みていたが、愛美に笑顔でいう。
「うん、夏帆にさそわれて来てよかった。ちょっと元気出た」愛美も笑顔でいう。
「愛美、治療がんばんなよ」
「うん、ありがと。がんばる」
「じゃあ、また月曜日。学校でね」
「じゃあね。バイバイ」夏帆と愛美は手を振り、互いの家路についた。

「ただいまー」玄関を開け、夏帆が家に入った。そのとたん、台所からエプロンをしたままママが出てきた。
「お帰りなさい。夏帆、あなたママに隠し事してるでしょ」
夏帆はドキッとしたが、平静をよそおい、
「えっ、隠し事なんてしてないよ」とこたえる。
「隠してもダメ。今日、買い物に行ったら愛美ちゃんのお母さんにあったのよ。そしたら、愛美ちゃんたら妹の希美ちゃんといっしょに虫歯治療のお知らせを隠してたっていうじゃない。それも歯科検診は４月１８日にあったって。希美ちゃんの歯が土曜日の晩に痛み出してわかったって、おっしゃってたわ。夏帆、歯科検診の結果はどうだったの？」
「えっ、うん。虫歯なかったよ」

「うそおっしゃい」
「うそじゃなよ」夏帆はどぎまぎしながらこたえる。
「うそ、じゃあ４月の歯科検診終わったあとに、なんですぐ話さないの？」
「それは‥‥‥」
「ほら､やっぱりうそじゃない｡ママはもうちゃんと聞いてるんだから。夏帆が虫歯あったって」
「‥‥‥ごめんなさい。ママ‥‥‥」と夏帆は観念して、スクールバッグの中に隠しておいた治療勧告書を取り出し、ママに渡した。
「まぁ〜、やっぱり虫歯あったんじゃない！！」
「えっ、ママ知ってたんじゃなかったの！？」
「夏帆が正直に答えないから、ちょっとね‥‥‥」
「なによ〜。ママずるーい」
「ずるいじゃありません。もう、ホントに夏帆ったら。いいこと。月曜日に学校終わってから歯医者さんに行くのよ｡ママが予約とっとくから」
「えーっ。歯医者いやだ！！」
「いやだじゃありません。ちゃんと治療に行くのよ」
「だって、痛くないもん！！」
「ダメ。行きなさい。いかないとおこずかいなしよ」
「わかった。わかりました。行きます。歯医者行くよ」夏帆はおかんむりだ。けれど、おこずかいをたてに決められてはどうしようもない。
　こうして、夏帆も歯医者に行くことになった。

　月曜日の朝、登校時間。
「おはよう」学校前の通学路で、愛美が夏帆に声をかけた。
「あっ、愛美。おはよ」心なしか元気がない。
「どうしたの？」
「うん、実は私も歯科検診の結果、ママにばれちゃって‥‥‥」
「えっ、ほんと？」

「うん、それで今日の午後４時４０分に奥田歯科に予約入れられちゃったの。ねえ、愛美いっしょに行かない？」
「あっ、うん、ごめん。私、希美をいっしょに連れてかなくちゃならないの。ホントごめん。それに私と希美の予約時間午後５時なの」愛美は、すまなさそうに夏帆にいった。
「そっか、じゃあしかたないなぁ。わかった、私先に行ってがんばって治療受けてくるね」
「ほんとにほんと、ごめんね。後から必ず行くから……」ふたりはそんなことを話しながら、校門をくぐった。

「じゃあ、愛美、私先行ってるから」夏帆が愛美に声をかけると、
「うん、後から私も妹と行くね」と愛美がこたえた。夏帆は午後４時４０分の予約時間にあわせるため、ラクロス部のクラブ活動を早退させてもらった。体操服とジャージを手早く制服に着替えて学校を出た。

夏帆は奥田歯科医院の自動ドアのマットを踏み、中へと入った。とたん、歯医者特有の消毒液の匂いとキュイーン、キュイーンと歯を削るタービンの音が聞こえてくる。〝この匂い、この音……はぁ、いやだなぁ。痛くされるのかなぁ〟と不安が胸に押し寄せる。純姫女子学園の中等部の制服を着た生徒がソファーに腰掛けている。治療を前にして不安そうな表情をしている。〝あの子も不安そうだなぁ……はぁ〟と思いながら、受付に向かう。受付には上品そうな年配の女性が座っている。
「予約していた仲根ですが、これお願いします」
「はいはい、仲根さんですね。聞いています。保険証をおねがいします」
「はい」とスクールバッグから保険証を取り出し、渡しながら「あの、これはどうすれば……」と治療勧告書を出すと、「お預かりします。それから、こちらを記入してくださいね」と問診票が渡された。受付の時計を見ると、４時３５分あたりを指していた。問診票を書くためソファーに戻ろうと、からだをソファーの方向に向けたとたん、診察室のドア

が開き、歯科衛生士のかすみが「堀北さぁーん、堀北結衣ちゃぁーん。診察室にお入り下さい」と結衣を呼んだ。

ソファーに座っていた純姫の中等部の制服を着た子が、「はぃ」と消え入りそうな返事をして憂鬱そうな表情で立ち上がり、スクールバッグを持って診察室のドアに消えた。

夏帆は、ソファーに座り問診票を記入した。右上の奥歯が染みるが『特に痛い歯はない』に〇をつけ、ささやかな嘘を書く。質問の項目を埋め、受付に渡しソファーに戻る。そのとたん、診察室の方からむせぶ声と、麻帆先生、かすみの励ます声が聞こえてきた。

キュイーン。キュイーン、キィ、キュイ、キュイイイイーン。

コォー、コココォー。ジュポ、ジュポポポポポー。

「ふぅん、ふん、ふん、んぁ、ふぅん、ふん」

「はぁーい、結衣ちゃん、がんばって。もう少し大きくお口開けて」

「結衣ちゃん、痛くない、痛くない、大丈夫だよ」麻帆先生とかすみが交互に結衣を励ましているのが、待合室に響く。生々しい治療の音が二人の耳にはいってきた。夏帆は思わず胸がドキドキする。〝痛そう……。あの子、痛いんだろうなぁ〟診察室の様子が気になり、手に持つ雑誌の内容が頭に入ってこない。

奥田歯科医院の自動ドアが開いた。愛美と希美が入ってきて、受付に向かう。受付で診察券を出し、受付の年配の女性と話している。愛美と希美の受付が終わり、こちらのソファーにからだを向ける。夏帆が声を掛けようとしたとき、診察室のドアが開いた。タービンの音とむせび声が大きくなる。

キュイーン、キュイーン、キュキュキュイイイイーン。

「ふん、ふん、ふうぅん、ふん」

「大丈夫、痛くないよー。もうちょっとがまんしよー」麻帆先生とかすみの声が診察室から漏れてくる。

診察室のドアが開き、制服を着た小学校高学年くらいの女の子が治療を終えて出てきた。制服を見ると皓大教育学部附属小学校の生徒のようだ。女の子は痛い治療だったのか、泣きながら、「エッ、エッ、ママー、うわーん、痛かったぁ〜」とソファーで待っている母親のところへかけよる。「由紀ちゃん、よくがんばったねー。泣かない、泣かない」母親が慰めている。その光景を目の当たりにして、夏帆はよけい不安が募ったが、すぐに歯科衛生士の紗季が顔を出し、

「仲根さぁーん、仲根夏帆さぁーん、診察室にお入りください」と夏帆を呼んだ。夏帆は愛美と希美に声をかけるタイミングを失った。しかたなく、ふたりに目で軽く会釈をして、沈んだ表情のまま、スクールバッグを持ち診察室に入っていた。

診察室に入ると、ドアの横にある荷物棚にスクールバッグを入れ、スクールバッグからハンドタオルを取り出した。荷物棚には結衣のものであろう純姫のスクールバッグが入っている。歯科ユニットは４台並んでおり、結衣は一番右のブルーのユニットで麻帆先生とかすみに虫歯を削られている。当然、待合室で聞くよりも当然タービン音は大きく、結衣のむせぶ声もより生々しい。〝はぁ……。私もあんなふうに痛くされるのかなぁ……。はぁ〟夏帆は今更ながらに気が重い。

キュイーン、キュイイーン。

「ふうん、ふん、ふん」

「はい、だいじょうぶ。お口閉じちゃダメ」

「結衣ちゃん、あともうちょっと、がまんしようね。大丈夫だよ〜」麻帆先生とかすみの声が結衣を励ましている。

紗季は、夏帆を結衣が治療を受けているユニットの隣にあるピンクの歯科ユニットに案内した。

「夏帆ちゃん、この治療台に座ってね」とにっこりほほえむ。夏帆の治療前の緊張をほぐすための笑顔のようだ。夏帆は、隣で痛そうな治療を受けている結衣をみ、これからの自分の治療のことを思い、ユニットに

腰掛けるのを躊躇した。
「どうしたの？　夏帆ちゃん、はやく。大丈夫だから」紗季に促され、スリッパを脱ぎ、いやいやユニットに座る。紗季は、夏帆にすぐ水色の歯科エプロンをつけた。
「はぁ」夏帆はため息しかでない。
「じゃあ、先生を呼んでくるわね」紗季は真希先生を呼びに行った。
　夏帆はあらためて､まわりを見渡す｡正面にはギョロッとした無影灯。アームののびたテーブルには、デンタルミラーや探針をはじめとする基本４点セット、ストッパーがのったトレイ、バーチャージャー、薬の入った茶色や緑色の小瓶。そのテーブルにはホースでユニットとつながったドリルの類。夏帆がもっともイヤなものだ。左側には衛生士が使うバキュームやシリンジ、うがいをするための注水器とコップ。右側をみると、結衣が治療の真っ最中だ。夏帆は不安で仕方なかった。
　スリッパの音がふたつしてきた。
「夏帆ちゃん、こんにちわ」真希先生がユニットにやって来た。
「あっ、先生、こんにちわ」夏帆もあいさつをかえす。
　真希先生は、夏帆の治療勧告書と問診票を手に取り､「虫歯が２本、歯科検診で見つかったのね。で、特に痛んだり染みたりはしてないわけね･･････」といった。
「お口全体を見させてもらうわね。えーっと、その前に自己紹介ね。夏帆ちゃん、夏帆ちゃんの治療を担当する奥田真希です。よろしくね。こっちが、治療のお手伝いをしてくれる歯科衛生士の石原紗季さん」
「石原紗季です。夏帆ちゃんの治療のお手伝いをします。いっしょにがんばろうね。よろしくね」
「よろしくお願いします」夏帆は不安な面持ちのまま、いった。
「そんなに心配しなくて大丈夫だよ。先生は治療、とっても上手だから痛くないよ」紗季が笑顔で励ます。
「はぃ」
「じゃあ、いす倒すわね。お口診せて。はい大きく開けてアーン」真希

先生がユニットのペダルを踏む。ユニットが徐々に倒れていき、真希先生の手元に夏帆の口元があった。真希先生の手には探針とデンタルミラーが握られている。

「はい、アーン」

紗季がライトを点灯し、夏帆の口元にあてる。夏帆の目にも光が入り、少しまぶしい。夏帆は目を閉じて、ふと口を開けた。

「はい、左上から行きますねー。７番〇、６番〇、５番斜線、４番〇、３番から２番斜線、１番Ｃ１、右の１番から５番まで斜線、６番〇、７ば……」真希先生がデンタルミラーで入念に７番を診、探針でカリカリと７番の溝を突っつく。

「ふぅうん、ん、んぅ」夏帆は、チクチクとした痛みを感じ、思わず声が出てしまう。

「７番Ｃ２ね。夏帆ちゃん、ちょっと虫歯が深くなってるわ。次、左下に行ってー……、７番〇、６番〇、５番Ｃ２、４番から右の４番まで斜線、５番〇、６番〇、７番〇。以上です」

夏帆は、〝えっ、私も前歯、虫歯になっちゃてるー。愛美と同じ……どうしよう〟と泣きたくなっていた。

「夏帆ちゃん、ちょっと磨き残しが多いみたいね。今日は右上の７番、一番奥の歯だけど、その歯から治療していくわね。少し虫歯が進行しているようだし……。痛むといけないから。それじゃ」

夏帆は、さきほどの診断でみつかった前歯の虫歯が気になり、真希先生の今日の治療の説明が頭に入らない。思い切って「先生！」と声をあげた。

「なあに？」

「先生、私の前歯、虫歯になっちゃてるんですか？　前歯って治療痛いんじゃないですか？　治したら銀歯になって目立つんじゃないですか？」夏帆は不安な顔で、目尻に涙をためて、真希先生に聞いた。

真希先生はそれを聞くと、やさしく微笑み、

「大丈夫よ。夏帆ちゃんの前歯は、裏側のほんの小さな虫歯だから、ち

ょっと削って詰めるだけで済むわ。それに前歯を治療するときは麻酔をするし……。それから」と真希先生は紗季に目配せをして、レジンのチューブを紗季から受け取ると、すこしチューブからだしてストッパーでかきとった。

「この白い物、レジンっていうんだけど、を詰めるから全然目立たないわ。治したってわからないわ」

「そうよ。夏帆ちゃん、全然心配ないんだから。真希先生を信じて、しっかり虫歯治そ。ねっ！」と紗季もほほえみながら、夏帆を励ます。夏帆は、ふたりの笑顔に励まされて、すこし落ち着いた。

「じゃあ、治療、始めよっか」と真希先生はいい、「まず、お口ゆすいでね」とユニットを起こしてくれる。夏帆がクチュクチュと口をゆすいでいる背中に、真希先生は、

「今日治療する右上の７番はちょっと虫歯が進行してるけど、とりあえずは麻酔なしで削っていくわね」という。

　夏帆は、〝えっ、麻酔なしだなんて……。それってすごく痛くない！？〟とまた不安が募ってきた。口をゆすぎ終わり、正面に向くと、真希先生に聞いてみた。

「先生、麻酔なしって、とっても痛くないですか」

「大丈夫よ。痛くないように治療していくから。それに麻酔はからだの負担も大きいから。もし削ってる途中でがまんできなくなったら、遠慮なくいってね。そのときは麻酔をするから」真希先生はにっこりという。

「そうよ、大丈夫よ、夏帆ちゃん。私もいままで真希先生の治療で、たくさんの患者さんのアシストをつとめてきたけど、真希先生の治療はとってもやさしいから、麻酔なしでも平気よ」紗季も笑顔をたやさずいう。

〝はぁ、ほんとにだいじょうぶかなぁ……。痛くないのかなぁ〟と夏帆はまだ不安だった。去年別の歯医者で受けた治療のときは小さな虫歯でも何本も麻酔を打って治療されたのだ。麻酔注射ももちろん痛くていやだが、それ以上に歯を削る治療が苦手な夏帆はことのほか痛みに弱いのだ。しかし、この状況では麻酔をしてほしいともいえず、真希先生と

紗季のことばを信じることにした。ユニットが倒れていく。無影灯の焦点が夏帆の口にあわされる。真希先生はトレイからデンタルミラーとピンセットを選んで、ピンセットでふくみ綿をつまんだ。

「はい、お口開けようか」と夏帆の口元にデンタルミラーとピンセットを持ってくる。夏帆がおそるおそる口を開けると、デンタルミラーで右の唇の端を広げ、ふくみ綿を右の歯茎と頬の間にふくませ、治療のスペースを確保した。つぎに真希先生は、テーブルの上のバーチャージャーからドリルの先端につけるバーを選んでいる。なんだか痛そうなバーだ。夏帆はますます憂鬱になってくる。〝はぁ〜、あの、真希先生が選んでるドリル、とっても痛そう……。ほんとに麻酔なしで痛くないのかなぁ……。コワくなってきた……〟

真希先生は選んだバーをハンドピースの装着されたエアタービンに取り付けた。そして夏帆の方を向いて、デンタルミラーとタービンを持ち、構えていった。

「夏帆ちゃん、お口大きくア〜ンして」

「痛くないからねぇ〜大きくアーンしようね〜」と紗季もライトが的確に夏帆の口元にあたるように調整して、バキュームを構えながらいう。

「どうしたの？　夏帆ちゃん、アーン。……痛かったら、左手挙げて教えてくれたらいいから」

〝どうしよ、治療始まっちゃう。コワイよー……。あぁん、ぐすん。お願い！！　どうか痛くありませんように！！　すぐ終わりますように！！　これからはちゃんと歯磨きしますから、お願い！！〟と夏帆は心の中でつぶやき、ハンドタオルを両手で握りしめ、目を閉じて口を開けた。

開いた夏帆の口の中に紗季のバキュームが挿入された。

コォー、コォォォー。

続いて真希先生が、デンタルミラーで夏帆の唇の右側を、これからの治療がしやすいように上に持ち上げるように広げた。デンタルミラーとふくみ綿で治療スペースが確保された夏帆の口にタービンが挿入される。

真希先生は、う蝕した夏帆の右上７番の歯にタービンに装着されたバーをあてがう。すかさずペダルを踏み、ドリルを回転させる。

キュイーン、キュ、キュイ、キュ、キュ、キィ、キィ、キュィーン。

コォー、コォォォー、コォー。ジュ、ジュッ、ジュッ、ジュポポポポーーー。

キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイイーン。

歯を削る音と、真希先生と紗季の励ます声が診察室にひびく。

キュイーン、キュイイイイイーーン。キュイ、キュイ、キュイイイイーン。

コココォー、コォー。ジュポポポポー。

「その調子よ。大きくお口開けててね」

「夏帆ちゃん、いいよ、痛くないからね〜。そのまま大きく開けててね」夏帆は虫歯を削られながら、〝はやく削るのが終わりますように！！〟と心の中で祈り、治療を受けている。

真希先生のドリルは、順調に夏帆の歯の虫歯に侵された部分を削っていき、徐々にドリルの先端は深さを増してゆく。削り始めて１分ほどが過ぎたろうか。夏帆は深く削っていくドリルが歯の中でおおきくなってゆくように感じ始めていたが、ついにチクッ、キーンとした痛みが走り出し、上顎から頬の上部へつき上げるような痛みを感じた。

〝い、痛っ！！　痛いっ！！　痛いっ！！　先生、そこは痛いよ！！〟思わず目から涙がポロポロと零れた。

「ふぅん、ふん、ふん、んん、んんぁ、んぁ、ぁ」

痛みに口を小さく閉じそうになる。

「夏帆ちゃん、お口閉じちゃダメ。大きく開けて」

「夏帆ちゃん、もうちょっとがまんしようね〜、痛くないから」と真希先生と紗季が交互に励ますが、さらに痛みは増してくる。

キュイーン、キュイ、キュイ、キュイイイイーン。

コォー、ココココォー。ジュ、ジュ、ジュッ。

「ふん、ふん、ふうぅーん、ふん」

「はぁーい、痛くない、痛くない」真希先生と紗季は励ますが、夏帆のむせぶ声はますます大きくなっていく。
「夏帆ちゃん、リラックス、リラックス、力抜いて〜」
　夏帆は削る痛みにからだが緊張している。治療の痛みから逃れようと口は小さく閉じそうになるが、真希先生はデンタルミラーで夏帆の唇を広げ、口は閉じられない。それではと、顔を動かし逃れようとすると、「お顔、もうすこし先生の方に向けてー」と真希先生が注意し、紗季は左手で夏帆の顎を持ち、真希先生の方へ夏帆の口を向けさせる。
　キュイーン、キュイーン。
　コォォォーー、コォーー。ジュポポポーー。
「ふん、ふぅん、あぁっ、えっ、えっ」
　夏帆は続く痛みに、ひざを曲げ、脚をあわせ、足の指はきつくユニットに押しつけている。がまんできなくなったのか、とうとう足をバタバタし始めた。
「うぅん、んん、ふん、ふん、んんぁ、エッ、エッ」
「夏帆ちゃん、危ないから動いちゃダメ〜」
「あともうすこしで終わるから。もうちょっとがまんしよ、ねっ」
　キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイイーン。
　キュイーン、キュィーン、キィィィーン、チュイーン。
　コォー、コォォォー。ジュッ、ジュッ、ジュポポポポーー。
「えっ、えっ」夏帆はついに泣きはじめ、紗季が抑えていた左手をすこしのスキに振りほどき、あげた。
　キュウウウーーーン。
　タービンが回転を止めた。夏帆の目にはいっぱい涙が溜まり、つぎからつぎへと溢れている。
　真希先生はタービンを持ったまま、「だいぶ、痛み、強い？」と優しい目で夏帆に聞く。夏帆は涙に濡れた目で頷く。夏帆はいま削っていた歯がジンジンと疼いている。
「そう。じゃあ、からだには負担になるけど、夏帆ちゃん、麻酔打とう

か」夏帆が頷くのを見ると、真希先生は、「紗季ちゃん、シンマお願い」といった。いったん、タービンがテーブルの元の位置に戻される。ユニットが起き上がる。
「ちょっと、お口ゆすごうか」夏帆がクチュクチュと口をゆすぐ。ゆすぎ終えると、ふたたびユニットが倒される。
　真希先生に指示をされた紗季は、麻酔液のカートリッジを注射器に装着し、「はい、先生」と手渡した。
　真希先生は、受け取った麻酔注射をひとまずトレイにおき、ピンセットを手にすると、夏帆の口の中からふくみ綿を取り出し、テーブルの上の汚物入れに捨てる。今度は、デンタルミラーと注射器を持ち、夏帆の右の唇をデンタルミラーで広げながら、麻酔注射を夏帆の口に挿入する。
「ちょっと、チクッとするわよー」
　夏帆の右の歯茎に注射針が刺さる。
「ううっ」
「はぁーい、ちょっとがまん、がまん」
　夏帆は、最初に針が刺さる痛みを感じたあと、つぎに麻酔の薬液が歯茎に浸潤するズンとした重い痛みを感じた。
「ふぅん、ふん」
「大丈夫よー。もうすこしがまんしてー」
　麻酔のカートリッジが空になり、すべての薬液が夏帆の歯茎に注入された。夏帆は、〝これで、削る痛みから解放される〟と思い、薄目を開けると、もう１本麻酔注射が紗季から真希先生に手渡されるのが見える。〝えっ、なんで。まだ麻酔打つの！？〟夏帆は麻酔注射の痛みのほかに、まだつづきそうな切削がさらに痛いものとなりそうな気配がしていっそう不安になる。
「夏帆ちゃん、もう１本打つわね」
　ふたたび、麻酔注射が夏帆の口に入り、さきほどとはすこし離れたところの右の歯茎に刺さる。最初の麻酔のせいか、針が刺さる痛みはさっきよりも小さかったが、麻酔液が注入される不快感はあいかわらず感じ、

思わず声が出る。
「ううっ」
「はいはい、もう終わりよ」
　２本の麻酔注射を打ち終えると、真希先生は、
「麻酔が効くまでしばらく待とうね」とワゴンの方に向かい、夏帆のカルテを書き始める。紗季がライトを消してくれる。夏帆は、〝麻酔打ったんだから、もう痛くないわよね。うん、きっと痛くない。‥‥‥でも〟と不安な気持ちを打ち消そうと思ったが、頭の中ではつぎつぎに痛みへの怖さが沸き上がってくる。
「もういいかな」と真希先生が夏帆の方に向き直った。ライトが点灯され、夏帆の口にあてられる。
　真希先生は､デンタルミラーの柄で夏帆の右下７番をコンコンと叩き、「痛い？」と聞いた。夏帆はぷるぷると首を横に振る。
「そう、効いたみたいね」
　真希先生は、ピンセットで新しいふくみ綿をつまみ、夏帆の右の歯茎と頬の間に挟んでふたたび治療スペースをつくった。次に、ドリルの先端にバーを新しいものに取り替えている。さっきのバーよりも鋭く痛そうなものに見える。〝えっ、さっきのよりも尖ってるっ！？　痛いのかなぁ‥‥‥。コワイよ〜〟夏帆は思った。またまたデンタルミラーとタービンを構えて、
「はい、大きくアーンしようね〜」と夏帆を促す。
「夏帆ちゃん、今度は大丈夫だよ。麻酔したから。痛くないから、お口大きくア〜ン」紗季もバキュームを構えていう。
　夏帆は、〝今度こそ、痛くありませんように！！　すぐ済みますように！！〟と祈りながら、目を閉じて口を開けた。すぐに紗季の持つバキュームが挿入される。
　コォー、コォー、コォォォォーーー。
　つづいて、真希先生の持つタービンが夏帆の口の中に挿入され、右下７番の虫歯にあてがわれる。ドリルが回転をはじめ、虫歯をバーが削り

出す。
　キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイイーン。
　コォー、コォォォー。ジュ、ジュ。
　キュ、キュ、キュイイイーーーン。チュイーン。
　キュイ、キュイ、キュイイイーーーン、キュィーン、キィーン。
　タンパク質の焦げる匂いがしてくる。３０秒ほど削っただろうか、夏帆はまたキーンとした鋭い痛みと上顎を突き抜けるような痛みを感じた。思わずむせび声を上げる。
「ふぅん、ふん、ふん」
「はぁーい、夏帆ちゃん、大丈夫だよー。もう少しがまんしようねー」紗季が励ます。
「ふん、ふん、んん、んんぁ」
〝痛いよ！！　痛いっ！！　痛っ！！　真希せんせー、紗季せんせー、もうやめて！！　夏帆、もう虫歯つくらないようにちゃんと歯磨きするからー。もう許してぇー〟夏帆は涙目で真希先生にうったえるが、削る治療はいっこうに止めてくれない。

　そのとき、愛美が診察室のドアを開けて中にはいってきた。
「愛美ちゃん、こっちの治療台に腰掛けてね」かすみがイエローの歯科ユニットを指す。右隣を見ると、この前、愛美が治療を受けたピンクのユニットでは夏帆が寝かされ、真希先生と紗季の治療を受け、虫歯を削られている最中だった。
　隣のユニットを見ながら、愛美は、〝夏帆、痛そうだなぁ‥‥‥。はぁ、今日も治療痛いのかなぁ‥‥‥。怖い‥‥‥〟と思いながら、歯科ユニットに座った。

　キュイーン、キュイーン、キュイ、キュイ、キュイイイイーン。
　キュイーン、キュイ、キュイ、チュイイイイーン。
　コォー。コォォォォー。ジュポポポポー。

「ふん、ふん、ふぅん、ふん、んぁ」
「お口閉じちゃダメよ〜」
「もうすこしがまんして〜。動いちゃダメ〜。虫歯つくっちゃったのは、夏帆ちゃんなんだから」
　キュイーン、キュイ、キュイ、キュイイイイーン。
「ふぅん、ふん、ふん」
　真希先生と紗季が励ましているが、夏帆はひざと足指を曲げ、身を捩りながら、必死で削る痛みに耐えている。ひっきりなしにむせぶ声がしている。
〝痛いっ！！　痛いっ！！　もう限界だよっ！！　許してー〟夏帆がふたたび左手をあげようとしたそのとき、
　キュイイイイーン。
とひときわ大きな音をたて、タービンが鳴りやんだ。
「はぁい、夏帆ちゃん。よくがんばったね。これで削るのは終わり。お口ゆすごうか」真希先生が笑顔でいう。
「夏帆ちゃん、痛いのによくがんばったよー」紗季もニッコリという。紗季はタオルで夏帆の涙を拭ってくれる。夏帆の目は真っ赤だ。ユニットが起き上がる。夏帆は口をゆすごうとするが、麻酔のためか、唇がしびれてうまくゆすげず、口の端から水が零れる。〝……うまくゆすげない……。恥ずかしい。それに高校生にもなって、虫歯の治療が痛くて泣いちゃうなんて……〟夏帆は恥ずかしさで赤くなる。
「夏帆ちゃん、そのままで聞いて。いま削った虫歯はかなり奥まで深く進行していて、神経近くまで進んでいたの。だから、削るのが長くなっちゃって、痛みもでたの。ごめんね。でもギリギリ神経にはいってなかったから、神経は取らなくて済むわ」
　夏帆は、神経を取らなくて済むということを聞いて少しホッとしていた。というのも中学２年の頃、右下の６歳臼歯のインレーが取れたのを放置していて痛み出し、神経の治療を受けたことがあるからだ。そのときは凄い痛みで、今日の治療以上に暴れて大泣きをした、という経験が

あるからだ。ふたたびユニットが倒れ始める。
「夏帆ちゃん、あともう少しがんばろうねー」と真希先生は、シリンジを手にした。シリンジで、夏帆の削った歯にエアーをシュッシュッとふきかける。次にピンク色の印象材をのせた型を紗季から受け取り、夏帆の右の上顎と下顎に噛ませた。
「しばらく、このまま、じっと噛んでいてね」とライトを消す。
　夏帆は、涙をハンドタオルでそっと拭き、左隣のユニットを見ると、愛美が治療を受けている。

　キュイーン、キュイ、キュイ、キュイイイイーン。
　コォー、コォォォォー。
　キュィーン、キィーン、チュイイイイーン。

〝愛美‥‥‥、私、痛かった‥‥‥。つらかったよ。‥‥‥愛美、がんばってね〟夏帆は心でそっとつぶやく。
　ライトが点灯される。
「もう、いいわ」しばらくすると、真希先生は夏帆の口から印象材を取り出し、紗季に渡す。夏帆の歯型がくっきりとついている。削った７番の歯の部分は凹型だが、印象材はちょうど反対の凹型を示している。
「もう一度、アーン」と真希先生は、夏帆の口を開けさせると、シリンジでエアーを削った歯にかけ、乾かした。次にテーブルの上のヨードグリセリンの入った茶色の小瓶に綿を巻きつけたブローチを浸し、夏帆の右下７番を消毒する。
「ううっー」
〝んっ、染みる！！〟夏帆は思わず身を捩る。
「大丈夫よー。もう少しがまんしてー」真希先生が励ます。
　真希先生はガーゼをホルマリントリクレゾールに浸し、夏帆の削った穴を入念に消毒して、ストッパーでセメントをとり、削った歯を仮封をした。

「はい、これで終わり！！　夏帆ちゃん、お疲れさまー」真希先生はペダルを踏んで、ユニットを起こしてくれる。「よーく、お口ゆすいでね」

夏帆は、〝はぁ〜。やっと、終わった……。それにしても、痛かった……。次のときの治療も痛いのかなぁ〜。やだなぁ〟と思いながら、唇の端から水を漏らしつつ、口をゆすいでいた。

ゆすぎ終えると、真希先生は、「夏帆ちゃん、次は今日削った歯にインレーを詰めるわね」といった。

夏帆は、「はい」と返事をする。夏帆の口の中にもいくつかインレーは詰められており、銀歯のことだと知っている。

「それから、左の前歯と左の小臼歯、５番の歯、の２本の虫歯なんだけど、次のときにできれば２本とも治療するわね。前歯の虫歯は小さいから、すぐ済むと思うけど、もしかすると、５番はちょっと深いかもしれないから、その場合はレジンでなくて、今日みたいにインレーになるから、その次もう１回来てもらわないといけないけど……。で、次回の治療は１週間後でいい？」

夏帆は、痛かった今日の治療を思い出し、もっとあとがいいと思ったが、治療を延ばす適当な理由も見つからず、しかたなしに、「はぃ」と小さく返事をする。

「時間は、今日ぐらいでいい？」

「……、クラブがあるので……、５時くらいじゃダメですか？」

「別にかまわないわ。じゃあ、１週間後の月曜日午後５時に予約しとくね。待ってるわね。お大事に」

「はい、夏帆ちゃん、エプロン外すねー」紗季がエプロンを外してくれる。紗季が整えてくれたスリッパを履こうとすると、治療した歯がズキズキと疼き、思わず顔をしかめる。〝あ痛たたたたー〟涙がにじむ。

ハンドタオルで右頬を押さえ、鼻を啜る。隣では愛美の治療が続いている。ライトが点灯され、愛美の座るユニットがふたたび倒れだしている。

「大丈夫？」紗季が心配そうに覗き込むが、夏帆は、

「大丈夫です」と気丈に答え、待合室へ通じるドアへ向かう。スクールバッグを荷物棚から取り出し、ドアを開けようとすると、紗季が「１週間後、待ってるから。お大事にね」と声をかけた。夏帆は軽く会釈をして、待合室に出ていった。

カチャッ。

夏帆が目を真っ赤にして、右頬をハンドタオルで押さえながら、待合室に出ていくと、愛美の妹の希美が待合室にいた。すぐに、希美にも呼び出しがかかる。

「若槻さぁーん、若槻希美ちゃぁーん」紗季が診察室のドアから呼びかける。

夏帆は過酷な治療で元気がなく、希美に声をかけるタイミングを失ってしまった。希美は何かいいたそうだったが、ハンドタオルと愛美と希美のふたり分のスクールバッグを持ち、夏帆を横目に診察室に入っていった。

〝希美ちゃん、ごめんね。声かけなくて。私、今日の治療痛くって……。ごめんね〟と心であやまり、ソファーにぐったりと腰掛ける。〝ふぅー、疲れた……。ぐすっ。痛かった〟

しばらくすると受付から「仲根さぁーん、仲根夏帆ちゃぁーん」と呼び出された。受付へ行き、会計を済ませる。やっと痛い治療から解放され、奥田歯科医院から出られる。

外へ出ると、クラブを終え、学校から帰る純姫の生徒たちが正門からそれぞれの帰り道を帰っていく。みんな友だちとおしゃべりをしながら、あるいはお菓子やアイスクリームを食べながら、楽しそうに歩いている。〝いいなぁー。みんなたのしそうだなぁ〜。私が痛い治療を受けているときも、みんなはおしゃべりやクラブなんかを楽しそうにしてたんだなぁ……。うらやましいな。それにひきかえ、私や愛美は……〟また

涙がにじんでくる。
〝ううん。がんばって、虫歯治せば、みんなと同じようにまた楽しい学校生活が待ってるんだもん。愛美、がんばろうね〟
　夏帆はいま治療を受けている愛美に、心の中でエールを送りながら、きびすを返し、家路へと急いだ……。

乙女のお悩み・番外編

もう歯医者さん行きたくないっ－由紀の場合

「相澤さぁーん、相澤由紀ちゃぁーん、診察室にお入り下さい」

衛生士の石原紗季が診察室のドアを開け、顔を出して母の彩夏といっしょにソファーにかけて待っていた由紀を呼んだ。由紀は学校帰りに母の彩夏に連れられて奥田歯科医院に来ていたので、紺の帽子、紺のブレザー（胸のところに校章のエンブレムの着いたポケットがついている）、白いブラウス、紺のプリーツスカートに白のハイソックスの制服姿だった。帽子は脱いで彩夏が手に持っている。彩夏と由紀の間には由紀の赤いランドセル。由紀は天使の輪が光るキューティクルのきれいな黒い髪をもち、ふっくらした卵型の顔のかわいい女の子である。由紀には５歳上の高校生の姉の由佳がいる。由佳もまた由紀と同じくかわいい女の子である。ふたりとも母の彩夏の自慢の娘でもある。

「ママー……」由紀はつぶらな瞳を母の彩夏にむけ、不安そうな表情でうったえる。「コワいから、ついてきて……」

「なにいってんの。もう６年生のお姉ちゃんでしょ。大丈夫だから……。先生、やさしく治療してくれるから、ねっ。いってらっしゃい」彩夏は優しくほほえんで、由紀の目をみる。

由紀はしかたなしに、「うん……」と彩夏に返事をして立ち上がる。

「はい、これ持って」と彩夏は由紀にハンドタオルを渡してくれる。由紀はハンドタオルを受け取り、元気なく診察室のドアのところで待つ紗季のところへ歩いていく。紗季は、由紀の肩に手をまわし、

「はい、由紀ちゃん、あっちに行こうね。大丈夫、あっ、っていうまに治療終わっちゃうよ。ねっ。心配しないで」と由紀を励ましながら、ふたりは診察室のドアの中に入っていった。

相澤由紀は皓歯大学教育学部附属小学校に通う６年生である。皓歯大学は、歯学部と教育学部の２学部をもつ大学であり、教育学部には附属

の幼稚園、小学校、中学校、高等学校が併設されているこの町の名門校である。由紀もそんな学校に通うひとりであるから、当然良家の女の子である。

さて今日は６月３日。６月４日の『虫歯予防デー』から始まる『歯の衛生週間』を前にして、歯科検診が行われる日だ。皓大附属小学校は１時間目から２時間目が歯科検診となり、授業はお休みである。皓大附属小学校の歯科検診は、毎年歯学部附属病院の助教授たちが歯学部の学生や歯学部附属歯科衛生士専門学校の学生を引き連れて、実習をかねて行っている。

由紀は、クラスメイトとともに担任の清水あかね先生に連れられて、歯科検診の会場である保健室に向かっていた。由紀は歯科検診を前にして胸がドキドキしていた。〝はぁ、虫歯あったらどうしょ……〟

由紀は甘い物が好きで、歯磨きは嫌い、そのせいで小さい頃から虫歯が多く、よく歯が痛いと泣いていた。歯医者で痛い治療を受けたこともたびたびである。昨年も歯科検診で虫歯が見つかり、治療に通ったが、痛くて怖くて大泣きした。そう、由紀はすっかり歯医者嫌いになっていたのだ。

「はい、次、相澤由紀さん、こちらにかけてね」と歯科医の横にいる助手が由紀に声をかけ、椅子にすわらせる。

〝いよいよだぁー。はぁー、ドキドキする〟そう思いながら、由紀はそっと腰をかけた。

「えっーと、相澤由紀ちゃんだね。よろしくね。じゃあ、大きくお口開けてくれるかなー」今年の担当医の佐和島助教授は、やさしくいって、由紀の口に探針とデンタルミラーを近づけてくる。銀色に光るデンタルミラーを目にすると、由紀は今まで受けたことのある痛かった治療を思い出し、恐怖感がつのったが、佐和島は再度やさしく、

「こわくないよー。診るだけだから。だから、ねっ、お口開けてアーン」と促す。由紀はしかたなく、口を開けた。

「はーい、左上から行きます。７番ＣＯ、６番○、５番から右の３番まで斜線、４番Ｃ２、５番斜線、６番○、７番斜線。次、左下いって、７番Ｃ２、６番○、５番から右の４番まで斜線、５番Ｃ２、６番○、７番Ｃ１。以上です」助手は由紀の歯式を検診票に記入している。由紀は、Ｃ２‥‥‥とかいう佐和島の声を聞いて、〝はぁぁ〜、また虫歯あった‥‥‥。歯磨きしてるのに、どうして‥‥‥〟と口を開けたまま、心でべそをかきながら思った。けれども由紀の歯磨きは朝起きたときと夜寝る前にさーっと１分ぐらいで済ませてしまうものだった。どうかすると、夜の歯磨きはしないこともたびたびだった。

「由紀ちゃん」と佐和島はやさしい笑顔で由紀に呼びかけ、「ちゃんと歯磨きしてる？　磨き残しがあるよ」と再び由紀の口の中に探針を入れ、歯垢をかきだしてみた。「ほら、このモヤモヤしたものが歯の汚れなんだよ。保健の先生が歯磨きの仕方を教えてくれるから、磨き方を教えてもらってちゃんと歯を磨いてね」

「はぃ」由紀は恥ずかしさと虫歯があったことで、消え入りそうな返事をし、椅子から立った‥‥‥。

１週間後、由紀は、虫歯のあったクラスメイトとともに、担任の清水あかね先生から『虫歯治療のお勧め』を渡された。その上、虫歯のあった生徒は、あかね先生から親に電話連絡があり、こうして由紀も、嫌々ながら母の彩夏に奥田歯科医院に連れて来られたのだった。

診察室にはいると、歯科ユニットが４台並んでいた。紗季は由紀を右から３番目のイエローのユニットに連れて行き、

「由紀ちゃん、ここに座ってくれる？」と由紀を腰掛けさせる。

由紀はスリッパを脱いで、不安そうな気持ちのままユニットに座る。

「由紀ちゃん、汚れるといけないから、上着脱ごうねー」と紗季は、由紀の紺のブレザーを脱がし、ハンガーに掛ける。紗季は白のブラウス姿

になった由紀に、すかさず水色の歯科エプロンをつけた。
　由紀は胸につけられたエプロンを見て、〝はぁ〜、また削られる……〟と泣きたい気持ちになる。ユニットに腰掛け、エプロンをつけられただけで、歯を削る痛みを思い出してしまう。
「由紀ちゃん、先生を呼んでくるから、待っててね」紗季は真希先生を呼びに行く。由紀の視線の先には、ライトと由紀の一番嫌いな歯を削るタービンの類がたくさん並んでいる。〝ああん、どうしよう……。痛いのやだなぁ……。ママーっ！！　コワイよー〟思わず涙が溢れそうになる。そのとき背後から、やさしそうな声が聞こえた。
「由紀ちゃん、こんにちわー」と真希先生は歯科医用のいすに腰掛けた。
「由紀ちゃん、私は奥田真希といいます。由紀ちゃんの虫歯をやっつける歯医者の先生よ。よろしくね。こっちは先生といっしょに由紀ちゃんの虫歯を退治するのを手伝ってくれる歯科衛生士のお姉さんの石原紗季ちゃん」
「由紀ちゃん、石原紗季です。由紀ちゃんの虫歯をやっつけてキレイな歯にするお手伝いをします。よろしくね」紗季はにっこりと微笑み、由紀の不安を取り除こうとする。
「よろしくお願いします……」語尾が消え入りそうになりながらも、由紀はぺこりを頭を下げ、あいさつをする。
「そんなに心配しなくて大丈夫！！　真希先生は、治療、とっても上手だから、あっというまに終わっちゃうよ。だからそんな顔しないで。ねっ！　由紀ちゃん」紗季が励ます。
　真希先生は、由紀が学校からもらってきた『虫歯治療のお勧め』と彩夏が由紀に聞き取りながら記入した問診票を眺めていたが、由紀に向き直り、「由紀ちゃん、じゃあ、お口の中診ていこっか！　いす倒すわねー」といいながら、ユニットのペダルを踏んだ。ユニットが倒れていく。おとなにあわせたユニットは由紀にとっては少し大きい。
「由紀ちゃん、少し上にずれてくれるかなー」真希先生は由紀にヘッドレストに頭が来るように指示する。

「はぁーい、由紀ちゃん、頭をここにのせようねー。はい、その調子、その調子」紗季が手伝って、由紀の頭がヘッドレストにのるようにした。由紀の口元が真希先生の手元に近付く。すかさず、紗季がライトを点灯する。由紀はまたもや不安な気持ちがわき上がってきた。

「由紀ちゃん、お口大きく開けてアーン」と真希先生は探針とデンタルミラーをもって、由紀に口を開けるように促す。

　由紀はしかたなくふと口を開けた。真希先生の探針とデンタルミラーが由紀の口の中にはいる。

「左上から行きます。紗季ちゃん、カルテをお願いね」

「はい、先生」

「７番ＣＯ、要観察歯ね。６番○、５番から右の３番まで斜線、４番Ｃ２、５番斜線、６番○、７番斜線。次、左下いって、７ばん……」とここで真希先生はカリカリと探針を使った。由紀は痛くはなかったが、思わず顔をしかめる。「ううっ」

「うーん、生えたてなんだけど……、７番、もうＣ２ね……。６番○、５番から右の４番まで斜線、５番Ｃ２、６番○、７番」ここでも再び探針が使われ、由紀は今度はチクチクとした痛みを感じ、再び顔をしかめる。「７番Ｃ２ね。以上よ」

「由紀ちゃん、ちゃんと歯磨きしてる？　由紀ちゃんの一番奥の歯は最近生えたとこじゃない？」

　由紀はこくんと頷く。

「そうねー。生えてまだ４ヶ月くらいってとこかなぁー。上の一番奥歯はまだ生えてる最中だし……」と真希先生は、「それなのに、もう虫歯になっちゃってるのが下の２本、なりかけてるのが上の１本、と３本もあるよ。生えたての歯は気をつけないと、あっというまに虫歯になっちゃうの。それに由紀ちゃん、磨き残しの歯垢も歯にいっぱいついてるよ」と由紀に諭す。

　由紀は、真希先生に注意されて、恥ずかしさと叱られたこととふたつの感情で涙目になっている。

「あらあら、そんな顔しないで。まあー、なっちゃったものはしかたないから、これから気をつければいいのよ。今はちゃんと虫歯を治すこと。いい？」

「くすん、はい」由紀はひとつ鼻を啜り、返事をする。

「いい子ねー。今回の治療終わったら、ここにいる紗季お姉さんに歯磨きの仕方を教えてもらってね。虫歯になりかけている左上の７番はちゃんと歯磨きすれば、再石灰化っていってね、治るのよ。歯自身が虫歯をやっつけちゃうの。キシリトール入りのガムなんかも歯にいいから噛むといいわ」

「由紀ちゃん、きれいに磨ける秘密を教えてあげる。だから、治療がんばろうね！」紗季が笑顔で励ます。

「じゃあ、治療始めよっか。由紀ちゃんの虫歯はそんなにひどいのはないから、麻酔はせずに、治していくわねー」

　由紀は麻酔なしと聞いて、少しホッとしていた。由紀は、痛い麻酔注射が大嫌いなのだ。昨年別の歯医者で治療を受けたときは、何本も麻酔注射を打たれ、そのたびにワンワンと大泣きした。

　真希先生は、アームレストからのびたテーブルの上にあるバーチャージャーからバーを選び、タービンの先にあるエアタービンに装着する。由紀の左では、紗季がバキュームを構えている。ライトが由紀の口にあわせられる。

「由紀ちゃん、今日はちょっと虫歯が進んでいる右側の一番奥の虫歯を治すわね。はい、お口開けてくれる？」真希先生はピンセットにふくみ綿をもって構えている。

　由紀は、〝いよいよ、始まる〜。痛くないかなぁ〜。泣いちゃわないかなぁ〜。泣いちゃうと、恥ずかしいし……〟と複雑な気持ちでいた。

「どうしたの？　はい、アーン」

「由紀ちゃん、大丈夫だよ。お口大きく開けようね〜」紗季が促す。

　由紀は目を閉じ、口を開けた。

　真希先生のデンタルミラーとふくみ綿をつまんだピンセットがはいる。

真希先生は、由紀の右頬をデンタルミラーで広げ、右側の歯茎と頬のあいだにふくみ綿をふくませ、治療のスペースを確保した。次にピンセットをタービンに持ち替え、

「はい、そのまま大きくアーンしよ」という。

「痛くないからねぇ〜。大きくアーンしようね〜」紗季がやさしくいう。

「もし痛かったら、左手を挙げてね。そしたら、すぐ治療止めるからー」真希先生も由紀の不安を打ち消すようにやさしくいう。

〝あぁん、コワイよー。ママー〟由紀は、叫びたくなるような不安感をこらえて、ふと口を開ける。

　由紀の口の中に、紗季の持つバキュームが挿入される。

　コォー、コォォォー。

　続いて、真希先生の持つデンタルミラーとタービンが由紀の口に入り、由紀のう蝕した右下７番の歯にあてがわれた。すぐにドリルが回転を始め、由紀の虫歯を削り始める。

　キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイイーン。

　コォー、コォォォォーーーー。

　キュ、キュ、キュイ、キュイ、キュイイイイーーーーン。

　キュイ、キュイ、キュイーーン。チュイーン。

　キューン、キュィーン。

　コォォォーー、コォーー。ジュッ、ジュッ、ジュポポポポーーーー。

「はぁーい、由紀ちゃん、その調子だよぉー。おっきくお口開けててねー」紗季がバキュームを使い、唾液を吸入しながら、由紀をほめる。

　キュイーン、キュウウウーーーン。

　１分足らずの時間が過ぎ、ドリルが削るのを止める。〝えっ、ラッキー！！　もう削るの終わり！？　よかったぁー〟由紀はタービンが口から出されたので、ユニットが起き上がり、口をゆすがしてもらえるだろうと思った。

　しかし、ユニットは起き上がらす、バキュームも依然口の中から出してもらえない。

コォー、コォォォー。

〝なんで、いす起こしてくれないの！？　なんで、器械お口からだしてくれないの！？〟不安になった由紀が真希先生の方を見ると、真希先生は、ドリルの先端のバーを違うものに取り替える作業をしている。なんだか、いま削るのに使っていたものよりも痛そうなものに取り替えているよう見える。

〝はぁ〜……。削るのまだ終わりじゃないんだ……。はぁ、いやだなぁー〟由紀は切削がまだ終わりじゃないことに気づいて気持ちがふたたび重くなる。

「はい、アーン」真希先生がバーを付け替えたタービンとデンタルミラーを持って、由紀の口に挿入する。

「由紀ちゃぁーん、あともうほんのちょっとだからねー。もうちょっと、がまんしようねー。痛くないからねぇ〜。もう一度大きくアーンしようね〜」紗季が笑顔で由紀にいう。

〝神様、お願い！！　今度こそ、削るのすぐに終わりますように！！〟由紀は祈るような気持ちで、目を閉じ、口を開けた。

ふたたび由紀の虫歯をドリルが削り始める。

キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイイーン。

コォォォーー、コォーー。ジュポポポーー。

キュイーン、キュイ、キュイ、キュイーーーーン。

削り始めてから、１分ほど経ったろうか……。ドリルの先端が徐々に深さを増していった頃、由紀は削る振動のほかに、痛みを感じ始めていた。そしてさらに３０秒ほど過ぎた頃、キーンとした鋭い痛みを感じ、思わず身を動かし、声を上げた。さっきとは比較にならないほど痛い。〝真希先生、そこ痛いっ！！　痛いよっ！！　もうやめて！！〟由紀は左手を挙げる。

「ふぅん、ふん、ふん、あぁん」

「はい、大丈夫、大丈夫、もうちょっとがまんしようねー」真希先生は、削るのを止めてくれない。

キュイーン、キュイーン。
「由紀ちゃん、いま虫歯さんが由紀ちゃんの歯から逃げ出そうとしてるんだよー。痛くない、痛くない。もうちょっとがまんしようねー」紗季が励ます。しかし痛みは増すばかり。
「んんっ、ふん、ふん、くすん」
「エッ､エッ」由紀は止まらない虫歯を削る痛みに泣き出してしまった。
キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイイーン。
キュ、キュ、キュイイイーーーン。チュイーン。
コォォォーー、コォーー。ジュッ、ジュ、ジュポポポポーーーー。
キュイーン、キュィーン、キューン、キュイイイイーン。
「ふぅん、ふん、ふん、えっ、えっ」
〝痛いよ痛いよ、すごい痛いよ！　痛いっ痛いっ痛いーっ！！　毎日歯磨きするからっー！！　もう許してえー！！痛ぁーぃ！！〟
キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイイーン。
コォー、コォォォー。ジュポポポーー。
「えっ、えっ、んん、えっ、えっ」
〝真希先生、紗季先生のうそつき！！　なんで、痛いのに削るの止めてくれないの！？〟
「由紀ちゃぁーん､ホントあともう少しだよ！！　痛くない､痛くない。がんばって」紗季が由紀を励ます。
キュイーン、キュイ、キュイ、キュイイイイーーーーン。
コォォォーー、コォーー。ジュッ、ジュ、ジュポポポポーーーー。

カチャッ。
そのとき虫歯の治療を受けるために、純姫女子中学の制服を着た女の子が診察室に入ってきて、〝はぁ……。あの子泣いてる……。治療、痛いのかなぁ〟憂鬱そうな顔で考えていると、由紀が治療を受けているイエローのユニットからひとつ離れたいちばん右のブルーのユニットに案内されていった。

キュイーン、キュイ、キュイ、キュイイイイーン。
コォー、コォオオオー。
「ふん、ふん、ふぅん、ん」
「はぁーい、由紀ちゃん、もう少しがんばってー。痛くない、痛くない。がまんしてー」
「もう少しだよー。足バタバタしないでー」真希先生と紗季が由紀を励ましながら治療している。診察室の中で聞くタービンの音はいちだんと大きく、余計に生々しく聞こえる。
「ふぅん、ふん、んん、んぁ」
キュイーン、キュイーン、チュイイイイーン。
コォー。ジュポー、ジュポポポポー。
「由紀ちゃん、大丈夫だよー。痛くないからねー」由紀は、からだを捩り、足をバタバタして、がまんしているが、虫歯を削る治療の痛みにすでに大泣きしている。
〝真希せんせー、紗季せんせー。痛いよ、痛いよ、すごく痛いよっー！！もうやめてぇー！！　もうゆるしてぇー！！　ちゃんと毎日歯磨きするからーっ！！　エッ、エッ、エーーン、エーン、痛いっー！！〟
「エッエッエッ。ウワーン、ワーーン」
由紀は、削る痛みで足をバタバタ動かしているため、紺のスカートは全開して捲れ、かわいい白パンツは丸見えになっている。
「エッ、エッ。ひあは、ひあは、ひぃひゅひへー」
「由紀ちゃん、足バタバタしないでー。恥ずかしいんだー。パンツみえちゃてる、はずかしいなあ治療中は、おとなしくしようね」紗季は、由紀にやさしく注意する。
「エッ、エッ、エッ」
〝痛いよぉぉぉぉー、エッ、エッ、痛いよぉぉぉ。やだやだ！！〟
キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイイーン。
コォー、コォオオー。ジュポポポーー。
キュイイイイーーーーーン。

ひときわ大きな音を立てて、タービンが止まった。ユニットが起き上がる。

「由紀ちゃん、よくがんばったねー。お口ゆすごうか」真希先生は、「由紀ちゃんの虫歯ねー、中でおっきくなってたんだよー。だから削るの長くなっちゃたの。ちょっと痛かったでしょ。ごめんね」

「ヒック、ヒック」由紀はすすり上げながら、口をゆすいでいる。〝ちょっとじゃないよ！！　すごく痛かったよ！！〟由紀は涙に濡れた目で思った。

「由紀ちゃん、治療がんばったから、虫歯さん、由紀ちゃんの歯から逃げ出しちゃったよ」紗季もやさしくいう。

紗季は由紀の涙をタオルで拭いてくれる。

〝真希先生、紗季先生のうそつき！！　左手挙げたら、治療止めるっていったじゃない！！　……でも、歯磨きしなくて、虫歯つくっちゃったの、由紀だし……〟由紀は、削るのを止めてくれなかったことと治療の痛さと自分に対する後悔で気持ちがない交ぜになっていた。

由紀が口をゆすぎ終わると、ユニットが再び、倒される。

「由紀ちゃん、お口開けてねー。ア〜ン」

真希先生は、シリンジを持ち、削られて凹型にきれいに形成された由紀の歯に、エアーをシュッ、シュッと吹きかけた。次に、ピンク色の印象材を塗った型を、由紀の下顎と上顎に噛ませる。

「由紀ちゃん、このまま少し噛んでてねー」ライトが消される。真希先生は、由紀のカルテを記入している。

由紀は、〝まだまだ、治療続くのかなぁ……。もう、ヤダよっ〟と涙目で思っていた。

「もう、いいかなー」真希先生が由紀の方に向き直り、ふたたびライトが点けられる。

由紀が口を開けると、真希先生は由紀の口の中から印象材を取り出した。由紀の歯型がくっきりとついている。下顎の型は、削った右下７番の歯のところがちょうど反対の凹型になっていた。

「はい、もう一度アーン」と真希先生がいうので、由紀はまた削られるのかと憂鬱な表情になったが、しかたなく口を開けた。

真希先生は、ふたたびシリンジでエアーをかけ、由紀の歯を乾かすと、テーブルの上にあるヨードグリセリンの薬液のはいっている濃青色の小瓶にガーゼをつけ、由紀の虫歯の削った穴を消毒する。それから、紗季からねられたセメントを受け取ると、ストッパーで削った穴にセメントを詰め、仮封をした。

「はぁーい〜。由紀ちゃん、今日はこれでおしまい！！　よくがんばったねー。えらいよー」

「由紀ちゃん、えらい、えらいよー。よくがまんしたねー。さすが、６年生のお姉ちゃんだなー」真希先生と紗季が交互にほめてくれる。だが、由紀はまだ削った歯がズキンズキンと痛み、知らず知らず目に涙が浮かんでくる。

「由紀ちゃん、次は１週間後の月曜日に来てくれるかなー。時間は今日と同じね。いい？」

由紀は涙をためた目で、うんと頷いた。

「……次の治療は、今日削ったところに銀を詰めて、あと１本治療しようね……。そうねー、今日と反対側の左下の一番奥歯を治すわ。それから今日治療したところは、ちょっと深く削らなきゃならなかったから、今夜痛むといけないから、痛み止めのお薬を出しておくわね。お母さんに受付で渡してもらいますから、ねっ。じゃあ、由紀ちゃん、１週間後ね。待ってるからね」

由紀は、〝まだ、虫歯、治さなきゃいけないんだ〜。……はぁ、やだなぁ〜。もう、キィーンって削るのやだよ〟と思い、また目が涙に濡れてくる。

「由紀ちゃん、エプロンとるねー」紗季が由紀の胸から水色の歯科エプロンを外し、スリッパを整えてくれる。

「せんせぃ……、あ、くすん、ありがとぅございました……」由紀が涙まじりに小さくお礼をいった。

「いいのよ、お礼なんて。由紀ちゃん、バイバイ。お大事にね。紗季ちゃん、ドアまで送ってあげて」真希先生がいう。
「はい、先生。……由紀ちゃん、行こうか」紗季が由紀の肩に手を回し、いたわるように診察室のドアのところまで連れて行ってくれた。
「由紀ちゃん、また１週間後ねっ。お大事に。バイバイ」紗季が明るく送ってくれる。由紀は涙目でドアノブを回した。

カチャ。

診察室のドアが開き、由紀が治療を終えて出てきた。由紀は母の彩夏をみると、安心したのか、みるみる涙が溢れだし、泣きながら、
「エッ、エッ、ママー、うわーん、痛かったぁ〜」とソファーで待っている母の彩夏のところへかけよる。
「由紀ちゃん、よくがんばったねー。泣かない、泣かない」彩夏が慰めている。

その光景を見ていた純姫女子高校の制服を着た女の子は、不安そうな表情をしていたが、すぐに歯科衛生士の紗季が顔を出し、その女の子を診察室に呼んだ。
「仲根さぁーん、仲根夏帆さぁーん、診察室にお入りください」

仲根夏帆と呼ばれた女の子は沈んだ表情のまま、スクールバッグを持ち診察室に入っていた。

由紀は、「エッ、エッ、痛いよー、痛かったよー。エーン、エーン、まだズキズキするぅ〜」と泣きやまない。
「由紀ちゃん、もう泣かないの。虫歯つくっちゃった由紀ちゃんが悪いんでしょ。これからは甘い物を食べ過ぎちゃダメよ。歯磨きもちゃんとしなきゃダメよ。ママと約束ね。じゃないと、また虫歯ができて、痛い、痛いと泣かなくちゃなんないよ」彩夏が由紀を慰めながら、やさしく諭す。
「ママー、ママー。由紀、約束する〜。ちゃんと歯磨きして虫歯にならないようにする〜。エッ、エッ」由紀が泣きながら彩夏と約束する。

「相澤さぁーん、相澤由紀ちゃぁーん」と受付から由紀を呼び出す声がした。
「はぁーい、由紀ちゃん、ここで待っててね」彩夏が受付に行き、会計を済ませ、由紀の痛み止めの薬をもらって、戻ってくる。
「由紀ちゃん、もう泣きやんで。さっ、帰ろ」
「うん」
　由紀は、彩夏に手を引かれ、奥田歯科医院のドアを出た。由紀は治療から解放されて、すこしホッとしたが、次の治療のことを考えると、たちまち憂鬱になる……。

　後日のこと……。
　今回の治療が終わってから、由紀はますます歯医者恐怖症になり、虫歯が痛くても、痛み止めの薬を飲んでがまんし、歯医者に行かないようになってしまった。それから高校１年になるまで、歯科受診をすることはなかった。
　しかし姉の由佳が、由紀が高校１年の時に、歯科衛生士になって「お姉ちゃんの勤める歯医者さんにおいで」といわれて、小学校６年生以来の虫歯治療を受けることになる。
　由紀は、そのときの治療もまた痛くて「ピクン、ピクン」として泣くのをがまんしていたが、姉の由佳に「由紀、大丈夫？　がまん出来なかったら泣いてもイイよ」って言われた瞬間「うわぁ〜ん。お姉ちゃんコワいよ〜」と大泣きすることになる。そして、由紀は "ちゃんと歯磨きしてたら、こんな痛くて、怖い思いしなかったのに" とまたもや後悔することになり、歯医者さん行くたび泣くのだった。

恥ずかしい－奈菜の場合

星井奈菜は、スレンダーな美女で、スタイルもよく、パンツルックがよく似合う。髪はセミロングでさらさら。奈菜は純姫女子短期大学の２年生である。昨春に純姫女子短大に合格し、この町にやって来たのだ。

今年の４月２５日、奈菜は学校のバイト案内で見つけた、純姫女子学園の高等部と中等部の歯科指導補助のアルバイトに出かけ、そこで歯垢染め出しとブラッシング指導の手伝いのバイトをした。

そのとき、高等部と中等部の女生徒の歯科検診票の整理も手伝ったのだが、若槻愛美、若槻希美、仲根夏帆、富田芽以、堀北結衣の歯式を目にして、のちの自分のことは棚に上げ、

〝なにこれ～‥‥‥。虫歯だらけじゃない。ちゃんと歯磨きしてないんじゃない？　その点、私なんか表彰されたこともあるのよ‥‥‥〟と思っていた。奈菜の奥歯に痛みが走り、すべての治療が終わってみると、奥歯全滅、銀歯ギラギラの口腔内になってしまうとも知らずに‥‥‥。

「ふうっ。ただいまー」星井奈菜は、女性専用のワンルームマンションの自分の部屋のドアを開ける。少し酔っている。時刻は午後９時３０分過ぎ。鍵を掛け、トートバッグをリビングに置き、キッチンスペースに向かう。可愛い赤の小さな冷蔵庫を開け、ミネラルウォーターのペットボトルを取り出す。キッチンの洗いカゴの中からコップを取り出し、水をついでゴクゴクと一気に飲んだ。

「はあ～っ。今日は楽しかったなあ～」

そう、奈菜は合コンの帰りだった。今日は日曜日だが待ち合わせをして、奈菜を含め友だち４人とこの町の名門大学である皓歯大学歯学部の４年生から５年生の４人とで、合同コンパをしたのである。合コンは大いに盛り上がり、意気投合し、二次会まで楽しみ帰ってきたところというわけだ。

「七瀬君、カッコよかったなあ〜」奈菜は、皓歯大５年生の七瀬と特に話が合い、ちょっと胸がドキドキしていた。「また、連絡してくれるっていってたけど‥‥‥」お互いに携帯の番号、アドレスを交換していた。

「奈菜ちゃん、キレイな歯してるね」
「えっ、‥‥‥ありがとう」奈菜は自慢の歯を七瀬がほめてくれたことがうれしかった。

「はあ〜。七瀬君、いいなあ〜」と思いながら、リビングのテーブルにつっぷして、奈菜は眠ってしまった‥‥‥。

奈菜は夢を見ていた‥‥‥。
幼い頃、奈菜は甘やかされて育ったため、大好物の甘い物をダラダラと食べ、その結果虫歯が多く、いつも歯が痛いと泣いており、歯医者さんの痛い治療を受けていた。けれども、永久歯が生える頃、通っていた歯医者さんに徹底的に歯磨きと虫歯予防を母娘ともども教えられ、おかげで小学校、中学校と虫歯がなく、先生にほめられ、６年生の時は表彰も受けた。
「はーい、みんな席についてー」と担任の川村先生がいう。手にプリントされた用紙をたくさん持っている。
「今日は、このあいだあった歯科検診の結果をくばりまーす」
「えっーーー」
「はーい、みんな静かに。紙をもらった人は虫歯があった人ですから、歯医者さんに行ってちゃんと虫歯を治すこと。いいですね」
「はーーーい」
「じゃあ、まず‥‥‥。はーい、これでおしまい。それから、ひとつみんなに報告があります。星井奈菜さん、前へ出てきてください」川村先生に呼ばれて、奈菜は教壇に行った。

「えー、みなさん、星井奈菜さんは虫歯も治した歯も１本もなく、とてもキレイな歯なので、今度表彰されることになりました。はい、みんなで拍手しましょう」パチ、パチ、パチと教室から拍手が起こり、「いいなあ」「すごい」という声がクラスメイトからあがる。奈菜はちょっとほこらしく、ちょっと恥ずかしい。

「奈菜さんも小さいときは、虫歯があって歯医者さんにいってたんだけど、一生懸命努力して、おとなの歯が生えてからは１本も虫歯にしていません。だから、みんなも歯磨きをちゃんとして、虫歯にならないようにしましょう。わかりましたね？」

「はーーーい」……。

それからも奈菜は、高校生になっても歯医者に治療を受けに行くことはなかった。けれども、朝、晩、食事ごと、おやつごとに行っていた歯磨き、３ヶ月ごとの歯科の定期検診は、高校２年の後半ころ、すなわち受験勉強が忙しくなるころからおろそかになり、ついに高校３年の歯科検診では、ＣＯの要観察歯が何本かできてしまった。だが、一度怠け癖がつくと、なかなか習慣は戻らず、歯磨きは朝起きたときと夜寝るときくらい、それもときどき怠けてしまう、歯科の定期検診はサボり、という有様だった。

純姫女子短大に入学して、ひとり暮らしをはじめてからは、授業の他にもチアリーディングサークルに所属してのサークル活動、飲み会、合コンと忙しい日々を送り、最近は飲み会や合コンにいって、住んでいる女性専用のワンルームマンションに戻ってきたときは、ほとんど歯磨きせずに寝てしまう、また、授業で出された課題レポートなどをマンションの部屋でするときは､頭の栄養補給と称して､甘いお菓子やジュース、ココアなどを飲食しながら、仕上げ、そのまま歯磨きせずに寝てしまうこともしばしばというように、いっそう歯を磨かなくなってしまっていた。そんな日々が続き、短大１年の半ば頃から、奥歯がちょくちょく染みるようになっていたが、虫歯じゃない、気のせいとそのままにしていた。

今日の合コンも「乾杯！！」とライム入りのチューハイを一口飲んだ瞬間、ツーンと染みて、顔をしかめた。隣で絵梨が「どうしたの？　大丈夫？」と聞いてくれたが、「なんでもない」と笑顔で首を振ったのだった……。

奈菜は、ハッと目が覚めた。なにやら、左の奥歯に違和感がある。〝もしかして、虫歯！？……。ううん、きっと気のせいよ……。だって、シーラントもしてあるんだし……〟奈菜の奥歯は、昔歯医者でシーラントをしてもらってあるのだ。時計をみると、午後１１時を指している。

〝あっ、いけない！！　栄養学のレポート、提出明日だ。書かなきゃ……〟本箱から、『栄養学概論』と参考書を取り出し、テーブルに広げる。トートバックから栄養学のノート、レポート用紙とボールペンを出し、宿題を始める。奥歯の違和感は続いている。ウトウトと眠気が襲う。キッチンに立ち、電子レンジでミルクを暖め、コーヒーとたっぷりのお砂糖を入れる。あと、スナック菓子とチョコレートもテーブルに持っていく。

〝さあー。がんばるぞー〟

スナック菓子を口に入れ、チョコレートを頬張り、コーヒーを飲んだときに、ガリッという感触とともに奥歯に激痛が走った。ズキン、ズキン、耐えられない痛さ。

〝ん、もうっ。なんでこんなときに歯が痛み出すのよっ！〟自分の歯に八つ当たりする。

〝やっぱり、虫歯かなぁ〜。そうだ！　鏡、見てみよ〟とトートバッグから手鏡を取り出し、口を開けて、左の奥歯を見る。

〝うわー、どうしょ！！　おっきな穴が開いてる……〟奈菜の左下の６歳臼歯は、噛んだ衝撃で、天蓋をかろうじておおっていたエナメル質が壊れ、真っ黒な穴が開いていた。なかの象牙質は虫歯で侵されて、空

洞になっている。その後の７番、鏡を反対の右に向けても６番、７番、いや、奥歯のすべての溝が黒茶色に変色している。
〝えーっ！！　そんな！！　歯医者行かなきゃ……〟
〝うーーーんっ、痛いっ！！　そうだっ！！　確か痛み止めがあったはず……〟ベッドサイドの小物入れの中を必死で探す。
〝あったっ！！〟キッチンに行き、水道からコップに水を汲み、痛み止めを２錠口に含み、流し込む。
「ううっ！！」虫歯に水が染みる。冷蔵庫からアイスノンを出し、タオルでくるんで、頬を冷やすが痛みは一向に収まらない。
〝ん、もうっ！！　なによっ！！　ちっとも効かないじゃないっ！！〟
　しかたなしにレポートはあきらめ、ベッドに入り眠ろうとするが、ズキン、ズキンと痛み、眠ろうにも眠れない。奈菜は明日一番で歯医者に行こうと決心し、なんとか眠ろうとする。悶々として明け方を迎えるころ、ウトウトとした……。

　奈菜がハッと気づくと、午後２時近くになっていた。歯の痛みとのたたかいに疲れようやく眠れたようだ。痛み止めの効用もあったのだろう。けれども目が覚めたとたんに、ズキン、ズキンと痛み出す。
〝歯医者行かなきゃ……。でもどこに……〟
〝そうだ、確か学校の近くに、奥田歯科医院というのが去年の秋にできたはず……〟電話案内に携帯で番号を聞く。
「あっ、もしもし、１０４ですか？　奥田歯科医院の番号を教えてください……えっ、どちらのって……」
〝もうっ！！　こんなに痛いのになんで聞き返すのよっ！！〟ほとんど八つ当たりである。〝ええーっと、学校の近くだから、きっと同じ住所よね……〟と学生証を見る。
「〇〇市〇〇町の奥田歯科医院です……はい、はい……」奈菜は歯が痛いのに、番号案内の女性、そのあとの音声案内はのんびりと間延びしたように番号を教えてくれる。歯の痛みでイライラしながら、番号を

テーブルに広げていたレポート用紙に書き取る。
　ピッピッピッ。
　早速、携帯で奥田歯科医院に電話を掛ける。
「もしもし、奥田歯科医院ですか……。あの、夕べから歯が痛くて……。あの……、これから診ていただけませんか？　はい……、あっ、ありがとうございます。急患で診ていただけるんですね！！　はい、午後３時ですね。……星井奈菜といいます……。はい、左の奥歯がズキンズキンと痛むんです……。はい、すぐ行きますので、よろしくお願いします」

　このワンルームマンションは学校までバスで２０分のところにある。化粧もそこそこに身支度を整え、マンションを出て、バス停に向かう。
　ブゥゥゥゥーーーー。
「あっ！！　ちょっと待って！！　バス待って！！」歯の痛みをこらえ、バス停に向かって走るが、バスは気づかずいってしまった。
　いまのバスは２時２０分だ。次は２時３５分までない。早く来て欲しいのに、こういうときに限りなかなか来ない。歯は痛い、バスは来ない……。思わず、左頬を押さえる。奈菜はイライラしながら待った。
　やっと来たバスにすばやく乗り込む。早く学校に着いて欲しいのになかなか着かない。
「次は、純姫女子学園前～、純姫女子学園前～」バスの音声が案内する。
　バスを降り、一目散に奥田歯科医院に向かう。マットを踏み、自動ドアの中へと駆け込むようにはいる。受付には、年配の上品な女性が座っている。待合室には歯医者特有の消毒液の匂いと時折タービンの音が聞こえるのだが、歯の痛みに苦しんでいる奈菜には、耳に入らない。
「すみません！！　さきほど電話した星井奈菜ですが……」奈菜は左頬をハンカチで押さえながら告げる。
「はいはい、聞いています。保険証をお願いできますか……」
　奈菜は保険証をトートバッグから取り出し、渡した。受付の時計は午

後３時をすこし過ぎたところだ。
「すぐに、先生に診てもらいますからねー。かすみちゃぁーん、急患の患者さん、星井奈菜さん、おみえになったわー。お願い」と受付の女性は診察室の方に声を掛ける。
　カチャッ
　すぐに診察室のドアが開き、歯科衛生士の長澤かすみが顔を出した。
「星井奈菜さんですね。お待ちしておりました。すぐに診察室にお入り下さい」

「荷物はこちらにお入れ下さい」とかすみは診察室のドアの所にある荷物棚をさす。奈菜は荷物棚にトートバッグを入れ、ハンカチを手にかすみに右から２番目のピンクの歯科ユニットに案内された。
「こちらの治療台にお掛け下さい」
　奈菜がユニットに座ると、すかさず、かすみは水色の歯科エプロンを奈菜の胸にかける。奈菜は歯の痛みで周りが目に入らず、はやく診てほしいとだけ思っている。幼い頃、歯科治療は受けているのだが、遠い記憶の彼方であり、虫歯治療がどういったものであったかはうっすらとしか記憶していない。ただ、周りを取り囲むものものしい治療器具に威圧感は感じていた。
　ふと見ると、かすみは奈菜の治療準備をほぼ整えていた。足音がしてきて、女性の歯科医師が歯科医用の椅子に腰掛けた。
「星井奈菜さん、ですね。担当医の奥田麻帆です。こちらは歯科衛生士の長澤かすみです。ひどく痛むということでしたね……？」
　奈菜は左頬を押さえながら「はい、夕べからズキズキ痛み出しちゃって……、夜も眠れないくらいで……」と麻帆先生にいった。
〝ずいぶん若い先生ね。衛生士の人も若いし……。私と年近いんじゃない？〟と奈菜は麻帆先生、かすみを見て思った。
「それは、大変でしたね。じゃあ、とりあえず診てみましょうか。椅子倒しますねー」麻帆先生はユニットのペダルを踏み、ユニットはゆっく

りと倒れる。奈菜の口元が麻帆先生の手元に近づく。すかさず、かすみが無影灯を点け、奈菜の口元を照らす。麻帆先生がデンタルミラーと探針を手に持ち、
「はい、おおきく開けてください」と奈菜が口を開けるのを促す。奈菜が一瞬躊躇するのを見て、かすみが、
「大丈夫ですよー。肩の力を抜いてリラックスしてくださぁーい」という。
　奈菜は、ふと口を開けた。
「あーっ。これはだいぶひどいですねー。痛かったでしょうー」と麻帆先生が左下６番を診ながらいう。
「ふぁい」奈菜は口にデンタルミラーと探針が入っているため、返事が変になった。
「うーん、奈菜さん、一度も歯医者にいったことがないのですか？　すいぶんあちこちに虫歯をため込んでいるようですけど……」
「えっ、いえ歯医者さんには行ったことがありますけど……でも、最近は行ってません。高校２年のころに行ったのが最後だったと思います」
「そうですか」と麻帆先生は奈菜の目を見て、
「奈菜さん、これから治療を進めていきますが、かなり長い期間通ってもらうことになると思います」といった。続けて「はっきりいって、ほとんどの歯が虫歯です。虫歯は治さないと進行するばかりですし、時間はかかりますががんばって通ってください。いいですね？」と念を押された。
「はぃ……」奈菜はほとんどの歯が虫歯と聞いて、恥ずかしさとともにショックを受けた。そして幼いころの記憶が鮮明によみがえった……。

　歯医者の治療台に座っている奈菜。虫歯を削られて泣いている。
「奈菜ちゃん、よくがんばったねー。もう削るの終わりだよー。だから泣かないで。ねっ。……でも、奈菜ちゃんは歯の質が弱いから、ちゃ

んと歯磨きしないとダメだよ。それから甘い物も食べ過ぎないようにすること。いいね」
　歯医者が注意する……。

　奈菜は、受験勉強が忙しくなった頃から歯磨きを怠けたことを今更ながらに後悔した。〝はっ、でも私の奥歯って虫歯予防のためにシーラントをしてたんじゃ……〟
「先生」
「なんですか？」
「私、昔歯医者さんで虫歯予防のためにシーラントをしてたんですが……」
「そうね、奈菜さんの奥歯はシーラント処置はされていますが、だいぶ昔にされたんでしょう？」
「はい」
「ところどころに残ってるけど、もうほとんど残っていませんね。それに残っているところも、シーラントと歯の間から虫歯になってるわ」
「そぅ……ですか」奈菜はシーラントが予防を果たしてなかったと聞いてまたしてもショックを受けた。
「シーラントをしても、定期的に検診を受けることで、効果を発揮するのよ。……とりあえず、今日は痛む歯の処置を優先します。この歯は神経を抜かないとダメだから、今日は削って神経を取るところまで治療します。歯全体のくわしいレントゲンは次回の治療の時に撮りますね」
「はぃ」奈菜は消え入りそうに返事をする。
　麻帆先生は、かすみにカルテをつけるようにいい、奈菜の歯式を呼び上げる。「……左上８番Ｃ１、７番Ｃ２、６番Ｃ２、５番Ｃ２、４番Ｃ２、３番Ｃ１、２番Ｃ２、１番Ｃ２、右上１番Ｃ２、２番Ｃ１、３番Ｃ１、４番Ｃ２、５番Ｃ２、６番Ｃ３、７番Ｃ１、８番Ｃ１。下へ行きます。左下８番Ｃ２、７番Ｃ２、６番Ｃ３、５番Ｃ２、４番Ｃ２、３番Ｃ１、２番から右の２番まで斜線、３番Ｃ１、４番Ｃ２、５番Ｃ２、６番

Ｃ２、７番Ｃ３、８番Ｃ１……」

奈菜は、おなじみの虫歯をあらわすカリエスのＣを聞いて、悲しくなった。しかも麻帆先生が呼び上げるその記号はほとんどの歯に及んでいるのである。〝私、せっかくきれいな歯を保ってきたのに、なんてばかなことをしたんだろ……〟悔やんでも悔やみきれない。その間にも奥歯は痛んでいる。

ユニットが起き上がる。

「お口ゆすいでください」と麻帆先生にいわれ、クチュクチュと口をゆすぐ。コップの水はぬるくにしてあるのであまり歯に染みなかった。再びユニットが倒れる。かすみがライトを点ける。

「はい、おおきくお口開けてください」

奈菜がいわれるままに口を開けると、麻帆先生はかすみから麻酔液のカートリッジが装着された注射器を受け取り、デンタルミラーで奈菜の左頬を引っぱり、スペースをつくると、注射器を左下の６番の歯茎に刺す。

「ううっ」チクッとした痛みが歯茎に走り、そのあと薬液の注入されるズーンとした重い痛みが歯茎に広がる。

「はい、すこーしがまんしてくださいねー」

「奈菜さん、大丈夫ですよー」麻帆先生とかすみが奈菜に呼びかける。

「はい、もう１本打ちますねー」

〝ええっ。まだ注射打つのー〟奈菜はついいまの痛みを思い出しいやな気分だったが、麻帆先生は容赦なく２本目の麻酔注射を打った。再び広がる薬液が注入される痛み……。やがて、２本目の麻酔液のカートリッジも空になった。

「麻酔が効くまで少しお休みしますねー」麻帆先生は、ワゴン台の方に向き、奈菜のカルテを書き出した。かすみはいったんライトを消してくれる。まぶしさはなくなったが、麻酔注射を２本も打たれたことで、奈菜はこれからの治療がどんなものになるのか、すごく不安だった。５分ほどが経過し、麻帆先生は奈菜に向き直った。ライトが点灯される。麻

帆先生は奈菜に口を開けさせ、デンタルミラーの柄の部分で奈菜の左下６番を叩き、麻酔が効いているかを確かめた。奈菜は左頬全体が痺れたようになっており、「痛む？」という麻帆先生の問いかけに、ぷるぷると首を横に振った。

麻帆先生は、奈菜の左側にふくみ綿をふくませ、治療のためのスペースを確保する。

次に麻帆先生は、ユニットのアームからのびるテーブルの上のバーチャージャーからバーを選び、ハンドピースを装着したエアータービンにバーをつける。かすみは、バキュームを構える。

「お口開けてください。おおきくアーン」麻帆先生はタービンを構えて、奈菜に口を開けるように促す。

「麻酔が効いているから大丈夫だと思いますけど、痛かったら左手を挙げていってください」

奈菜は、目を閉じ、おそるおそる口を開けた。奈菜の左下６番のう蝕した６歳臼歯にドリルがあてがわれ、回転を始めた。虫歯に侵された部分がドリルで抉られる。

キュイーン、キュイ、キュイ、キュィーン、キィーン。

コォー、コォォォォーーー。ジュ、ジュ、ジュー。

麻帆先生は、大胆な手つきで、奈菜の虫歯を削る。削り始めて１分もしないうちに、奈菜はキーンとした鋭い痛みを感じた。〝痛いっ！！〟奈菜は身を捩り、左手を挙げた。

キュウウウーーーン。

タービンが止まる。麻帆先生は、かすみにもう１本麻酔注射を用意するようにいう。

奈菜の左下６番の歯茎に再び麻酔注射が打たれる。前の麻酔が効いているので今度は余り痛くない。しばらく待って、奈菜の口に再びタービンが入る。

キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイイーン。

コォォォォーーー、コォー。ジュポ、ジュポ、ジュポポポポー。

しかし、麻酔は効かず、奈菜は今度は削り始めて３０秒もしないうちに顎を突き抜けるような痛みを感じた。〝痛いっ！！　先生､痛いっ！！〝思わず、身を動かした。左手を挙げる。

「ふぅぅぅうん、んんっ」

キュウウウーーーン。

奈菜は目尻に涙の粒が浮かんでいる。

「かすみちゃん、もう１本麻酔お願い」と麻帆先生はいい、タービンをユニットのテーブルに戻し、かすみに指示した。

「はい、先生」かすみから麻帆先生にまたもや麻酔カートリッジの装着された注射器が渡される。

「はい、もう１本打ちますよー」奈菜の口に麻酔注射が吸い込まれ、左の歯茎に針が刺さる。カートリッジの中の麻酔薬が歯茎に注入される。歯茎に異物が入ってくる感覚はあるが、前の麻酔が効いているので、痛みはあまりない。それでも奈菜は声を出していた。「ううううっ……」

「はぁーい、奈菜さん、がまんしてくださぁーい。大丈夫ですよー」かすみが奈菜に声をかける。

〝ちっとも大丈夫じゃないわ……。なんで、麻酔が効かないのよ！！なんで、こんなに痛いの！？〝奈菜は口を開けて麻酔注射を打たれながら､思った。〝でも虫歯つくったの私だし……〝奈菜は治療の痛みで、感情がない交ぜになっている。またしばらく待つ。

麻帆先生はもう一度麻酔が効いたか、奈菜の歯をデンタルミラーの柄でコンコンとたたき確かめる。

「痛む？」

「えぇーえ」と奈菜は答える。痛みは感じなかったので〝いいえ〝と答えたかったのだが、口を開けたままなので、返事が変になる。

麻酔が効いたのを確かめると、麻帆先生はふたたび奈菜の口にタービンを挿入し、う蝕した左下６番にあて、ドリルで削り出す。

キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイイーン。

キュ、キュ、キュイイイーーーン。キュイン、キュイン。

コォー、コォォォー。ジュッ、ジュ、ジュポポポポーーーー。

またもや削りだしてから３０秒を過ぎた頃に、強い痛みが奈菜を襲う。下顎の骨にひびくようだ。〝痛いっ痛いっ！！　いたたたたーっ！！もうやめてぇー！！〟ひざを曲げ、足をＸ形に閉じ、身を捩る。顔をしかめて、声を出し、左手を挙げる。

キュイイイイーン。キュウウウーーーン。

タービンが止まる。奈菜の目は真っ赤だ。ハンカチでそっと涙を拭う。〝短大生にもなって、歯医者さんで泣きべそをかくなんて……〟奈菜は少し恥ずかしい。

「だいぶ痛い？」麻帆先生が奈菜に優しく聞く。

「はぃ……。痛いです」奈菜は涙目で答える。

「うーん。虫歯が深く進行してて、神経の炎症がひどいから麻酔が効きづらいのね。それに下顎は麻酔が聞き難いところだし……」

「ぐすんっ」奈菜は鼻をすする。

「このまま、薬を入れて閉じても、痛み出すと思うし……。ねえ、奈菜さん。ちょっと痛いけど、直接神経に麻酔を打って治療しましょう。そうすれば、削る痛みやそのあとの神経をとるときに痛くないから」

奈菜は直接神経に麻酔を打つと聞いて怖かったが、削る痛みに耐えられないと思ったので、ついこくりと頷いてしまった。

「かすみちゃん、もう１本麻酔をお願い」

「はい、先生」とかすみは、麻酔のカートリッジを薬品ケースから取り出し、注射器に装着して、麻帆先生に渡した。

「それから、アングルワイダーをお願い」

「はい」かすみから麻帆先生に開口器が渡される。

「奈菜さん、安全のために、一時アングルワイダーをつけますね。お口開けてください」

奈菜は、はじめてみる開口器に不安が募ったが、しかたなく口を開ける。奈菜の口の両端をかすみが広げ、麻帆先生が奈菜の口に開口器を装着する。〝やだ。恥ずかしい……〟奈菜は赤くなった。

次に麻帆先生は麻酔注射を構えると、かすみに目配せをする。かすみは、麻帆先生の意図を察知し、すばやく奈菜のからだを抑える。

〝えっ、なに！？　なにがはじまるの？〟奈菜はわけがわからず、気が動転した。

開口器で口を閉じられない奈菜の口に、麻帆先生が持つ麻酔注射が入り、今削っていた虫歯の穴に吸い込まれる。そしてむき出しの神経に針が刺さる。

「！！　ひははははぁーーーーい！！　ひはあーーいいいいいっ！！　はふへへーーーっ！！」奈菜は薬液が虫歯に侵されている神経に浸透し、ひきちぎられるような痛みを感じて、声を上げる。からだがビクンと動くが、かすみに抑えられていて、この状況から逃れることはできない。

「ひはい、ひはああーーい！！　へんへひーーーっ！！」

「そうねー。ちょっと痛いわねー。がまんしてねー」麻帆先生は容赦なく、虫歯の神経に薬液を注入する。奈菜の目から一筋の涙が流れたかと思うと、止めどなく涙が溢れてくる。

「ワアーン、エッ、エッ、エッ」奈菜は泣き出してしまった。「！？」奈菜は、虫歯の神経に直接麻酔注射を打つ痛みに、おしっこをちびってしまったことに気がついた。先生には恥ずかしくていえない。

「ごめんねー、奈菜さん。でも次の治療は楽になるから」

ようやくすべての麻酔液が注入された。奈菜は、短大生にもなって歯の治療で泣いたことが恥ずかしいと思ったが、それ以上におしっこをちびったことが恥ずかしい。おもわず赤くなる。

しばらくたって、麻帆先生がもう一度麻酔が効いているかをデンタルミラーの柄で叩き確かめる。奈菜の口にタービンとバキュームが入れられ、みたび虫歯が削られる。

キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイイーン。

コォー、コォー、コォオオオーーーー。ジュ、ジュッ、ジュポポポポーーーー。

キュイーン、キュイーン、キュィーン。チュイーン。

今度は、虫歯の穴に直接麻酔を打ったのが効いたのか、奈菜はあまり痛さを感じなかったが、それでもときおりチクッとする痛みを感じ、そのたび
「うん、ふん、ふぅうん」を声を上げていた。そのたびに麻帆先生とかすみは、
「もうちょっとだよー。がんばってー」と奈菜を励ます。
キュイイイイイーーーン。
ジュポポポポーーーーー。
ようやく、削る治療が終わった。ユニットが起こされる。
「奈菜さん、よくがんばったわねー。いったんお口ゆすぎましょ」麻帆先生がいう。
奈菜はハンカチで目尻の涙を拭くと、コップの水を含み、クチュクチュと口をゆすいだ。麻酔が効いているため、唇が痺れており、口から水が漏れる。ユニットが倒される。麻帆先生は、ふたたび、かすみから開口器を受け取ると、
「奈菜さん、治療の安全のためにもう一度アングルワイダーをつけますねー」とかすみに奈菜の口を開けさせ、開口器を装着する。次に麻帆先生はリーマとデンタルミラーを手に持ち、奈菜の口に近づける。
〝えっ！？　今度はなに！？　あの針みたいなのはなに？〟奈菜は目を見張って、不安げな表情だ。それを察知した麻帆先生は、
「奈菜さん、この治療器具で、奈菜さんの虫歯に侵された神経を取るの。麻酔が効いているから痛くないわ」と答え、削られて形成された左下６番の穴の中にリーマを入れる。見開いた奈菜の目に純姫女子中学の制服を着た女の子が隣のブルーのユニットに案内されているのが見えた。
麻帆先生はリーマを使い、奈菜の虫歯菌に侵された神経を絡め取る。コリコリ、ゴシゴシ、根を掃除して、絡め取った神経をガーゼに拭き取っては、また掃除を続ける。
「ふぅん、ふん、んぁ、うぅぅぅぅ〜、ふぅぅ〜ん」
「はい、痛くない、痛くない、がんばって」

「もう少しがまんして。もうすぐ終わるから」かすみと麻帆先生が交互に奈菜を励ます。
「ふうん、ふん、ふん」
　麻帆先生は、リーマとファイルを大胆に、そして巧みに使い、根管治療を続けていた。麻酔が効いているとはいえ、神経を引きちぎる痛さに奈菜は半べそで治療を受けている。
　ようやく、奈菜の虫歯菌に侵された神経は、麻帆先生によってすべて取り除かれた。麻帆先生はシリンジを奈菜の歯に吹きかける。
　シュッ、シュッ。
〝ううっ！！　染みるー〟
　ヨードグリセリンで奈菜の歯を消毒し、ガーゼをヨードグリセリンに浸したものを詰めてセメントで仮封をする。ユニットが起こされる。
「はーい。奈菜さん、お疲れさま。今日の治療はこれで終わりよ。お口よーくゆすいでね」
　奈菜は過酷な治療に少し放心状態だったが、のろのろと口をゆすぐ。
「奈菜さん、そのまま聞いて。奈菜さんがここまで虫歯つくっちゃったのは、不摂生な生活が原因だと思うんだけど……」と麻帆先生は奈菜の目を見る。奈菜は図星を指され、こくりと頷くほかなかった。
「やっぱり……。奈菜さんは歯並びもとってもきれいだし、もったいないことよー。これからは規則正しい生活をして、ちゃんと歯磨きすること。それから、診たところ奈菜さんは歯質は余り強くなさそうだから、定期検診をちゃんと受けること。今回の治療が終わったら、ブラッシング指導も受けてね。いいわね」
「はぃ」奈菜はもう一度頷く。
「奈菜さん、私がブラッシングの基礎を教えますから、よろしくね」とかすみがにっこり微笑んでいう。
「はぃ。お願いします」奈菜は返事をしたが、過酷な治療で元気がない。
「じゃあ、今日の治療はこれでおしまい！！　今日治療したところは次回に診てみて状態が良ければ、クラウン、被せもののことなんだけど、

クラウンをつけるための土台をたてます。まだ炎症がのこっているようだと、もう一度根の掃除をします。それから他にたくさんある虫歯は痛み出すといけないので、ひどいものから優先的に治療していきます……。それからもうひとつ、今日治療したところは痛むかもしれないから、痛み止めの薬と炎症を抑える薬を出します。炎症を抑えるお薬は処方を守ってちゃんと飲んでね。いい？　また治療した側ではあまり堅いものは噛まないこと」
「で、次回の治療なんだけど……、４日後の金曜日でいいかな？　時間は？」
「はい……。金曜日で大丈夫です……。時間は朝からがいいんですけど……」
「じゃあ、午前１１時はどうかな？……」
　奈菜はこくりと頷いた。
「それで決まりね。金曜日の１１時に予約しとくわね」
「失礼しまーす」かすみが歯科エプロンをはずし、スリッパを整えてくれる。奈菜は治療が終わったという安堵感から、疲れを感じた。治療した歯はまだズキズキと疼く。ハンカチで左頬を押さえながら診察室のドアへいく。
「それじゃあ、お大事にね」
「お大事に」麻帆先生とかすみが声を掛けてくれる。奈菜は振り返り、会釈をした。
　トートバッグを持ちハンカチで左頬を押さえたままドアを開け、待合室に出る。

　待合室には、純姫女子高校の制服を着た女の子がソファーで順番を待っているのが見えた。
　痛みをこらえながら、急いでトイレに行く。治療中、あまりの痛さにおしっこをちびってしまったからだ。トイレのドアを開け中に入る。パンツとお気に入りの水色のショーツを下ろし、ショーツを見る。奈菜は１週間

前から生理中である。いつもはタンポンを使っている奈菜だが、どういうわけか今回の生理は重く、タンポンの他にナプキンもつけている。

ナプキンをみると、あそこが当たる部分に黄色い染みがついている。まだ暖かい。

〝やだ、恥ずかしい！！　短大生にもなって、虫歯の治療が痛くておもらししちゃうなんて……〟奈菜は、ポッとほほが赤くなるのを感じた。〝でもよかったぁ、ナプキンもつけてて……〟トイレの三角ポットにおしっこの染みのついたナプキンを捨てた。あたらしい羽根つきナプキンをトートバッグの中にあるポーチから取り出し、ショーツの股間が当たる部分につける。ショーツとパンツをあげ、トイレから出て、化粧台で髪の乱れなどを直す。

気になるので、舌で治療した左側をさぐると、歯がない。〝あれ！？歯がない！！　えっ、なんで！？〟

おそるおそる口を開け、鏡をみると、左下６番の歯は原型をとどめないほど小さく削られていて、周りの歯より一段低くなっている。奈菜は、それを見てまたもやショックを受け、涙が溢れてくる。ハンカチで涙を拭い、待合室に戻る。

待合室に戻ると、純姫女子高校の制服を着た女の子はもういない。順番が来たのか……。かわりにさきほど奈菜が受けたようなキュイーン、キュイーンと虫歯を削って治療するタービンの音が聞こえる。ときどき女の子のむせぶ声も聞こえる。

「星井奈菜さーん」受付から奈菜を呼ぶ声がしたので、受付に行き、会計を済ませ、薬を受け取る。

ようやく治療から解放され、奥田歯科医院の外に出る。

〝はぁ〜、いやだあー。こんな痛い治療がまだ続くなんて……〟金曜日にまた痛い治療を受けなければならないかと思うと、奈菜は憂鬱だった……。

それから１ヶ月半が過ぎた頃……。奈菜の治療はまだまだ続いていたが、最初に治療を受けた歯は銀色に輝くクラウンが装着されていた。ほかにもインレーやレンジが詰められて治療が終わった歯もあったが、まだまだ仮封の歯がたくさんあり、治療が続いていることが分かる。

なにより奈菜の生活でかわったのは、虫歯の治療に奥田歯科医院に通ううちに、歯やからだの健康の大切さを考えるようになり、奥田歯科医院で歯科助手のアルバイトを始めたことだ。短大を卒業したら、歯科衛生士の長澤かすみ、石原紗季の母校である皓歯大学歯学部附属歯科衛生士専門学校に進学するか、昨年開設されたばかりの皓歯大学歯学部口腔衛生保健学科の３年次の編入試験を受けて、奈菜も歯科衛生士になろうと思っている。真希先生や麻帆先生、かすみや紗季に相談すると大賛成で応援してくれた。そのための受験勉強もがんばっている。けれど、高校の受験勉強の時に歯磨きを怠けて、さらに短大に入ってからも歯磨きをあまりせず、虫歯をたくさんつくってしまい、痛い思いをしたという轍は二度と踏まないようしようと思っている。もう歯の痛みはこりごりだ。

夏休み間近の奥田歯科医院は、今日も純姫女子学園の女生徒の患者たちでいっぱいだ。

「小出さぁーん、小出晴夏さぁーん、診察室へどうぞー。お入り下さい」

純姫女子高校の制服を着た女の子が不安そうな表情で立ち上がる。

「晴夏ちゃん、大丈夫よ。真希先生はとっても優しいから、治療痛くないよ。あっ、ていうまに終わっちゃうよ。虫歯治してきれいな歯取り戻すため、がんばろ。ねっ！！」奈菜の明るい声と患者の不安を取り除く笑顔が、待合室に映える……。

歯科診療録(児童・生徒用)

〇〇地区歯科医師会学校歯科医部会調製

患者・受診者					
ふりがな	わかつき　のぞみ				
氏名	若　槻　希　美				
生年月日	1991 年　5 月　13 日生 （14歳）			性別	男・女
住所				電話番号	
学校名	純姫女子学園中等部	学年	2 年	保護者名	
初診日	2005 年　6 月　5 日				
終了日	年　月　日				
再診予定					
[主訴]その他摘要	急患。痛みをうったえる。前々日、前日は痛みでよく眠れない。 右下奥歯の修復物離脱による二次う蝕の進行。				

術前歯式	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
		／	〇	／	C2	／	／	／	C1	C1	／	／	C2	〇	／	
	上 右			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	左 上		
	下			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	下		
	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
		〇	C3”	C1	／	／	／	／	／	／	／	／	／	〇	／	
術後歯式	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
	上 右			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	左 上		
	下			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	下		
	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8

部位	傷病名	職務	開始	終了	転帰
6	急化Pul	上外	2005/6/5		
1、2	C	上外	2005/6/12	2005/6/12	治癒
		上外			
		上外			
		上外			

〇〇地区歯科医師会学校歯科医部会調製
歯科診療録(児童・生徒用)統一様式

月日	部位	療法・処置および経過
2005/6/5	6┐	う蝕罹患歯質切削後、抜髄。根管治療。
		ヨードグリセリン消毒。仮封。鎮痛剤処方。
2005/6/12	6┐	根管治療。ヨードグリセリン消毒。仮封。
		次回切削の上、メタルコア築造予定。
	└1、2	う蝕罹患歯質切削後、レジン修復。

歯科診療録(児童・生徒用)

〇〇地区歯科医師会学校歯科医部会調製

患者・受診者					
ふりがな	わかつき　まなみ				
氏名	若　槻　愛　美				
生年月日	1988 年　9 月　18 日生 (16歳)			性別	男・女
住所				電話番号	
学校名	純姫女子学園高等部	学年	2 年	保護者名	
初診日	2005 年　6 月　5 日				
終了日	年　月　日				
再診予定					
[主訴]その他摘要	学校歯科検診でう蝕が見つかる。妹とともに来院。特記すべき症状はないが、エアーで染みる歯がある。				

術前歯式	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
		〇	〇	C2"	〇	／	／	C1	C1	C1	／	〇	〇	〇	C1	
	上 右			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	上 左		
	下			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	下		
	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
		〇	〇	〇	／	／	／	／	／	／	／	／	／	C2"	〇	
術後歯式	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
	上 右			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	上 左		
	下			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	下		
	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8

部位	傷病名	職務	開始	終了	転帰
6	C"	上外	2005/6/5	2005/6/12	治癒
5	C"	上外	2005/6/12		
1 1、2	C	上外	2005/6/12	2005/6/12	治癒
		上外			
		上外			

〇〇地区歯科医師会学校歯科医部会調製
歯科診療録(児童・生徒用)統一様式

月日	部位	療法・処置および経過
2005/6/5	┌6	インレーの除去後、う蝕罹患象牙質切削。
		ホルマリントリクレゾールで消毒。印象取得後、仮封。
2005/6/12	┌6	仮封除去後、消毒。インレーにて修復。
	5┘	う蝕罹患歯質切削後、ホルマリントリクレゾールで消毒。
		印象取得後、仮封。次回、インレー修復予定。
	1┘ └1、2	う蝕罹患歯質切削後、レジン修復。

歯科診療録(児童・生徒用)

〇〇地区歯科医師会学校歯科医師会調製

患者・受診者				
ふりがな	とみた め い			
氏名	富 田 芽 以			
生年月日	1992 年 2 月 12 日生 (13歳)	性別	男・女	
住所		電話番号		
学校名	純姫女子学園中等部	学年	2 年	保護者名
初診日	2005 年 6 月 5 日			
終了日	年 月 日			
再診予定				
[主訴]その他摘要	学校歯科検診でう蝕が見つかる。			

術前歯式																
	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
		／	〇	／	／	／	／	／	／	／	／	／	C1	〇	／	
	上 右 下			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	上 左 下		
				E	D	C	B	A	A	B	C	D	E			
	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
		C2	〇	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	〇	C1	
術後歯式	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
	上 右 下			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	上 左 下		
				E	D	C	B	A	A	B	C	D	E			
	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8

部位	傷病名	職務	開始	終了	転帰
7	C	上 外	2005/6/5		
		上 外			
		上 外			
		上 外			
		上 外			

〇〇地区歯科医師会学校歯科医部会調製
歯科診療録(児童・生徒用)統一様式

月日	部位	療法・処置および経過
2005/6/5	7┐	う蝕罹患歯質切削後、ホルマリントリクレゾールで消毒。 印象取得。仮封。次回、インレーにて修復予定。

歯科診療録(児童・生徒用)

〇〇地区歯科医師会学校歯科医部会調製

患者・受診者					
ふりがな	ほりきた ゆい				
氏名	堀 北 結 衣				
生年月日	1991 年 6 月 11 日生 (14歳)			性別	男・女
住所				電話番号	
学校名	純姫女子学園中等部	学年	2 年	保護者名	
初診日	2005 年 6 月 12 日				
終了日	年 月 日				
再診予定					
[主訴]その他摘要	学校歯科検診でう蝕が見つかる。				

術前歯式	8	7 ／	6 〇	5 ／	4 C1	3 ／	2 ／	1 ／	1 C2	2 C2	3 ／	4 ／	5 ／	6 〇	7 〇	8
	上 右 下			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	上 左 下		
				E	D	C	B	A	A	B	C	D	E			
	8	7 C3	6 〇	5 ／	4 ／	3 ／	2 ／	1 ／	1 ／	2 ／	3 ／	4 ／	5 C2	6 〇	7 〇	8
術後歯式	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
	上 右 下			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	上 左 下		
				E	D	C	B	A	A	B	C	D	E			
	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8

部位	傷病名	職務	開始	終了	転帰
7	Pul	上外	2005/6/12		
		上外			
		上外			
		上外			
		上外			

〇〇地区歯科医師会学校歯科医部会調製
歯科診療録(児童・生徒用)統一様式

月日	部位	療法・処置および経過
2005/6/12	7┐	う蝕罹患象牙質切削。ペリオドン貼付。仮封。 次回、抜髄および根管治療予定。 鎮痛剤および消炎剤処方。

歯科診療録(児童・生徒用)

〇〇地区歯科医師会学校歯科医部会調製

患者・受診者					
ふりがな	なかね か ほ				
氏名	仲 根 夏 帆				
生年月日	1988 年 6 月 30 日生 (16歳)		性別	男・女	
住所			電話番号		
学校名	純姫女子学園高等部	学年	2 年	保護者名	
初診日	2005 年 6 月 12 日				
終了日	年 月 日				
再診予定					
[主訴]その他摘要	学校歯科検診でう蝕が見つかる。				

	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
術前歯式		C2	〇	／	／	／	／	／	C1	／	／	〇	／	〇	〇	
	上 右			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	上 左		
	下			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	下		
	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
		〇	〇	〇	／	／	／	／	／	／	／	／	C2	〇	〇	
術後歯式	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
	上 右			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	上 左		
	下			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	下		
	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8

部位	傷病名	職務	開始	終了	転帰
7	C	上 外	2005/6/12		
		上 外			
		上 外			
		上 外			
		上 外			

〇〇地区歯科医師会学校歯科医部会調製
歯科診療録(児童・生徒用)統一様式

月日	部位	療法・処置および経過
2005/6/12	7」	う蝕罹患歯質切削後、印象取得。 ヨードグリセリンおよびホルマリントリクレゾールで消毒。 仮封。次回、インレーにて修復予定。

歯科診療録(児童・生徒用)

〇〇地区歯科医師会学校歯科医部会調製

患者・受診者					
ふりがな	あいざわ　ゆき				
氏名	相　澤　由　紀				
生年月日	1993 年　7 月　24 日生 (11歳)			性別	男・女
住所				電話番号	
学校名	皓歯大学教育学部附属小学校	学年	6 年	保護者名	相澤　彩夏
初診日	2005 年　6 月　12 日				
終了日	年　月　日				
再診予定					
[主訴]その他摘要	学校歯科検診でう蝕が見つかる。母親に連れられて来院。				

術前歯式	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
		／	〇	／	C2	／	／	／	／	／	／	／	／	〇	CO	
	上 右 下			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	上 左 下		
				E	D	C	B	A	A	B	C	D	E			
	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
		C2	〇	C2	／	／	／	／	／	／	／	／	／	〇	C2	
術後歯式	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
	上 右 下			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	上 左 下		
				E	D	C	B	A	A	B	C	D	E			
	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8

部位	傷病名	職務	開始	終了	転帰
7	C	上外	2005/6/12		
		上外			
		上外			
		上外			
		上外			

〇〇地区歯科医師会学校歯科医部会調製
歯科診療録(児童・生徒用)統一様式

月日	部位	療法・処置および経過
2005/6/12	7┐	う蝕罹患象牙質切削後、印象取得。 ヨードグリセリンにて消毒。仮封。 次回インレーによる修復予定。

歯科診療録(児童・生徒用)

〇〇地区歯科医師会学校歯科医部会調製

患者・受診者					
ふりがな	ほしい な な				
氏名	星 井 奈 菜				
生年月日	1985 年 11 月 14 日生 (19歳)			性別	男・女
住所				電話番号	
学校名	純姫女子学園短期大学	学年	2 年	保護者名	
初診日	2005 年 6 月 5 日				
終了日	年 月 日				
再診予定					
[主訴]その他摘要	急患。前日深夜から左下奥歯のう蝕による激しい痛みが起こる。前夜は痛みでよく眠れず。				

術前歯式

8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
C1	C1	C3	C2	C2	C1	C1	C2	C2	C2	C1	C2	C2	C2	C2	C1
上 右			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	左 上		
下			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	左 下		
8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
C1	C3	C2	C2	C2	C1	／	／	／	／	C1	C2	C2	C3	C2	C2

術後歯式

8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
上 右			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	左 上		
下			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	左 下		
8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8

部位	傷病名	職務	開始	終了	転帰
6	急化Pul	上 外	2005/6/5		
		上 外			
		上 外			
		上 外			
		上 外			

〇〇地区歯科医師会学校歯科医部会調製
歯科診療録(児童・生徒用)統一様式

月日	部位	療法・処置および経過
2005/6/5	┌6	う蝕罹患部を切削後、抜髄。根管治療。 ヨードグリセリンにて消毒薬貼付、仮封。 鎮痛剤および消炎剤処方。